

# 仏教聖典

公益財団法人 仏教伝道協会

## 法輪について



法輪とは梵語（サンスクリット）のダルマ・チャクラ Dharma-cakra の漢訳で、車の輪が回り続けるように、未来に向かって永遠に弘められていく仏の教え、すなわち仏法を象徴しています。八つの放射状の輻は、仏教の最も重要な実践徳目である「八正道」（正しいものの方、正しいものの方、正しいものの方、正しいものの方、正しいものの方、正しいものの方、正しいものの方、正しいものの方）を表わしたもので、仏像がつくられる以前の時代には、この法輪が仏教における礼拝の対象として捧まれ、現在では仏教徒共通のシンボルとして国際的に用いられています。

仏の智慧は海のごとく広大にして、仏の心は大慈悲なり。仏は姿なくして妙なる姿を示し、身をもって教えを説かれた。

この本は二千五百余年の間、国を超え民族を超えて保ち続けられてきた五千余巻の仏の教えの精髓である。

ここには仏の言葉が凝縮されており、人びとの生活と心の実際の場面に触れて、生きた解答を与えている。

## 法句經

怨みは怨みによつて果たされず、忍を行じてのみ、よく怨みを解くことを得る。  
これ不変の真理なり。(五)

わが愚かさを悲しむ人あり。この人すでに愚者にあらず。自らを知らずして、賢しと称するは愚中の愚なり。(六三)

戰場において、数千の敵に勝つよりも、自己に勝つものこそ、最上の戦士なり。

(一〇三)

たとえ百歳の寿命を得るも、無上の教えに会うことなくば、この教えに会いし人の、一日の生にも及ばず。(一一五)

人に生まるるは難く、いま生命あるは有難く、世に仏あるは難く、仏の教えを聞くは有難し。(一二二)

もろもろの悪をなさず、もろもろの善を行い、おのれの心を浄くす。これ諸仏の教えなり。(一八三)

子たりとも、父たりとも、縁者たりとも、死に迫られしわれを、救うこと能わず。(二八八)

# 目次

## ほとけ

頁

第一章 史上の仏ほとけ…………… 二

一、偉大な生涯しょうがい…………… 二

二、最後の教え…………… 一〇

第二章 永遠の仏…………… 一五

一、いつくしみと願い…………… 一五

二、救いとその手だて…………… 一九

三、仏はとわに…………… 二三

第三章 仏の姿と仏の徳…………… 二六

一、三つのすがた…………… 二六

二、仏との出会い…………… 三〇

三、すぐれた徳…………… 三三

# おしえ

第一章	因縁 <small>いんえん</small> .....	四〇
-----	------------------------------	----

一、四つの真理.....	四〇
二、不思議なつながり.....	四三

第二章	人の心とありのままの姿.....	四九
-----	------------------	----

一、変わりゆくものには実体がない.....	四九
二、心の構造.....	五三

三、真実のすがた.....	五六
四、かたよらない道.....	六〇

第三章	さとの種.....	六八
-----	-----------	----

一、清らかな心.....	六八
二、かくれた宝.....	七四
三、とらわれを離れて.....	七九

第四章	煩悩 <small>ぼんのう</small> .....	八四
-----	------------------------------	----

一、心のけがれ.....	八四
二、人の性質.....	九一
三、現実の人生.....	九三
四、迷いのすがた.....	九九

第五章	仏の救い.....	一〇六
-----	-----------	-----

一、仏の願い.....	一〇六
二、清らかな国土.....	一一四

## はげみ

第一章	さとりへの道.....	一二〇
-----	-------------	-----

一、心を清める.....	一二〇
二、善い行い.....	一二八
三、仏のたとえ.....	一四〇

第二章	実践の道.....	一五八
-----	-----------	-----

一、道を求めて……………	一五八
二、さまざまな道……………	一七三
三、信仰の道……………	一八六
四、仏のことば……………	一九四

## な か ま

第一章 人のつとめ……………	二〇四
一、出家 <small>しゅっけ</small> の生活……………	二〇四
二、信者の道……………	二一〇
三、生活の指針……………	二二一
第二章 仏国土の建設……………	二三五
一、むつみあうなかも……………	二三五
二、仏の国……………	二四三
三、仏の国をささえるもの……………	二四八
各章節の典拠……………	二五五

## 付 録

一、 仏教通史……………	二六六
二、 仏教聖典流伝史……………	二七五
三、 仏教聖典の由来とあゆみ……………	二七八
四、 生活索引……………	二八一
五、 用語解説……………	二八七
仏教伝道協会について……………	二九六

本聖典中で\*印をつけてあるものは、用語解説に含まれているものである。



BUDDHA

ほ と け

# 第一章 史上の仏ほとけ

## 第一節 偉大な生涯しやうがいの

一、ヒマラーヤ山の南のふもとを流れるローヒニー河のほとりに、釈迦族の都カピラヴァスツがあった。その王シュッドーダナじやうほん（浄飯）は、そこに城を築き、善政をしき、民衆は喜び従っていた。王の姓はゴータマであった。

妃き、マーヤーまや（摩耶）夫人ふにんは同じ釈迦族の一族でコーリヤ族とよばれるデーヴァダハ城の姫で、王の従妹いとこにあたっていた。

結婚の後、ながく子に恵まれず、二十幾年の歳月の後、ある夜、白象びやくせうが右わきから胎内に入る夢を見て懐妊した。王の一族をはじめ国民ひとしく指折り数えて王子の出生を待ちわびたが、臨月近く、妃は国の習慣に従って生家に帰ろうとし、その途中ルンビニー園に休息した。

折りから春の陽はうららかに、アシヨーカの花はうるわしく咲きにおつていた。妃は右手をあげてその枝を手折ろうとし、そのせつなに王子を生んだ。天地は喜びの声をあげて母と子を祝福した。ときに四月八日であつた。

シュッドーダナ王の喜びはたとえようがなく、一切の願いが成就したという意味のシツダールタ（悉達多）という名を王子に与えた。

二、しかし、喜びの裏には悲しみもあつた。マーヤー夫人は間もなくこの世を去り、太子は以後、夫人の妹マハープラジャーパティーによつて養育された。

そのころ、アシタという仙人が山で修行していたが、城のあたりに漂う吉相を見て、城に来たり、太子を見て「このお子が長じて家にいられたら世界を統一する偉大な王となり、もしまた、\*出家して道を修めれば世を救う\*仏にならるであろう。」と予言した。

はじめ王はこの予言を聞いて喜んだが、次第に、もしや出家されてはという憂いを持つようになった。

太子は七歳の時から文武の道を学んだ。春祭に、父王に従って田園に出、農夫の耕すさまを見ているうち、すきの先に掘り出された小虫を小鳥がついばみ去るのを見て、「あわれ、生きものは互いに殺しあう。」とつぶやき、ひとり木陰に坐すわって静思した。

生まれて間もなく母に別れ、今また生きもののかみあう有様を見て、太子の心には早くも人生の苦悩が刻まれた。それはちようど、若木につけられた傷のように、日とともに成長し、太子をますます暗い思いに沈ませた。

父王はこの有様を見て大いに憂うれい、かねての仙人せんじんの予言を思いあわせ、太子の心を引き立てようという企てた。ついに太子十九歳のとき、太子の母の兄デーヴァダハ城主スプラブダの娘ヤショーダラーを迎えて妃きと定めた。

三、この後十年の間、太子は、春季はる・秋季あき・雨季うきそれぞれの宮殿にあつて歌舞管弦かぶかんげんの生活を楽しんだが、その間もしきりに沈思冥想ちんしめいそうして人生を見きわめようと苦心した。

「宮廷きゆうていの栄華も、すこやかなこの肉体も、人から喜ばれるこの若さも、結局このわた

しにとつて何であるのか。人は病む。いつかは老いる。死を免れることはできない。若さも、健康も、生きていることも、どんな意味があるというのか。

人間が生きていることは、結局何かを求めていることにほかならない。しかし、この求めることについては、誤ったものを求めることと、正しいものを求めることの二つがある。誤ったものを求めることというのは、自分が老いと病と死とを免れることを得ない者でありながら、老いず病まず死なないことを求めていることである。

「正しいものを求めることというのは、この誤りをさとつて、老いと病と死とを超えた、人間の苦悩のすべてを離れた境地を求めることである。今のわたしは、この誤ったものを求めている者にすぎない。」

四、このように心を悩ます日々が続いて、月日は流れ、太子二十九歳の年、一子ラーフラ（羅睺羅）が生まれたときに、太子はついに出家の決心をした。太子は御者のチャンダカを伴い、白馬カクタカにまたがって、住みなれた宮殿を出て行った。そして、この俗世界とのつながりを断ち切つて出家の身となった。

このとき、悪魔は早くも太子につきまどった。「宮殿に帰るがいい。時を待つがいい。この世界はすべておまえのものになるのだ。」太子は叱咤した。「悪魔よ、去れ。すべて地上のものは、わたしの求めるところではないのだ。」太子は悪魔を追い払い、髪をそり、食を乞いつつ南方に下った。

太子をはじめバガヴァ仙人を訪れてその苦行の実際を見、次にアーラーダ・カーラーマと、ウドラカ・ラーマプトラを訪ねてその修行を見、また自らそれを実行した。

しかし、それらは結局さとの道でないと知った太子は、マガダ国に行き、ガヤーの町のかたわらを通れるナイランジャンナー河（尼連禪河）のほとり、ウルヴィルヴァーの林の中において、激しい苦行をしたのである。

五、それはまことに激しい苦行であった。釈尊自ら「過去のどのような修行者も、現在のどのような苦行者も、また未来のどのような出家者も、これ以上の苦行をした者はなく、また、これからもないであろう。」と後に言われたほど、世にもまれな苦行であった。

しかし、この苦行も太子の求めるものを与えなかった。そこで太子は、六年の長きにわたったこの苦行を未練なく投げ捨てた。ナイランジャーナ―河に沐浴して身の汚れを洗い流し、スジャーターという娘の手から乳糜を受けて健康を回復した。

このとき、それまで太子と一緒に同じ林の中で苦行していた五人の出家者たちは、太子が墮落したと考え、太子を見捨てて他の地へ去って行った。

いまや天地の間に太子はただひとりとなった。太子は静かに木の下に坐って、命をかけて最後の冥想に入った。「血も涸れよ、肉も爛れよ、骨も腐れよ。さとりを得るまでは、わたしはこの座を立たないであろう。」これがそのときの太子の決心であった。

その日の太子の心はまことにたとえるものがないほどの悪戦苦闘であった。乱れ散る心、騒ぎ立つ思い、黒い心の影、醜い想いの姿、すべてそれは悪魔の襲来というべきものであった。太子は心のすみずみまでそれらを追求して散々に裂き破った。まことに、血は流れ、肉は飛び、骨は碎けるほどの苦闘であった。

しかし、その戦いも終わり、夜明けを迎えて明けの明星を仰いだとき、太子の心は光

り輝き、さとりは開け、仏ほとけと成った。それは太子三十五歳の年の十二月八日の朝のことであつた。

六、これより太子はぶつだ仏陀、無上むじょうかくしや覚者、如來にょらい、釈迦しゃか牟尼むに、釈尊しゃそん、世尊せそんなどの種々の名で知られるようになった。

釈尊はまず、六年にわたる苦行の間ともに修行してくれた恩義のある五人の出家者しめつけしやに道を説こうとして、彼らの住むヴァーラーナシーのムリガダーヴァろくやおん（鹿野苑）に赴き、彼らを教化した。彼らは最初釈尊を避けようとしたが、教えを聞いてから釈尊を信じ最初の弟子となつた。また、ラージャグリハおうしやしじょう（王舎城）に入つてピンピサーラ王を教化し、ここを教えを説く根拠地として、さかんに教えを広めた。

人びとは、ちようど渴かわいた者が水を求めるように、飢えた者が食を求めるように、釈尊のもとに寄り集まつた。シャーリプトラしやりほつ（舍利弗）、マウドガルヤーヤナもくれん（目連）の二大弟子をはじめとする、二千余人の弟子たちは、釈尊を仰ぎ、その弟子となつた。

釈尊の出家を憂うれえてこれを止めようとし、また釈尊の出家によつて深い苦しみを味

わった父のシュッドーダナ王、養母のマハープラジャーパティー、妃（妃）のヤシヨードラーをはじめとする釈迦族の人たちも、みな釈尊（釈尊）に帰依（帰依）して弟子となった。その他非常に多くの人が彼が彼の信奉者になった。

七、このようにして伝道の旅を続けること四十五年、釈尊は八十歳を迎えた。ラージャグリハ（王舎城）からシユラーヴァステイー（舍衛城）に赴（おもむ）く途中、ヴァイシヤーリーにおいて病を得、「三月の後に涅槃（涅槃）に入るであろう。」と予言された。さらに進んでパーヴァーに至り、鍛冶屋（鍛冶屋）のチュンダの供養（供養）した食物にあたって病が悪化し、痛みを押しつけてクシナガラに入った。

釈尊は城外のシャーラ（沙羅）樹の林に行き、シャーラの大木が二本並び立っている間に横たわった。釈尊は懇ろ（懇ろ）に弟子たちを教え、最期のせつなまで教えを説いて世間の大導師たる仏（仏）としての仕事をなし終わり、静かに涅槃に入った。

八、クシナガラの人びとは、釈尊が涅槃に入られたのを悲しみ嘆き、アーナンダ（阿難）の指示に従って、定められたとおりに釈尊の遺骸（遺骸）を火葬した。

このとき、マガダ国の王アジャータシャトルをはじめとするインドの八つの国々の王は、みな釈尊しやくそんの遺骨いこつの分配を乞うたが、クシナガラの人びとはこれを拒否し、争いが起こった。しかし、賢者ドローナの計らいはかにより、遺骨は八大国に分配された。その他、遺骸いかいの瓶びんと火葬の灰を受けた者があり、それぞれの国に奉安されて、この世に仏ほとけの十の大塔だいとうが建立こんりゅうされるに至った。

## 第二節 最後の教え

一、釈尊はクシナガラの郊外、シャーラ（沙羅）樹の林の中で最後の教えを説かれた。弟子たちよ、おまえたちは、おのおの、自らを灯火ともしびとし、自らをよりどころとせよ、他を頼りとしてはならない。この法ほふを灯火とし、よりどころとせよ、他の教えをよりどころとしてはならない。

わが身を見ては、その汚れを思つて貪むさぼらず、苦しみも楽しみもともに苦しみの因もとであると思つてふけらず、わが心を観みては、その中に「我が」はないと思ひ、それらに迷つてはならない。そうすれば、すべての苦しみを断つことができる。わたしがこの世を去つ

た後も、このように教えを守るならば、これこそわたしのまことの弟子である。

二、弟子たちよ、これまでおまえたちのために説いたわたしの教えは、常に聞き、常に考え、常に修めて捨ててはならない。もし教えのとおりに行うなら常に幸いに満たされるであろう。

教えのかなめは心を修めることにある。だから、欲をおさえておのれに克つことに努めなければならぬ。身を正し、心を正し、ことばをまことあるものにしなければならぬ。貪ることをやめ、怒りをなくし、悪を遠ざけ、常に無常を忘れてはならない。

もし心が邪悪に引かれ、欲にとらわれようとするなら、これをおさえなければならぬ。心に従わず、心の主となれ。

心は人を<sup>ほとけ</sup>仏にし、また、畜生にする。迷って鬼となり、さとして仏と成るのもみな、この心のしわざである。だから、よく心を正しくし、道に外れないよう努めるがよい。

三、弟子たちよ、おまえたちはこの教えのもとに、相和し、相敬い、争いを起こして

はならない。水と乳とのように和合せよ。水と油のようにはじきあつてはならない。

ともにわたしの教えを守り、ともに学び、ともに修め、励ましあつて、道の楽しみをもとにせよ。つまらないことに心をつかい、むだなことに時をついやさず、さとりの花を摘み、道の果実このみを取るがよい。

弟子たちよ、わたしは自らこの教えをさとり、おまえたちのためにこの教えを説いた。おまえたちはよくこれを守つて、ことごとくにこの教えに従つて行わなければならない。

だから、この教えのとおりに行わない者は、わたしに会つていながらわたしに会わず、わたしと一緒にいながらわたしから遠く離れている。また、この教えのとおりに行う者は、たとえわたしから遠く離れていてもわたしと一緒にいる。

四、弟子たちよ、わたしの終わりはすでに近い。別離も遠いことではない。しかし、いたずらに悲しんではならない。世は無常むじょうであり、生まれて死なない者はない。今わたしの身が朽くちた車のようにこわれるのも、この無常の道理を身をもつて示すのである。

いたずらに悲しむことをやめて、この無常むじょうの道理に気がつき、人の世の真実のすがたに眼を覚まさなければならぬ。変わるものを変わらせまいとするのは無理な願いである。

\*煩惱ぼんのうの賊は常におまえたちのすきをうかがって倒そうとしている。もしおまえたちの部屋に毒蛇どくじやが住んでいるのなら、その毒蛇を追い出さない限り、落ちついてその部屋で眠ることはできないであろう。

煩惱の賊は追わなければならない。煩惱の蛇へびは出さなければならない。おまえたちは慎つしんでその心を守るがよい。

五、弟子たちよ、今はわたしの最期の時である。しかし、この死は肉体の死であることを忘れてはならない。肉体は父母より生まれ、食によって保たれるものであるから、病み、傷つき、こわれることはやむを得ない。

仏ほとけの本質は肉体ではない。さとりである。肉体はここに滅びても、さとりは永遠に法と道とに生きている。だから、わたしの肉体を見る者がわたしを見るのではなく、わた

しの教えを知る者こそわたしを見る。

わたしの亡き後は、わたしの説き遺した法がおまえたちの師である。この法を保ち続けてわたしに仕えるようにするがよい。

弟子たちよ、わたしはこの人生の後半四十五年間において、説くべきものはすべて説き終わり、なすべきことはすべてなし終わった。わたしにはもはや秘密はない。内もなく、外もなく、すべてみな完全に説きあかし終わった。

弟子たちよ、今やわたしの最期である。わたしは今より涅槃に入るであろう。これがわたしの最後の教誡である。

## 第二章 永遠の仏

### 第一節 いつくしみと願い

一、<sup>ほとけ</sup>仏の心とは大慈悲<sup>だいじひ</sup>である。あらゆる手だてによって、すべての人びとを救う大慈の心、人とともに病み、人とともに悩む大悲の心である。

ちやうど子を思う母のように、しばらくの間も捨て去ることなく、守り、育て、救い取るのが仏の心である。「おまえの悩みはわたしの悩み、おまえの楽しみはわたしの楽しみ。」と、かたときも捨てることがない。

仏の大悲は人によって起こり、この大悲に触れて信ずる心が生まれ、信ずる心によってさとりが得られる。それは、子を愛することによって母であることを自覚し、母の心に触れて子の心が安らかとなるようなものである。

ところが、人びとはこの仏ほとけの心を知らず、その無知からとらわれを起こして苦しみ、煩惱ぼんのうのままにふるまって悩む。罪業ざいごうの重荷を負つて、あえぎつつ、迷いの山から山を駆けめぐる。

二、仏の慈悲じひをただこの世一生だけのことと思つてはならない。それは久しい間のことである。人びとが生まれ変わり、死に変わりして迷いを重ねてきたその初めから今日まで続いている。

仏は常に人びとの前に、その人びとにもっとも親しみのある姿を示し、救い的手段を尽くす。

釈迦族の太子と生まれ、出家しゅつげし、苦行をし、道をさとり、教えを説き、死を示した。

人びとの迷いに限りがないから、仏のはたらしにも限りがなく、人びとの罪の深さに底がないから仏の慈悲にも底がない。

だから、仏はその修行の初めに四つの大誓願を起こした。一つには誓つてすべての人びとを救おう。二つには誓つてすべての煩惱を断とう。三つには誓つてすべての教えを学ぼう。四つには誓つてこの上ないさとりを得よう。この四つの誓願をもととして仏は

修行した。仏の修行のもとがこの誓願であることは、そのまま仏の心人が人びとを救う大慈悲であることを示している。

三、仏は、仏に成ろうとして殺生の罪を離れることを修め、そしてその功德によつて人びとの長寿を願った。

仏は盗みの罪を離れることを修め、その功德によつて人びとが求めるものを得られるようにと願った。

仏はみだらな行いを離れることを修め、その功德によつて人びとの心に害心がなく、また身に飢えや渴きがないようにと願った。

仏は、仏に成ろうとして、偽りの言葉を離れる行を修め、その功德によつて人びとが眞実を語る心の静けさを知るようにと願った。

二枚舌を離れる行を修めては、人びとが常に仲良くして互いに道を語るように願った。

また悪口を離れる行を修めては、人びとの心が安らいでうるたえ騒ぐことがないように願った。

むだ口を離れる行を修めては、人びとに思いやりの心をつちかうようにと願った。

また仏は、仏に成ろうとして、貪りを離れる行を修め、その功德によって人びとの心に貪りがないようにと願った。

憎しみを離れる行を修めて、人びとの心に慈しみの思いがあふれるようにと願った。

愚かさを離れる行を修めて、人びとの心に因果の道理を無視する誤った考えがないようにと願った。

このように、仏の慈悲はすべての人びとに向かうものであり、その本領はすべての人びとの幸福のため以外の何ものでもない。仏はあなたも父母のように人びとをあわれみ、人びとに迷いの海を渡らせようと願ったのである。

## 第二節 救いとその手だて

一、さどりの岸に立つて、迷いの海に沈んでいる人びとに呼びかける\*仏ほとけのことばは、人びとの耳には容易に聞こえない。だから、仏は、自ら迷いの海に分け入って、救いの手段を講じた。

さて、それでは一つの比喩たとえを説こう。ある町に長者があつて、その家が火事になった。たまたま外にあつた長者は帰宅して驚き、子供たちを呼んだが、彼らは遊びにふけて火に気づかず、家の中にとどまっていた。

父は子供たちに向かつて——「子供たちよ、逃げなさい、出なさい。」と叫んだが、子供たちは父の呼び声に気がつかなかつた。

子供たちの安否を氣遣きづかう父はこう叫んだ——「子供たちよ、ここに珍しいおもちゃがある。早く出て来て取るがよい。」子供たちはおもちゃと聞いて勇み立ち、火の家から飛び出して災いから免れることができた。

この世はまことに火の家である。ところが人びとは、家の燃えていることを知らず、焼け死ぬかも知れない恐れの中にある。だから、仏は大悲の心から限りなくさまさまに手段をめぐらして人びとを救う。

二、さらに別の比喩を説こう。昔、長者のひとり子が、親のもとを離れてさすらいの身となって、貧困のどん底に落ちぶれた。

父は故郷を離れて息子の行方を求め、あらゆる努力をしたにもかかわらず、どうしてもその行方を求めることができなかった。

それから十数年か経って、今はみじめな境遇に成り果てた息子が、たまたま父の住んでいる町の方へさすらってきた。

めざとくもわが子を認めた父は喜びに躍り上がり、使用人を遣って放浪の息子連れもどそうとした。しかし、息子は疑い、だまされるのを恐れて、行こうとしなかった。

そこで父はもう一度使用人を息子に近よらせ、よい賃金の仕事を長者の家で与えようと

言わせた。息子はその手段に引き寄せられて仕事を引き受け、使用人のひとりとなった。

父の長者は、わが家とも知らずに働いているわが子をおいおいに引き立て、ついには金銀財宝の蔵を管理させるに至ったが、それでも息子はなお父とは知らないでいた。

父はわが子が素直になつたのを喜び、またわが命のやがて尽きようとするのを知つて、ある日、親族・友人・知己ちぎを呼び集めてこう語つた——「人びとよ、これはわが子である。永年探し求めていた息子である。今より後、わたしのすべての財宝はみなこの子のものである。」

息子は父の告白に驚いてこう言つた——「今、わたしは父親を見いだしたばかりでなく、思いがけずこれらすべての財宝までもわたしのものとなつた。」

ここにいう長者とはほとけ仏のことである。迷える息子とはすべての人びとのことである。仏の慈悲じひは、ひとり子に向かう父の愛のようになつてすべての人びとに向かう。仏はすべての人びとを子として教え導き、さとの宝をもつて彼らを富める者とする。

三、すべての人びとを子のようにひとしく慈いづくしむ仏の大悲は平等であるが、人びとの

性質の異なるのに応じてその救いの手段には相違がある。ちようど、降る雨は同じであっても、受ける草木によつて、異なつた恵みを得るようなものである。

四、親はどれほど多くの子供があつても、そのかわいさに変わりがないが、その中に病める子があれば、親の心はとりわけその子にひかれてゆく。

<sup>ほとけ</sup>仏の大悲もまた、すべての人びとに平等に向かうけれども、ことに罪の重い者、愚かさゆえに悩める者に慈しみとあわれみとをかける。

また、例えば、太陽が東の空に昇つて、闇を滅ぼし、すべてのものを育てるように、仏は人びとの間に出て、悪を滅ぼし、善を育て、<sup>ちえ</sup>智慧の光を恵んで、無知の闇を除き、さとりに至らせる。

仏は慈しみの父であり、<sup>あわれ</sup>悲みの母である。仏は、世間の人びとに対する慈悲の心から、ひたすら人びとのために尽くす。人びとは仏の慈悲なくしては救われない。人びとはみな仏の子として仏の救いの手段を受けなければならない。

### 第三節 仏はとわに

一、人びとはみな、ほとけ 仏は王子として生まれ、しゅっけ 出家してさとりを得たのだと信じているけれども、実は仏と成つてよりこの方、限りのない時をへ経ている。

限らない時の間、仏は常にこの世にあり、永遠の仏として、すべての人びとの性質を知り尽くし、あらゆる手段を尽くして救つてきた。

仏の説いた永遠の＊法の中には偽りが無い。なぜなら、仏は、世の中のことをあるがままに知り、すべての人びとに教えるからである。

まことに、世の中のことをあるがままに知ることはむつかしい。なぜなら、世の中のことは、まことかと思えばまことではなく、偽りかと思えば偽りでもない。愚かな者たちはこの世の中のことを知ることはできない。

ひとり仏のみはそれがあるがままに知っている。だから、仏はこの世の中のこと

ことであるとも言わず、偽りであるとも言わず、善いとも言わず、悪いとも言わず、ただありのままに示す。

仏が教えようとしていることはこうである——「すべての人びとは、その性質、行い、信仰心に応じて善の根を植えるべきである。」

二、仏はただことばで教えるだけではなく、身をもって教える。仏は、その寿命に限りはないが、欲を貪むさほつて飽くことのない人びとを目覚ますために、手段として死を示す。

例えば多くの子を持つ医師が、他国へ旅をした留守に子供らが毒を飲んで悶もだえ苦しんだとしよう。医師は帰つてこの有様を見、驚いてよい薬を与えた。

子供たちのうち、正常な心を失っていない者はその薬を飲んで病を除くことができたけれども、すでに正常な心を失ってしまった者はその薬を飲もうとしなかった。

父である医師は、彼らの病をいやすために思いきった手段をとろうと決心した。彼は

子供たちに言った——「わたしは長い旅に出かけなければならぬ。わたしは老いて、いつ死ぬかもわからない。もしわたしの死を聞いたなら、ここに残しておく薬を飲んで、おのおの元気になるがよい。」こうして彼はふたたび長い旅に出た。そして使いを遣わしてその死を告げさせた。

子供たちはこれを聞いて深く悲しみ、「父は死んだ。もはやわれわれにはたよる者がなくなつた。」と嘆いた。悲しみと絶望の中で、彼らは父の遺言を思い出し、その薬を飲み、そして回復した。

世の人はこの父である医師のうそを責めるであらうか。仏もまたこの父のようなものである。仏は、欲望に追いまわされている人びとを救うために、仮にこの世に生と死を示したのである。

## 第三章 仏の姿と仏の徳

### 第一節 三つのすがた

一、姿や形だけでほつけ仏を求めてはならない。姿、形はまことの仏ではない。まことの仏はさとりそのものである。だから、さとりを見る者がまことに仏を見る。

世に優れた仏の相すがたを見て、仏を見たというならば、それは無知の眼の過ちである。仏のまことの相は、世の人には見ることもできない。どんなにすぐれた描写によっても仏を知ることはできないし、どんな言葉によっても仏の相は言い尽くすことはできない。

まことの相とはいっても、実は、相あるものは仏ではない。仏には相がない。しかも、また、思いのままにすばらしい相を示す。

だから、明らかに見て、しかもその相にとらわれないなら、この人は自在の力を得て

仏ほとけを見たのである。

二、仏の身はさとりであるから、永遠の存在であつてこわれることがない。食物によつて保たれる肉体ではなく、\*智慧ちえより成る堅固な身であるから、恐れもなく、病もなく、永遠不変である。

だから、仏は永遠に滅びない。さとりが滅びない限り、滅びることはない。このさとりが智慧の光となつて現われ、この光が人をさとらせ、仏の国に生まれさせる。

この道理をさとつた者は仏の子となり、仏の教えを受持し、仏の教えを守つて後の世に伝える。まことに、仏の力ほど不思議なものはない。

三、仏には三つの身からだがそなわっている。一つには法身ほつしん、二つには報身ほうじん、三つには応身おうじんである。

法身とは、\*法そのものを身とするものである。この世のありのままの道理と、それをさとる智慧とが一つになつた法そのものである。

法そのものが仏ほとけであるから、この仏には色もなく形もない。色も形もないから、来るところもなく、去るところもない。来るところも去るところもないから充滿しないところがなく、大空のようにすべてのものの上にあまねくゆきわたっている。

人が思うから有るのではなく、人が忘れるから無いのでもなく、人の喜ぶときに来るのでもなく、人の怠おこたるときに去るのでもない。仏そのものは、人の心のさまざまなきを越えて存在する。

仏の身は、あらゆる世界に満ち、すべてのところゆきわたり、人びとがふつう持っている仏に関する考えにかかわらず永遠に住する。

四、報身ほうじんというのは、形のない法身ほっしんの仏が、人びとの苦しみを救うために形を現わし、願を起こし、行を積み、名を示して、導き救う仏である。

この仏は大悲をもととし、いろいろな手段によって限りなき人びとを救い、すべてのものを焼き払う火のように、人びとの煩惱ぼんのうの薪たきぎを焼き、また、ちりを吹き払う風のように

うに、人びとの悩みのちりを払う。

応身おうじんの仏ほとけは、仏の救いを全まっうするのために、人びとの性質にに応じてこの世に姿を現わし、誕生し、\*出家しゆつげし、成道じやうどうし、さまざまの手段をめぐらして人びとを導き、病と死を示して人びとを警いめる仏である。

仏の身は、もともと一つの法身ほっしんであるけれども、人びとの性質が異なっているから、仏の身はいろいろに現われる。しかし、人びとの求める心や、行為や、その能力によって、人の見る仏の相すがたは違っていても、仏は一つの眞実を見せるのみである。

仏の身は三つに分かれるが、それはただ一つのことをなすとげるためである。一つのこととは、いうまでもなく人びとを助け救うことである。

限りのないすぐれた身をもって、あらゆる境界きやうがいに現われても、その身は仏ではない。仏は肉体ではないからである。たださとりを身としてすべてのものに満ちみち、眞実を見る人の前に仏は常に現われる。

## 第二節 仏との出会い

一、\*仏がほとけこの世に現われるのは、はなはだまれである。仏は今この世界においてさとりを開き、\*法を説き、疑いの網を断ち、愛欲の根を抜き、悪の源をふさぎ、妨げられることなく、自由自在にこの世を歩く。世に仏を敬うやまうより以上の善はない。

仏がこの世に現われるのは、法を説いて、人びとにまことの福利を恵むためである。苦しみ悩む人びとを捨てることができなから、仏はこの苦難の世界に現われる。

世に道理なく、不正はびこり、欲に飽くことなく、心身ともに墮落だらくし、命短きこの世に、法を説くことは、はなはだむつかしい。ただ大悲のゆえに、仏はこの困難に打ち勝つ。

二、仏はこの世におけるすべての人びとの善い友である。\*煩惱ぼんのうの重荷に悩む者が仏に会えば、仏はそのために代わってその重荷をになう。

仏はこの世におけるまことの師である。愚かな迷いに苦しむ者が仏に会えば、仏は

\*智慧ちえの光によつてその闇やみを払う。

子牛がいつまでも母牛のそばを離れないように、ひとたびほとけ仏の教えを聞いた者は仏を離れない。教えを聞くことは常に楽しいからである。

三、月が隠れると、人びとは月が沈んだといい、月が現われると、人びとは月が出たという。けれども月は常に住して出沒することがない。仏もそのように、常に住して生滅しょうめつしないのであるが、ただ人びとを教えるために生滅を示す。

人びとは月が満ちるとか、月が欠けるとかいうけれども、月は常に満ちており、増すこともなく減することもない。仏もまたそのように、常に住して生滅しないのであるが、ただ人びとの見るところに従つて生滅があるだけである。

月はまたすべての上に現われる。町にも、村にも、山にも、川にも、池の中にも、かめの中にも、葉末はざえの露にも現われる。人が行くこと百里千里であつても、月は常にその人に従う。月そのものに変わりはないが、月を見る人によつて月は異なる。仏もまたそのよう

に、世の人びとに従つて、限らない姿を示すが、ほとけ仏は永遠に存在して変わることがない。

四、仏がこの世に現われたことも、また隠れたことも、いんねん因縁を離れてあるのではない。人びとを救うのによい時が来ればこの世にも現われ、その因縁が尽きればこの世から隠れる。

仏に生滅しやうめつの相すがたはあつても、まことに生滅することはない。この道理を知つて、仏の示す生滅と、すべてのもののうつり変わりに驚かず、悲しまず、まことのさとりを開いて、この上ない智慧ちえを得なければならぬ。

仏は肉体ではなくさとりであることはすでに説いた。肉体はまことに容器であり、その中にさとりを盛ればこそ仏といわれる。だから、肉体にとらわれて、仏のなくなることを悲しむ者は、まことの仏を見ることはできない。

もともと、あらゆるもののまことの相は、生滅・こらい去来・善悪の区別を離れたくう\*空にして平等なものである。

それらの区別は、見る者の偏見から起こるもので、仏のまことの相も、実は現われることもなく隠れることもない。

### 第三節　すぐれた徳

一、ほとけ仏は五つのすぐれた徳をそなえて、尊敬を受ける。すぐれた行い、すぐれた見方、すぐれたちえ智慧、さとりの道を明らかに説くこと、人びとをしてよく教えのとおりに修めさせることである。

また仏には八つのすぐれた能力がある。一つには、仏は人びとに利益りやくと幸福とを与える。二つには、仏の教えはこの世においてただちに利益がある。三つには、世の善悪正邪を正しく教える。四つには、正しい道を教えてさとりに入らせる。五つには、どんな人をも一つの道に導く。六つには、仏にはおごる心がない。七つには、言ったとおり実行し、実行するとおりに語る。八つには、惑まどいなく、願いを満たし、完全に行をなしとげる。

また仏は、冥想めいそうに入つて静けさと平和を得、あらゆる人びとに対して慈しみいつくの心、悲あわれみの心、とらわれない心を持ち、心のあらゆる汚れを去つて、清らかな者だけが持つ喜びを持つ。

二、この仏はすべての人びとの父母である。子が生まれて十六か月の間、父母は子の声に合わせて赤子のように語り、それからおもむろにことばを教えるように、仏もまた、人びとのことばに従って教えを説き、その見るところに従って相を現<sup>すがた</sup>わし、人びとをして安らかな揺らぎのない境地に住まわせる。

また仏は、一つのことばをもって教えを説くが、人びとはみなその性質に応じてそれを聞き、仏は今、わたしのために教えを説かれたと喜ぶ。

仏の境地は、迷える人びとの考えを超えており、ことばでは説き尽くすことはできないが、強<sup>し</sup>いてその境地を示そうとすれば、たとえによるほかはない。

ガンジス河は常に亀<sup>かめ</sup>や魚、馬や象などに汚されているが、いつも清らかである。仏もこの河のように、異教の魚や亀などが競い来って乱しても、少しも思いを乱されることなく清らかである。

三、仏の智慧<sup>ちえ</sup>はすべての道理を知り、かたよった両極端を離れて中道<sup>ちゆうどう</sup>に立ち、また、

すべての文字やことばを超え、すべての人びとの考えを知り、一瞬のうちにこの世のすべてのことを知っている。

静かな大海に、大空の星がすべてその形を映し出すように、ほとけ 仏の智慧ちえの海には、すべての人びとの心や思いや、その他あらゆるものがそのままに現われる。だから仏を一切いっさい知者ちしやという。

この仏の智慧はあらゆる人びとの心をうるおし、光を与え、人びとにこの世の意味、盛衰いんが、因果の道理を明らかに知らせる。まことに仏の智慧によつてのみ人びとはよくこの世のことを知る。

四、仏はただ仏として現われるだけでなく、あるときは悪魔となり、あるときは神のすがたをとり、あるいは男のすがた、女のすがたとして現われる。

病のあるときには医師となつて薬を施して教えを説き、戦いが起これば正しい教えを説いて災いを離れさせ、固定的な考えにとらわれている者には無常むじょうの道理を説き、自

我と誇りにこだわっている者には\*無我を説き、世俗的悦楽の網にとらわれているものには世のいたましい有様を明らかにする。

仏のはたらきは、このようにこの世の事物の上に現われるが、それはすべてみな法身の源から流れ出るもので、限りない命、限りない光の救いも、その源は法身の仏にある。

五、この世は火の宅のように安らかでない。人びとは愚かさの闇につつまれて、怒り、ねたみ、そねみ、あらゆる\*煩惱に狂わされている。赤子に母が必要であるように、人びとはみなこの仏の慈悲に頼らなければならない。

仏は実に聖者の中の尊い聖者であり、この世の父である。だから、あらゆる人びとはみな仏の子である。彼らはひたすらこの世の楽しみにのみかかわり、その災いを見通す智慧を持たない。この世は苦しみに満ちた恐るべきところ、老いと病と死の炎は燃えてやまない。

ところが、仏は迷いの世界という火の宅を離れ、静寂な林にあって、

「いまこの世界はわがものであり、その中の生けるものたちはみなわが子である。限りない悩みを救うのはわれひとりである。」と言う。

仏はほしけ実際に、大いなる\*法の王であるから、思いのままに教えを説く。仏はただ、人びとを安らかにし、恵みをもたらすためにこの世に現われた。人びとを苦しみから救い出すために、仏は法を説いた。ところが、人びとは欲に引かれて聞く耳を持たず気にもしていない。

しかし、この教えを聞いて喜ぶ人は、もはや決して迷いの世界に退くことのない境地におかれるであろう。「わが教えは、ただ信によつてのみ入ることができる。すなわち、仏のことは信ずることによつて教えにかなうので、自分の知恵によるのではない。」と仏は言った。したがつて仏の教えに耳を傾け、それを実践すべきである。



DHARMA

お し え

# 第一章 因縁

## 第一節 四つの真理

一、この人間世界は苦しみに満ちている。生も苦しみであり、老いも病も死もみな苦しみである。怨みあるものと会わなければならないことも、愛するものと別れなければならないことも、また求めて得られないことも苦しみである。まことに、執着を離れない人生はすべて苦しみである。これを苦しみの真理〔苦諦〕という。

この人生の苦しみが、どうして起こるかという、それは人間の心につきまとう煩惱から起こることは疑いない。その煩惱をつきつめていけば、生まれつきそなわっている激しい欲望に根ざしていることがわかる。このような欲望は、生に対する激しい執着をもととしていて、見るもの聞くものを欲しがる欲望となる。また転じて、死をさえ願うようにもなる。これを苦しみの原因〔集諦〕という。

この煩惱ぼんのうの根本を残りなく滅めつぼし尽くし、すべての執着しゆうじやくを離れば人間の苦しみもなくなる。これを苦しみを滅めつぼす真理めつたい〔滅諦〕という。

この苦しみを滅めつぼし尽くした境地に入るには、八つの正しい道はつしやうどう（八正道）を修めなければならぬ。八つの正しい道というのは、正しい見解、正しい思い、正しいことば、正しい行い、正しい生活、正しい努力、正しい記憶、正しい心の統一である。これらの八つは欲望を滅めつぼすための正しい道の真理しやうたい〔道諦〕といわれる。

これらの真理を人はしっかり身につけなければならぬ。というのは、この世は苦しみに満ちていて、この苦しみから逃れようとする者はだれでも煩惱を断ち切らなければならぬからである。煩惱と苦しみのなくなった境地は、さとりによってのみ到達し得る。さとりはこの八つの正しい道によつてのみ達し得られる。

二、道に志す人も、この四つの聖とうとい真理を知らなければならぬ。これらを知らないために、長い間、迷いの道にさまよつてやむとぎがない。この四つの聖い真理を知る人をさとの眼を得た人という。

だから、よく心を一つにして\*仏ほとけの教えを受け、この四つの聖い真理とうとの道理を明らかに知らなければならぬ。いつの世のどのような聖者も、正しい聖者であるならば、みなこの四つの聖い真理をさとした人であり、四つの聖い真理を教える人である。

この四つの聖い真理が明らかになったとき、人は初めて、欲から遠ざかり、世間と争わず、殺さず、盗まず、よこしまな愛欲を犯さず、欺あざむかず、そしらず、へつらわず、ねたまず、瞋いからず、人生の\*無常むじょうを忘れず、道にはずれることがない。

三、道を行うものは、例えば、灯火ともしびをかかぎて、暗黒の部屋に入るようなものである。闇やみはたちまち去り、明るさに満たされる。

道を学んで、明らかにこの四つの聖い真理を知れば、\*智慧ちえの灯火を得て、無知の闇は滅びる。仏は単にこの四つの真理を示すことによって人びとを導くのである。教えを正しく身に受けるものは、この四つの聖い真理によって、はかないこの世において、まことのさとりを開き、この世の人びとの守りとなり、頼りとなる。それは、この四つの聖い真理

が明らかになれば、あらゆる煩惱ぼんのうのもとである\*無明むみょうが減くびるからである。

ほとけ 仏の弟子たちはこの四つしつとの聖い真理によって、あらゆる教えに達し、すべての道理を知る智慧ちえと功德くどくとをそなえ、どんな人びとに向かつて、自在に教えを説くことができる。

## 第二節 不思議なつながり

一、人びとの苦しみには原因があり、人びとのさとりには道があるように、すべてのものは、みな縁えん（条件）によって生まれ、縁によって滅めつびる。

雨の降るのも、風の吹くのも、花の咲くのも、葉の散るのも、すべて縁によって生じ、縁によって滅めつびるのである。

この身は父母を縁として生まれ、食物によって維持され、また、この心も経験と知識とによって育ったものである。

だから、この身も、この心も、縁によって成り立ち、縁によって変わるといわなければならぬ。

網の目が、互いにつながりあつて網を作っているように、すべてのものは、つながりあつてできている。

一つの網の目が、それだけで網の目であると考えれば、大きな誤りである。

網の目は、ほかの網の目とかかわりあつて、一つの網の目といわれる。網の目は、それぞれ、ほかの網が成り立つために、役立っている。

二、花は咲く縁が集まつて咲き、葉は散る縁が集まつて散る。ひとり咲き、ひとり散るのではない。

縁によつて咲き、縁によつて散るのであるから、どんなものも、みなうつり変わる。ひとりで存在するものも、常にとどまるものもない。

すべてのものが、縁によつて生じ、縁によつて滅びるのは永遠不変の道理である。だから、うつり変わり、常にとどまらないということは、天地の間に動くことのないまことの道理であり、これだけは永久に変わらない。

### 第三節 ささえあつて

一、それでは、人びとの憂うれい、悲しみ、苦しみ、もだえは、どうして起こるのか。つまりそれは、人に執着しめうじやくがあるからである。

富とみに執着し、名譽利欲に執着し、悦楽に執着し、自分自身に執着する。この執着から苦しみ悩みが生まれる。

初めから、この世界にはいろいろの災いがあり、そのうえ、老いと病と死とを避けることができないから、悲しみや苦しみがある。

しかし、それらもつきつめてみれば、執着があるから、悲しみや苦しみとなるのである。執着を離れさえすれば、すべての悩み苦しみはあとかたもなく消えうせる。

さらにこの執着を押しつめてみると、人びとの心のうちに、\*無明むみやうと貪愛とんあいとが見いだされる。

無明はうつり変わるものですがたに眼が開けず、因果の道理に暗いことである。

貪愛とは、得ることのできないものを貪って、執着し愛着することである。

もともと、ものに差別はないのに、差別を認めるのは、この無明と貪愛とはたらしきである。もともと、ものに良否はないのに、良否を見るのは、この無明と貪愛とはたらしきである。

すべての人びとは、常によこしまな思いを起して、愚かさのために正しく見ることができなくなり、自我にとらわれて間違つた行いをし、その結果、迷いの身を生ずることになる。

\*業を田とし心を種とし、無明の土に覆われ、貪愛の雨でうるおい、自我の水をそそぎ、よこしまな見方を増して、この迷いを生み出している。

二、だから、結局のところ、憂いと悲しみと苦しみと悩みのある迷いの世界を生み出すものは、この心である。

迷いのこの世は、ただこの心から現われた心の影にほかならず、さとりの世界もまた、この心から現われる。

三、この世の中には三つの誤った見方がある。もしこれらの見方に従ってゆくと、この世のすべてのことが否定されることになる。

一つには、ある人は、人間がこの世で経験するどのようなことも、すべて運命であると主張する。二つには、ある人は、それはすべて神のみ業わざであるという。三つには、またある人は、すべて因も縁もないものであるという。

もしも、すべてが運命によって定まっているならば、この世においては、善いことをするのも、悪いことをするのも、みな運命であり、幸・不幸もすべて運命となって、運命のほかには何ものも存在しないことになる。

したがって、人びとに、これはしなければならぬ、これはしてはならないという希望も努力もなくなり、世の中の進歩も改良もないことになる。

次に、神のみ業わざであるという説も、最後の因も縁もないとする説も、同じ非難があげられ、悪を離れ、善をなそうという意志も努力も意味もすべてなくなってしまう。

だから、この三つの見方はみな誤っている。どんなことも縁によつて生じ、縁によつて滅びるものである。

## 第二章 人の心とありのままの姿

### 第一節 変わりゆくものには実体がない

一、身も心も、\*因縁いんねんによってできているものであるから、この身には実体はない。この身は因縁の集まりであり、だから、\*無常むじょうなものである。

もしも、この身に実体があるならば、わが身は、かくあれ、かくあることなかれ、と思つて、その思いのままになし得るはずである。

王はその国において、罰すべきを罰し、賞すべきを賞し、自分の思うとおりにすることができる。それなのに、願わないのに病み、望まないのに老い、一つとしてわが身についてと思うようになるものはない。

それと同じく、この心にもまた実体はない。心もまた因縁の集まりであり、常にうつ

り変わるものである。

もしも、心に実体があるならば、かくあれ、かくあることなかれ、と思つて、そのとおりにできるはずであるのに、心は欲しないのに悪を思い、願わないのに善から遠ざかり、一つとして自分の思うようにはならない。

二、この身は永遠に変わらないものなのか、それとも無常むじょうであるのかと問うならば、だれも無常であると答えるに違いない。

無常なものは苦しみであるのか、楽しみであるのかと問うならば、生まれた者はだれでもやがて老い、病み、死ぬと気づいたとき、だれでも、苦しみであると答えるに違いない。

このように無常であつてうつり変わり、苦しみであるものを、実体である、わがものである、と思うのは間違つている。

心もまた、そのように、無常であり、苦しみであり、実体ではない。

だから、この自分を組み立てている身と心や、それをとりまくものは、我<sup>が</sup>とかかわがものとかという観念を離れたものである。

\*智慧<sup>ちえ</sup>のない心が、我である、わがものであると執着<sup>しゅうじやく</sup>するにすぎない。

身もそれをとりにまくものも、縁によって生じたものであるから、変わりに変わって、しばらくもとどまることがない。

流れる水のように、また灯火<sup>とうしび</sup>のようにうつり変わっている。また、心の騒ぎ動くこと猿<sup>さる</sup>のように、しばらくの間も、静かにとどまることがない。

智慧あるものは、このように見、このように聞いて、身と心とに対する執着を去らなければならぬ。心身ともに執着を離れたとき、さとりが得られる。

三、この世において、どんな人にもなしとげられないことが五つある。一つには、老いゆく身でありながら、老いないということ。二つには、病む身でありながら、病まないということ。三つには、死すべき身でありながら、死なないということ。四つには、

滅ぶべきものでありながら、滅びないということ。五つには、尽きるべきものでありながら、尽きないということである。

世の常の人びとは、この避け難いことにつき当たり、いたずらに苦しみ悩むのであるが、<sup>ほとけ</sup>仏の教えを受けた人は、避け難いことを避け難いと知るから、このような愚かな悩みをいただくことはない。

また、この世に四つの真実がある。第一に、すべて生きとし生けるものはみな<sup>むみやう</sup>無明から生まれること。第二に、すべて欲望の対象となるものは、<sup>むじやう</sup>無常であり、苦しみであり、うつり変わるものであること。第三に、すべて存在するものは、無常であり、苦しみであり、うつり変わるものであること。第四に、<sup>が</sup>我も、わがものもないということである。すべてのものは、みな無常であつて、うつり変わるものであること、どのようなものにも我がないということは、仏がこの世に出現するとしなにかかわらず、いつも定まっているまことの道理である。仏はこれを知り、このことをさとつて、人びとを教え導く。

## 第二節 心の構造

一、迷いもさとりも心から現われ、すべてのものは心によって作られる。ちょうど手品師が、いろいろなものを自由に現わすようなものである。

人の心の変化には限りがなく、そのはたらきにも限りがない。汚れた心からは汚れた世界が現われ、清らかな心からは清らかな世界が現われるから、外界の変化にも限りがない。

絵は絵師によって描かれ、外界は心によって作られる。ほとけ仏の作る世界は、ほんのう\*煩惱を離れて清らかであり、人の作る世界は煩惱によって汚れている。

心はたくみな絵師のように、さまざまな世界を描き出す。この世の中で心のはたらきによって作り出されないものは何一つない。心のように仏もそうであり、仏のように人びともそうである。だから、すべてのものを描き出すということにおいて、心と仏と人びとと、この三つのものに区別はない。

すべてのものは、心から起こると、ほとけ仏は正しく知っている。だから、このように知る人は、真実の仏を見ることになる。

二、ところが、この心は常に恐れ悲しみ悩んでいる。すでに起こったことを恐れ、まだ起こらないことをも恐れている。なぜなら、この心の中に\*無明むみょうと病的な愛着とがあるからである。

この貪りむさぼの心から迷いの世界が生まれ、迷いの世界のさまざまな\*因縁いんねんも、要約すれば、みな心そのものの中にある。

生も死も、ただ心から起こるのであるから、迷いの生死ししょうじにかかわる心が滅びると、迷いの生死は尽きる。

迷いの世界はこの心から起こり、迷いの心で見るので、迷いの世界となる。心を離れて迷いの世界がないと知れば、汚れを離れてさとりを得るであろう。

このように、この世界は心に導かれ、心に引きずられ、心の支配を受けている。迷い

の心によって、悩みに満ちた世間が現われる。

三、すべてのものは、みな心を先とし、心を主とし、心から成っている。汚れた心でものを言い、また身で行うと、苦しみがその人に従うのは、ちょうど牽く牛に車が従うようなものである。

しかし、もし善い心でものを言い、または身で行うと、楽しみがその人に従うのは、ちょうど影が形に添うようなものである。悪い行いをする人は、その悪の報いを受けて苦しみ、善い行いをする人は、その善の報いを受けて楽しむ。

この心が濁ると、その道は平らでなくなり、そのために倒れなければならない。また、心が清らかであるならば、その道は平らになり、安らかになる。

身と心との清らかさを楽しむものは、悪魔の網を破って仏の大地を歩むものである。心の静かな人は安らかさを得て、ますます努めて夜も昼も心を修めるであらう。

### 第三節 眞実のすがた

一、この世のすべてのものは、みな縁によって現われたものであるから、もともとちがいはない。ちがいを見るのは、人びとの偏見である。

大空に東西の区別がないのに、人びとは東西の区別をつけ、東だ西だと執着する<sup>しゅうじやく</sup>。

数はもともと、一から無限の数まで、それぞれ完全な数であつて、量には多少の区別はないのであるけれども、人びとは欲の心からはからつて、多少の区別をつける。

もともと生もなければ滅もないのに、生死の区別を見、また、人間の行為それ自体には善もなければ悪もないのに、善悪の対立を見るのが、人びとの偏見である。

<sup>ほとけ</sup> 仏はこの偏見を離れて、世の中は空に浮かぶ雲のような、また幻のようなもので、捨てるも取るもみなむなしいことであると見、心のはからいを離れている。

二、人ははからいから、すべてのものに執着する。富に執着し、財に執着し、名に執着し、命に執着する。

有無、善悪、正邪、すべてのものにとらわれて迷いを重ね苦しみと悩みとを招く。

ここに、ひとりの人がいて、長い旅を続け、とあるところで大きな河を見て、こう思った。この河のこちらの岸は危いが、向こう岸は安らかに見える。そこで筏を作り、その筏によって、向こうの岸に安らかに着くことができた。そこで「この筏は、わたしを安らかにこちらの岸へ渡してくれた。大変役に立った筏である。だから、この筏を捨てることなく、肩に担いで、行く先へ持って行こう。」と思ったのである。

このとき、この人は筏に対して、しなければならぬことをしたといわれるであろうか。そうではない。

この比喩は、「正しいことさえ執着すべきではなく、捨て離れなければならない。まして、正しくないことは、なおさら捨てなければならぬ。」ということを示している。

三、すべてのものは、来ることもなく、去ることもなく、生ずることもなく、滅することもなく、したがって得ることもしなければ、失うこともない。

仏は、<sup>ほとけ</sup>「すべてのものは有無の範疇<sup>はんちゆう</sup>を離れているから、有にあらざ、無にあらざ、生ずることもなく、滅することもない。」と説く。すなわち、すべてのものは、<sup>いんねん</sup>因縁から成つていて、ものそれ自体の本性は実在性がないから、有にあらざといひ、また因縁から成つているので無でもないから、無にあらざといふのである。

ものの姿を見て、これに執着<sup>しゆうじやく</sup>するのは、迷いの心を招く原因となる。もしも、ものの姿を見ても執着しないならば、はからいは起こらない。さとりは、このまことの道理を見て、はからいの心を離れることである。

まことに世は夢のようであり、財宝もまた幻のようなものである。絵に見える遠近と同じく、見えるけれども、あるのではない。すべては陽炎<sup>かげろう</sup>のようなものである。

四、無量の因縁によって現われたものが、永久にそのまま存在すると信ずるのは、<sup>じようけん</sup>常見という誤った見方である。また、まったくなくなると信ずるのは、<sup>だんけん</sup>断見という誤つ

た見方である。

この断・常・有・無は、ものそのものの姿ではなく、人の執着から見た姿である。すべてのものは、もともとこの執着の姿を離れている。

ものはすべて縁によって起こったものであるから、みなうつり変わる。実体を持っているもののように永遠不変ではない。うつり変わるので、幻のようであり、陽炎かげろうのようではあるが、しかも、また、同時に、そのまま真実である。うつり変わるままに永遠不変なのである。

川は人にとっては川と見えるけれども、水を火と見る餓鬼がきにとっては、川とは見えない。だから、川は餓鬼にとっては「ある」とはいえず、人にとっては「ない」とはいえない。これと同じように、すべてのものは、みな「ある」ともいえず、「ない」ともいえない、幻のようなものである。

しかも、この幻のような世界を離れて、真実の世も永遠不変の世もないのであるから、この世を、仮のものと見るのも誤り、実の世と見るのも誤りである。

ところが、世の人びとは、この誤りのもとは、この世の上にあると見てゐるが、この世がすでに幻とすれば、幻にはからう心があつて、人に誤りを生じさせるはずはない。誤りは、この道理を知らず、仮の世と考え、実の世と考える愚かな人の心に起こる。

\*智慧ある人は、この道理をさとつて、幻を幻と見るから、ついにこの誤りを犯すことはない。

#### 第四節 かたよらない道

一、道を修めるものとして、避けなければならぬ二つの偏つた生活がある。その一は、欲に負けて、欲にふける卑しい生活であり、その二は、いたずらに自分の心身を責めさいなむ苦行の生活である。

この二つの偏つた生活を離れて、心眼を開き、\*智慧を進め、さとりに導く\*中道の生活がある。

この中道の生活とは何であるか。正しい見方、正しい思い、正しいことば、正しい行い、正しい生活、正しい努力、正しい記憶、正しい心の統一、この八つの正しい道である。

すべてのものは縁によって生滅しやうめつするものであるから、有と無とを離れている。愚かな者は、あるいは有と見、あるいは無と見るが、正しい智慧ちえの見るところは、有と無とを離れている。これが中道ちゆうどうの正しい見方である。

二、一本の材木が、大きな河を流れているとする。その材木が、右左の岸に近づかず、中流にも沈まず、陸おかにも上のぼらず、人にも取られず、渦うずにも巻き込まれず、内から腐ることなければ、その材木はついに海に流れ入るであろう。

この材木のたとえのように、内にも外にもとらわれず、有にも無にもとらわれず、正にも邪にもとらわれず、迷いを離れ、さとりにこだわらず、中流に身をまかせるのが、道を修めるものの中道の見方、中道の生活である。

道を修める生活にとって大事なことは、両極端にとらわれず、常に中道を歩むことである。すべてのものは、生ずることなく、滅することもなく、きまつた性質のないものと知つてとらわれず、自分の行っている善にもとらわれず、すべてのものに縛られてはならない。

とらわれないとは握りしめないこと、執着しゅうじやくしないことである。道を修める者は、死を恐れず、また、生をも願わない。この見方、あの見方と、どのような見方のあとをも追わないのである。

人が執着の心を起こすとき、たちまち、迷いの生活が始まる。だから、さとりにへの道を歩むものは、握りしめず、取らず、とどまらないのが、とらわれのない生活である。

三、さとりにはきまった形やものがないから、さとることはあるがさとられるものはない。迷いがあるからさとりというのであって、迷いがなくなればさとりもなくなる。迷いを離れてさとりはなく、さとりを離れて迷いはない。

だから、さとりのあるのはなお障さまたげとなる。闇やみがあるから照らすということがあり、闇がなくなれば照らすということもなくなる。照らすことと照らされるものと、ともになくなってしまうのである。

まことに、道を修めるものは、さとってさとりにとどまらない。さとりのあるのはなお迷いだからである。

この境地に至れば、すべては、迷いのままにさととりであり、闇ぐみのままに光である。すべての\*煩惱ぼんのうがそのままさととりであるところまで、さととりきらなければならぬ。

四、ものが平等であつて差別のないことを\*空くうという。ものそれ自体の本質は、実体がなく、生ずることも、滅することもなく、それはことばでいい表わすことができないから、空というのである。

すべてのものは互いに關係して成り立ち、互いによりあつて存在するものであり、ひとり成り立つものではない。

ちようど、光と影、長さと短さ、白と黒のようなもので、ものそれ自体の本質が、ただひとりであり得るものではないから無自性むじじょうという。

また、迷いのほかにさととりがなく、さとりのほかに迷いがない。これら二つは、互いに相違するものではないから、ものには二つの相反した姿があるのではない。

五、人はいつも、ものの生ずることと、滅することを見るのであるが、ものにはもともと生ずることがないのであるから、滅することもない。

このものの真実の姿を見る眼を得て、ものに生滅しやうめつの二つのないことを知り、別のものではないという真理をさとするのである。

人は我ががあると思うから、わがものに執着しやくちやくする。しかし、もともと、我がないのであるから、わがもののあるはずがない。我とわがものないことを知って、別のものではないという真理をさとするのである。

人は清らかさと汚れとがあると思って、この二つにこだわらる。しかし、ものにはもともと、清らかさもなければ汚れもなく、清らかさも汚れも、ともに人が心のはからいの上で作ったものにすぎない。

人は善と悪とを、もともと別なものと思い、善悪にこだわっている。しかし、単なる善もなく、単なる悪もない。さとの道に入った人はこの善悪はもともと別ではないと知って、その真理をさとするのである。

人は不幸を恐れて幸福を望む。しかし、眞実の智慧ちえをもつてこの二つをながめると、不幸の状態がそのままに、幸福となることがわかる。それだから、不幸がそのままに幸福であるときとつて、心身にまわりついて自由を束縛する迷いも眞実の自由も特別にはないと知つて、こうして、人はその眞理をさとるのである。

だから、有と無といい、迷いとさとりといい、実と不実といい、正と邪といつても、実は相反した二つのものがあるのではなく、まことの姿においては、言うことも示すことも、識しすることもできない。このことばやはからいを離れることが必要である。人がこのようなことばやはからいを離れたとき、眞実の空くうをさとることができる。

六、例えば、蓮華れんげが清らかな高原や陸地に生えず、かえつて汚い泥どろの中に咲くように、迷いを離れてさとりがあるのではなく、誤つた見方や迷いからほとけの種が生まれる。

あらゆる危険をおかして海の底に降りなければ、価あたも知れないほどにすばらしい宝は得られないように、迷いの泥海じつうみの中に入らなければ、さとりの宝を得ることはできない。山のように大きな、我がへの執着しゅうじやくを持つ者であつて、はじめて道を求める心も起こし、さ

とりもついに生ずるであらう。

だから、昔、仙人せんじんが刃やいばの山に登っても傷つかず、自分の身を大火の中に投げ入れても焼け死なず、すがすがしさを覚えたというように、道を求める心があれば、名譽利欲の刃の山や、憎しみの大火の中にも、さどりの涼しい風が吹き渡ることであらう。

七、仏ほとけの教えは、相反する二つを離れて、それらが別のものではないという真理をさとするのである。もしも、相反する二つの中の一つを取って執着しゅうじやくすれば、たとえ、それが善であっても、正であっても、誤ったものになる。

もしも、人がすべてのものはうつり変わるといふ考えにとらわれるならば、これも間違つた考えにおちいるものであり、また、もしも、すべてのものは変わらないといふ考えにとらわれるならば、これももとより間違つた考えなのである。もしまた人が我ががあると執着すれば、それは誤つた考えで、常に苦しみを離れることができない。もしも我がないと執着するならば、それも間違つた考えで、道を修めても効果がない。

また、すべてのものはただ苦しみであるにとらわれれば、これも間違つた考えであり、また、すべてのものはただ楽しみだけであるといえば、これも間違つた考えである。仏ほとけの教えは中道ちゆうどうであつて、これらの二つの偏りかたよから離れている。

## 第三章 さとりの種

### 第一節 清らかな心

一、人にはいろいろの種類がある。心の曇りの少ないものもあれば、曇りの多いものもあり、賢いものもあれば、愚かなものもある。

善い性質のものもあれば、悪い性質のものもあり、教えやすいものもあれば、教えにくいものもある。

例えていうと、青・赤・黄・白、色さまざまな蓮はすの池があつて、水中に生え、水中に育つて、水の表面にでない蓮もあれば、水面にとどまる蓮もあり、水面を離れて、水にもぬれない蓮もあるようなものである。

このちがいの上に、さらにまた、男・女のちがいがあがあるが、しかし、人の本性として

ちがいがあつたのではない。男が道を修めてさとりを得るように、女もまた道を修めれば、しかるべき心の道すじを經へて、さとりに至るであらう。

象を扱とう術を学ぶのには、信念と健康をもち、勤勉であつて、偽りがなく、その上に\*智慧がなければならぬ。\*仏に従つてさとりを得るにも、やはりこの五つがなければならぬ。この五つがあれば、男でも女でも、仏の教えを学ぶのに長い年月を要しない。これは、人にはみな、さとるべき性質がそなわつてゐるからである。

二、さとりの道において、人はおのれの眼をもつて仏を見、心をもつて仏を信ずる。それと同じく、人をして生死の巷ちまたに今日まで流転るてんさせたのも、また、この眼と心である。国王が、侵入した賊を討とうとするとき、何よりも先に、その賊のありかを知ることが必要であるように、いま迷いをなくそうとするのにも、まずその眼と心のありかを確かめなければならぬ。

人が室内にいて目を開けば、まず、部屋の中のものを見、やがて窓を通して、外の景

色を見る。部屋の内のものを見ないで、外のものばかりを見る目はない。

ところが、もしもこの身の内に心があるならば、何よりも先に、身の内のことを詳しく知らなければならぬはずであるのに、人びとは、身の外のことだけをよく知っていて、身の内のことについては、ほとんど何ごとも知ることができない。

また、もしも心が身の外にあるとするならば、身と心とが互いに離れて、心の知るところを身は知らず、身の知るところを心は知らないはずである。ところが、事實は、心の知るところを身が感じ、身に感ずるところを心はよく知っているから、心は身の外にあるということもできない。いつたい、心の本体はどこにあるのであろうか。

三、もともと、すべての人びとが、始めも知れない昔から、\* 煩惱ぼんのうの行為に縛られて、迷いを重ねているのは、二つのもとを知らないからである。

一つには生死のもとである迷いの心を、自己の本性と誤っていること。二つには、さとの本性である清浄しやうじやうな心が、迷いの心の裏側に隠されたまま自己の上にそなわって

ることを知らないことである。

拳こぶしをかためて臂ひじをあげると、目はこれを見て心はこのことを知る。しかし、その知る心は、真実の心ではない。

はからいの心は欲から起こり、自分の都合をはからう心であり、縁に触れて起こる心であつて、真実の本体のない、うつり変わる心である。この心を、実体のある心と思うところに、迷いが起こる。

次に、その拳を開くと、心は拳の開いたことを知る。動くものは手であろうか、心であろうか、それとも、そのいずれでもないのか。

手が動けば心も動き、また、心の動きにつれて手も動く。しかし、動く心は、心の表面であつて根本の心ではない。

四、すべての人びとには、清浄しょうじやうの本心がある。それが外のいんねん因縁によつて起こる迷いのちりのために覆おほわれている。しかし、あくまでも迷いの心は従であつて主ではない。

月は、しばらく雲に覆おおわれても、雲に汚されることもなく、また動かされることもない。

だから、人は浮動するちりのような迷いの心を自分の本性と思つてはならない。

また、人は、動かず、汚されないさとの本心に目覚めて、真実の自己に帰らなければならぬ。浮動する迷いの心にとらわれ、さかさまの見方に追われているので、人は迷いの巷ちやまたをさまようのである。

人の心の迷いや汚れは、欲とその変化する外界の縁に触れて起こるものである。

この縁の来ること去ることに關係なく、永久に動かず滅びない心、これが人の本体であつて、また主あるじでもある。

客が去つたからといって、宿屋がなくなつたとはいえないように、縁によつて生じたり滅したりするはからの心がなくなつたからといって、自分がなくなつたとはいえない。外の縁によつてうつり変わるはからは、心の本体ではない。

五、ここに講堂があつて、太陽が出て明るくなり、太陽が隠れて暗くするとする。

明るさは太陽に返し、暗さは夜に返すこともできよう。しかし、その明るさや暗さを知る力は、どこにも返すことはできない。それは心の本性、本体に返すよりほかに道はない。

太陽が現われて、明るいと見るのもひとときの心であり、太陽が隠れて、暗いと見るのもひとときの心である。

このように、明暗という外の縁に引かれて、明暗を知る心が起こるが、明暗を知る心は、ひとときの心であつて、心の本体ではなく、その明暗を知る力の根本は、心の本体である。外の因縁いんねんに引かれて生じたり滅したりする善悪・愛憎おもひの念は、人の心に積まれた汚れによつて起こるひとときの心なのである。

煩惱ぼんのうのちりに包まれて、しかも染まることも、汚れることもない、本来しようじよう清浄な心がある。まるい器うつわに水を入れるとまるくなり、四角な器に水を入れると四角になる。しかし、本来、水にまるや四角の形があるのではない。ところが、すべての人びとはこのことを

忘れて、水の形にとらわれている。

善しよ悪しあと見、好む好まぬと考え、有り無しと思ひ、その考えに使われ、その見方に縛られて、外のものを追つて苦しんでいる。

縛られた見方を外の縁に返し、縛られることのない自己の本性にたち帰ると、身も心も、何ものにもさえぎられることのない、自由な境地が得られるであろう。

## 第二節　かくれた宝

一、清浄しやうじやうの本心とは、言葉を変えていえばふつしやう仏性である。仏性とは、すなわちほとけ仏の種である。レンズを取つて太陽に向かい、もぐさを当てて火を求めるときに、火はどこから来るのであろうか。太陽とレンズとはあいへだたること遠く、合することはできないけれども、太陽の火がレンズを縁とし、もぐさの上に現われたことは疑いを入れない。また、もしも太陽があつても、もぐさに燃える性質がなければ、もぐさに火は起こらない。

いま、仏ほとけを生む根本である仏性ぶつしょうのもぐさに、仏の\*智慧ちえのレンズを当てれば、仏の火は、仏性の開ける信の火として、人びとというもぐさの上に燃えあがる。

仏はその智慧のレンズを取って世界に当てられるから、世をあげて信の火が燃えあがるのである。

二、人びとは、この本来そなわっているさとりの仏性にそむいて、\*煩惱ぼんのうのちりにとらわれ、ものの善よし悪あしの姿に心を縛られて、不自由を嘆いている。

なぜ、人びとは、本来さとりの心をそなえていながら、このように偽りを生み、仏性の光を隠し、迷いの世界にさまよっているのだろうか。

昔ある男が、ある朝鏡に向かつて、自分の顔も頭もないのにあわて驚いた。しかし、顔も頭もなくなくなったのではなく、それは鏡を裏返しに見えて、なくなったと思っていたのであった。

さとりに達しようとして達せられないからといって苦しむのは愚かであり、また、必要のないことである。さとりの中に迷いはないのであるが、限らない長い時間に、外の

ちりに動かされて、妄想を描き、その妄想によつて迷いの世界を作り出していたのである。

だから、妄想がやめば、さとりはおのずと返つてきて、さとりのほかに妄想があるのではないとわかるようになる。しかも、不思議なことに、ひとたびさとした者には妄想はなく、さとられるものもなかったことに気づくのである。

三、この仏性は尽きることがない。たとえ畜生に生まれ、餓鬼となつて苦しみ、地獄に落ちても、この仏性は絶えることはない。

汚い体の中にも、汚れた煩惱の底にも、仏性はその光を包み覆われている。

四、昔、ある人が友の家に行き、酒に酔つて眠っているうちに、急用で友は旅立った。友はその人の将来を気づかない、価値の高い宝石をその人の着物のえりに縫いこんでおいた。

そうとは知らず、その人は酔いからさめて他国へとさすらい、衣食に苦しんだ。その後、ふたたびその旧友にめぐり会い、「おまえの着物のえりに縫いこまれている宝石を

用いよ。」と教えられた。

このたとえのように、ぶつしよう仏性の宝石は、むさほ貪りやいか瞋りというほんのう煩惱の着物のえりに包まれて、汚されずにいるのである。

このように、ほとけどんな人でもちえ仏の智慧のそなわらないものはないから、おのれ仏は人びとを見通して、「すばらしいことだ、人びとはみなちえ仏の智慧とくどく功德とをそなえている。」とほめたたえる。

しかも、人びとは愚かさおおに覆われて、ものごとをさかさまに見、おのれのちえ仏性を見ることができなから、おのれ仏は人びとに教えて、そのもうぞう妄想を離れさせ、本来、おのれ仏と違わないものであることを知らせる。

五、ここでいうおのれ仏とはすでに成ってしまったおのれ仏であり、人びとは将来まさに成るべきおのれ仏であって、それ以外の相違はない。

しかし、成るべきおのれ仏ではあるけれども、おのれ仏と成ったのではないから、すでに道を成しとげたかのように考えるなら、それは大きな過ちを犯しているのである。

仏性はあつても、修めなければ現われず、現われなければ道を成しとげたのではない。

六、昔、ひとりの王があつて、象を見たことのない人を集め、目かくしして象に触れさせて、象とはどんなものであるかを、めいめいに言わせた。象の牙きはに触れた者は、象は大きな人參にんじんのようなものであるといい、耳に触れた者は、扇のようなものであるといい、鼻に触れた者は、杵きねのようなものであるといい、足に触れた者は、白うすのようなものであるといい、尾に触れた者は、繩なわのようなものであると答えた。ひとりとして象そのものをとらえ得た者はなかった。

人を見るのもこれと同じで、人の一部分に触れることができても、その本性である仏性を言い当てることは容易ではない。

死によつても失われず、煩惱ぼんのうの中にあつても汚れず、しかも永遠に滅びることのない仏性を見つけることは、仏ほとけと法ほとけによるもののはかは、でき得ないのである。

### 第三節 たらわれを離れて

一、このように、人には仏性ぶつしょうがあるという、それは他の教えでいう我がと同じであると思うかも知れないが、それは誤りである。

私の考えは執着心しやくしやくしんによつて考えられるけれども、さとした人にとっては、我は否定されなければならぬ執着であり、仏性は開き現わさなければならぬ宝である。仏性は我に似ているけれども、「われあり」とか「わがもの」とかいう場合の我ではない。

我があると考えるのは、ないものをあると考える、さかさまの見方であり、仏性を認めないことも、あるものをないと考える、さかさまの見方である。

例えば、幼子わかごが病にかかつて医師にかかるとすると、医師は薬を与えて、この薬のこなれるまでは乳を与えてはならないと言いつける。

母は乳房ちぶさにいがいものを塗り、子に乳をいやがらせる。後に、葉のこなれたときに、乳房を洗って、子の口にくくませる。母のこのふるまいは、わが子をいとおしむやさしい心からくるものである。

ちょうどこのように、世の中の誤った考えを取り去り、我がの執着しゅうじやくを取り去るために、我はな  
いと説いたが、その誤った見方を取り去ったので、あらためて仏性ぶつじようがあると説いたのである。

我は迷いに導くものであり、仏性はさとりに至らせるものである。

家に黄金こがねの箱を持ちながら、それを知らないために、貧しい生活をする人をあわれんで、その黄金の箱を掘り出して与えるように、\*仏ほとけは人びとの仏性を開いて、彼らに見せる。

二、それなら、人びとは、みなこの仏性をそなえているのに、どうして貴賤きせん・貧富ひんぶという差別があり、殺したり、欺あざむかれたりするようないとわしいことが起こるのであるか。

例えば、宮廷きゅうていに仕える一力士いっりきすが、眉間まゆかんに小さな金剛こんごうの珠玉しゆぎよくを飾ったまま相撲をとって、

その額ひたいを打ち、玉が膚はだの中に隠れてできものを生じた。力士は、玉をなくしたと思い、ただそのできものを治すために医師に頼む。医師は一目見て、そのできものが膚の中に隠れた玉のせいであると知り、それを取り出して力士に見せた。

人びとの仏性ぶつしょうも煩惱ぼんのうの塵ちりの中に隠れ、見失われているが、善き師によってふたたび見いだされるものである。

このように、仏性はあっても貪むさぼりと瞋いかりと愚かさのために覆おおわれ、業ごうと報むくいと縛られて、それぞれ迷いの境遇を受けるのである。しかし、仏性は実際には失われても破壊されてもおらず、迷いを取り除けばふたたび見いだされるものである。

たとえの中の力士が、医師によって取り出されたその玉を見たように、人びとも、仏ほとけの光によって仏性を見ることがあろう。

三、赤・白・黒と、さまざまに毛色の違った牝牛めうしでも、乳をしぼると、みな同じ白色の乳を得るように、いかに境遇が異なり、生活が異なっても、人びとはみな同じ

仏性をそなえている。

例えば、ヒマラヤ山に貴い薬があるが、それは深い草むらの下にあつて、人びとはこれを見つけない。昔、ひとりの賢人がいて、その香りを尋ねてありかを知り、槌とを作つて、その中に薬を集めた。しかし、その人の死後、薬は山にうもれ、槌の中の薬は腐り、流れるところによつて、その味を異にした。

仏性も、このたとえのように、深く煩惱ぼんのうの草むらに覆おおわれているから、人びとはこれを容易に見つけることができない。いまや仏ほとけはその草むらを開いて、彼らに示した。仏性の味は一つの甘さであるが、煩惱のためにさまざまの味を出し、人びとはさまざまに生き方をする。

四、この仏性は金剛石こんごうせきのように堅いから、破壊することはできない。砂や小石に穴をあけることはできても、金剛石に穴をあけることはできない。

身と心は破られることがあつても、仏性を破ることはできない。

仏性は、実にもつともすぐれた人間の特質である。世に、男はまさり女は劣るとする  
ならわしもあるが、仏の教えにおいては、男女の差別を立てず、ただこの仏性を知るこ  
とを尊いとす。

黄金の粗金を溶かして、そのかすを取り去り、鍊りあげると貴い黄金になる。心の粗  
金を溶かして煩惱のかすを取り去ると、どんな人でも、みなすべて同一の仏性を開き現  
わすことができる。

## 第四章 煩ほん惱のう

### 第一節 心のけがれ

一、ふつしょう \*仏性を覆おおいつつむ \*煩惱に二種類ある。

一つは知性の煩惱である。二つには感情の煩惱である。

この二つの煩惱は、あらゆる煩惱の根本的な分類であるが、このあらゆる煩惱の根本となるものを求めれば、一つには \*無明むみょう、二つには愛欲となる。

この無明と愛欲とは、あらゆる煩惱を生み出す自在の力を持っている。そしてこの二つこそ、すべての煩惱の源なのである。

無明とは無知のことで、ものの道理をわきまえないことである。愛欲は激しい欲望で、

生しゅじやくに対する執着しゅじやくが根本であり、見るもの聞くものすべてを欲しがる欲望ともなり、また転じて、死を願うような欲望ともなる。

この無明むみやうと愛欲あいよくとをもとにして、これから貪りむさぼ、瞋りいか、愚かさ、邪見じゃけん、恨みうら、嫉みねた、へつらい、たぶらかし、おごり、あなどり、ふまじめ、その他いろいろの煩惱ぼんのうが生まれてくる。

二、貪りの起きるのは、氣に入ったものを見て、正しくない考えを持つためである。瞋りの起きるのは、氣に入らないものを見て、正しくない考えを持つためである。愚しさはその無知のために、なさなければならぬことと、なしてはならぬことを知らないことである。邪見は正しくない教えを受けて、正しくない考えを持つことから起きる。

この貪りと瞋りと愚かさは、世の三つの火といわれる。貪りの火は欲にふけて、真心を失った人を焼き、瞋りの火は、腹を立てて、生けるものの命を害そこなう人を焼き、愚かさの火は、心迷ってほとけ仏の教えを知らない人を焼く。

まことに、この世は、さまざまの火に焼かれている。貪りの火、瞋りの火、愚かさの

火、生・老・病・死の火、憂い・悲しみ・苦しみ・悶えの火、さまざまの火によって炎と燃えあがっている。これらの煩惱の火はおのれを焼くばかりでなく、他をも苦しめ、人を身・口・意の三つの悪い行為に導くことになる。しかも、これらの火によってできた傷口のうみは触れたものを毒し、悪道に陥れる。

三、貪りは満足を得たい気持ちから、瞋りは満足を得られない気持ちから、愚かさは不浄な考えから生まれる。貪りは罪の汚れは少ないけれども、これを離れることは容易でなく、瞋りは罪の汚れが大きいけれども、これを離れることは早いものである。愚かさは罪の汚れも大きく、またこれを離れることも容易ではない。

したがって、人びとは気に入ったものの姿を見聞きしては正しく思い、気に入らないものの姿を見ては慈しみの心を養い、常に正しく考えて、この三つの火を消さなければならぬ。もしも、人びとが正しく、清く、無私の心に満ちているならば、煩惱によって惑わされることはない。

四、貪<sup>むさぼ</sup>り、瞋<sup>いか</sup>り、愚<sup>むさ</sup>かさは熱のようなものである。どんな人でも、この熱の一つでも持てば、いかに美しい広びろとした部屋に身を横たえても、その熱にうなされて、寝苦しい思いをしなければならぬ。

この三つの煩惱<sup>ぼんのう</sup>のない人は、寒い冬の夜、木の葉を敷物とした薄い寢床でも、快く眠ることができ、むし暑い夏の夜、閉じこめられた狭苦しい部屋でも、安らかに眠ることができる。

この三つは、この世の悲しみと苦しみのもとである。この悲しみと苦しみのもとを絶つものは、戒めと心の統一と智慧<sup>ちえ</sup>である。戒めは貪りの汚れを取り去り、正しい心の統一は瞋りの汚れを取り去り、智慧は愚かさの汚れを取り去る。

五、人間の欲にははてしがない。それはちようど塩水を飲むものが、いっこうに渴<sup>かわ</sup>きがとまらないのに似ている。彼はいつまでたっても満足することがなく、渴きはますます強くなるばかりである。

人はその欲を満足させようとするけれども、不満がつらいついていらだつだけである。

人は欲を決して満足させることができない。そこには求めて得られない苦しみがあり、満足できないときには、氣も狂うばかりとなる。

人は欲のために争い、欲のために戦う。王と王、臣と臣、親と子、兄と弟、姉と妹、友人同士、互いにこの欲のために狂わされて相争い、互いに殺しあう。

また人は、欲のために身をもちくずし、盗み、詐欺し、姦淫する。ときには捕らえられて、さまざまな刑を受け、苦しみ悩む。

また、欲のために、身・口・意の罪を重ね、この世で苦しみを受けるとともに、死んで後の世には、暗黒の世界に入つて、さまざまな苦しみを受ける。

六、愛欲は煩惱の王、さまざまの煩惱がこれにつき従う。

愛欲は煩惱の芽をふく湿地、さまざまな煩惱を生ずる。愛欲は善を食う悪鬼、あらゆる善を滅ぼす。

愛欲は花に隠れ住む毒蛇どくじや、欲の花を貪むさぼるものに毒を刺して殺す。愛欲は木を枯らすつる草、人の心に巻きつき、人の心の中の善のしるを吸い尽くす。愛欲は悪魔の投げた餌え、人はこれにつられて悪魔の道に沈む。

飢えた犬に血を塗ぬった乾いた骨を与えると、犬はその骨にしゃぶりつき、ただ疲れと悩みとを得るだけである。愛欲が人の心を養わないのは、まったくこれと同じである。

一切れの肉を争って獣は互いに傷つく。たいまつを持って風に向かう愚かな人は、ついにこのれ自身を焼く。この獣のように、また、この愚かな人のように、人は欲のためにおのれの身を傷つけ、その身を焼く。

七、外から飛んでくる毒矢は防ぐすがあつても、内からくる毒矢は防ぐすべがない。貪りと瞋いかりと愚かさとは、四つの毒矢にもたとえられるさまざまな病を起こすものである。

心に貪りと瞋りと愚かさがあるときは、口には偽りとむだ口悪口と二枚舌を使い、身には殺生せつしょうと盗みとよこしまな愛欲を犯すようになる。

意の三つ、口の四つ、身の三つ、これらを十悪という。

知りながらも偽りを言うようになれば、どんな悪事をも犯すようになる。悪いことをするから、偽りを言わなければならないようになり、偽りを言うようになるから、平気で悪いことをするようになる。

人の貪りも、愛欲も恐れも瞋りも、愚かさからくるし、人の不幸も難儀も、また愚かさからくる。愚かさは実に人の世の病毒にほかならない。

八、人は煩惱によって業を起こし、業によって苦しみを招く。煩惱と業と苦しみの三つの車輪はめぐりめぐってはてしがない。

この車輪の回転には始めもなければ終わりもない。しかも人はこの輪廻から逃れるすべを知らない。永遠に回帰する輪廻に従って、人はこの現在の生から、次の生へと永遠に生まれ変わってゆく。

限りない輪廻の間に、ひとりの人が焼き捨てた骨を積み重ねるならば、山よりも高く

なり、また、その間に飲んだ母の乳を集めるならば、海の水よりも多くなるであろう。だから、人には仏性ぶつしょうがあるとはいえ、煩惱ぼんのうの泥どろがあまりにも深いため、その芽生えは容易でない。芽生えない仏性はあってもあるとはいわれないので人びとの迷いははてしない。

## 第二節 人の性質

一、人の性質は、ちようど入口のわからない藪やぶのように、わかりにくい。これに比べると、獣の性質はかえつてわかりやすい。このわかりにくい性質の人を区分して、次の四種類とする。

一つには、自ら苦しむ人で、間違つた教えを受けて苦行する。

二つには、他人を苦しめる人で、殺したり盗んだり、そのほかさまざましわざなむごい仕事をしわざをする。

三つには、自ら苦しむとともに他人をも苦しめる人である。

四つには、自らも苦しまず、また他人をも苦しめない人で、欲を離れて安らかに生き、<sup>ほろけ</sup>仏の教えを守つて、殺すことなく盗むことなく、清らかな行いをする人である。

二、またこの世には三種の人がある。岩に刻んだ文字のような人と、砂に書いた文字のような人と、水に書いた文字のような人である。

岩に刻んだ文字のような人とは、しばしば腹を立てて、その怒りを長く続け、怒りが、刻み込んだ文字のように消えることのない人をいう。

砂に書いた文字のような人とは、しばしば腹を立てるが、その怒りが、砂に書いた文字のように、速やかに消え去る人を指す。

水に書いた文字のような人とは、水の上に文字を書いても、流れて形にならないように、他人の悪口や不快なことをば聞いても、少しも心に跡を留<sup>と</sup>めることもなく、温和な気の満ちている人のことをいう。

また、ほかにも三種類の人がある。第一の人は、その性質がわかりやすく、心高ぶり、

かるはずみであつて、常に落ち着きのない人である。第二の人は、その性質がわかりにくく、静かにへりくだつて、ものごとに注意深く、欲を忍ぶ人である。第三の人は、その性質がまったくわかりにくく、自分の<sup>ほんのう</sup>煩惱を滅ぼし尽くした人のことである。

このように、さまざまに人を区別することができるが、その実、人の性質は容易に知ることはできない。ただ、<sup>ほとけ</sup>仏だけがこれらの性質を知りぬいて、さまざまに教えを示す。

### 第三節 現実の人生

一、ここに人生にたとえた物語がある。ある人が、河の流れに舟を浮かべて下るとする。岸に立つ人が声をからして叫んだ。「楽しそうに流れを下ることをやめよ。下流には波が立ち、渦巻<sup>うずま</sup>きがあり、鰐<sup>わに</sup>と恐ろしい夜叉<sup>やしや</sup>との住む淵<sup>ふち</sup>がある。そのままに下れば死ななければならぬ。」と。

このたとえで「河の流れ」とは、愛欲の生活をいい、「楽しそうに下る」とは、自分の身に執着<sup>しゅうじやく</sup>することであり、「波立つ」とは、怒りと悩みの生活を表わし、「渦巻き」と

は、欲の楽しみを示し、「鰐わにと恐ろしい夜叉やしやの住む淵ふち」とは、罪によって滅びる生活を指し、「岸に立つ人」とは、\*仏ほとけをいうのである。

ここにもう一つのたとえがある。ひとりの男が罪を犯して逃げた。追手が追ってきたので、彼は絶体絶命になって、ふと足もとを見ると、古井戸があり、藤蔓ふじつるが下がっている。彼はその藤蔓をつたって、井戸の中へ降りようとすると、下で毒蛇レクシヤが口を開けて待っているのが見える。しかたなくその藤蔓を命の綱にして、宙ちゆうにぶら下がっている。やがて、手が抜けそうに痛んでくる。そのうえ白黒二匹ねずみの鼠ねずみが現われて、その藤蔓をかじり始める。

藤蔓がかみ切られたとき、下へ落ちて餌食えじきにならなければならぬ。そのとき、ふと頭をあげて上を見ると、蜂はちの巣はちみつから蜂蜜はちみつの甘いしずくが一滴二滴と口の中へしたたり落ちてくる。すると、男は自分の危い立場を忘れて、うっとりとなるのである。

この比喩たとえで、「ひとり」とは、ひとり生まれひとり死ぬ孤独の姿であり、「追手」や「毒蛇」は、この欲のもとになるおのれの身体のことであり、「古井戸の藤蔓」とは、人の命のことであり、「白黒二匹の鼠」とは、歳月を示し、「蜂蜜のしずく」とは、眼前の欲

の楽しさのことである。

二、また、さらにもう一つのたとえを説こう。王が一つの箱に四匹の毒蛇どくじやを入れ、ひとりの男にその蛇を養へびうことを命じて、もし一匹の蛇でも怒らせれば、命を奪うと約束させる。男は王の命令を恐れて、蛇の箱を捨てて逃げ出す。

これを知った王は、五人の臣下に命じて、その後を追わせる。彼らは偽って彼に近づき、連れ帰ろうとする。男はこれを信じないで、ふたたび逃げて、とある村に入り、隠かくれ家がを探す。

そのとき、空に声あつて、この村は住む人もなく、そのうえ今夜、六人の賊が来て襲うであろうと告げる。彼は驚いて、ふたたびそこを逃げ出す。行く手に荒波を立てて激しく流れている河がある。渡るには容易でないが、こちら岸の危険を思いかたつて筏を作り、かろうじて河を渡ることを得、はじめて安らぎを得た。

「四匹の毒蛇の箱」とは地水火風の四大要素から成るこの身のことである。この身は、欲のもとであつて、心の敵である。だから、彼はこの身を厭いとつて逃げ出した。

「五人の男が偽って近づいた」とは、同じくこの身と心とを組み立てている五つの要素のことである。

「隠れ家」とは、人間の六つの感覚器官のことであり、「六人の賊」とは、この感覚器官に対する六つの対象のことである。このように、すべての官能の危いのを見て、さらに逃げ出し、「流れの強い河を見た」とは、\*煩惱ほんのうの荒れ狂う生活のことである。

この深さの測りはか知れない煩惱の河に、教えの筏いかだを浮かべて、安らかな彼の岸に達したのである。

三、世に母も子を救い得ず、子も母を救い得ない三つの場合がある。すなわち、大火災と大水害と、大盗難のときである。しかし、この三つの場合においても、ときとしては、母と子が互いに助け合う機会がある。

ところがここに、母は子を絶対に救い得ず、子も母を絶対に救い得ない三つの場合がある。それは、老いの恐れと、病の恐れと、死の恐れとの襲い来ったときのことである。

母の老いゆくのを、子はどのようにしてこれに代わることができようか。子の病む姿のいじらしさに泣いても、母はどうして代わって病むことができよう。子供の死、母の死、いかに母子であつても、どうしても代わりあうことはできない。いかに深く愛しあつている母子でも、こういう場合には絶対に助けあうことはできないのである。

四、人間世界において悪事をなし、死んで地獄に墮ちた罪人に、閻魔王が尋ねた。

「おまえは人間の世界にいたとき、三人の天使に会わなかつたか。」「大王よ、わたくしはそのような方には会いません。」

「それでは、おまえは年老いて腰を曲げ、杖にすがつて、よぼよぼしている人を見なかつたか。」「大王よ、そういう老人ならば、いくらでも見ました。」「おまえはその天使に会いながら、自分も老いゆくものであり、急いで善をなさなければならぬと思わず、今日の報いを受けるようになった。」

「おまえは病にかかり、ひとりで寝起きもできず、見るも哀れに、やつれはてた人を見なかつたか。」「大王よ、そういう病人ならいくらでも見ました。」「おまえは病人とい

うその天使に会いながら、自分も病まなければならぬ者であることを思わず、あまりにもおろそかであったから、この地獄へくることになったのだ。」

「次に、おまえは、おまえの周囲で死んだ人を見なかったか。」「大王よ、死人ならば、わたくしはいくらでも見てまいりました。」「おまえは死を警め告げる天使に会いながら、死を思わず善をなすことを怠つて、この報いを受けることになった。おまえ自身のこととは、おまえ自身がその報いを受けなければならない。」

五、裕福な家の若い嫁であつたキサールゴータミーは、そのひとり子の男の子が、幼くして死んだので、気が狂い、冷たい骸を抱いて巷に出、子供の病を治す者はいないかと尋ね回つた。この狂つた女をどうすることもできず、町の人びとはただ哀れげに見送るだけであつたが、釈尊の信者がこれを見かねて、その女に祇園精舎の釈尊のもとに行くようにすすめた。彼女は早速、釈尊のもとへ子供を抱いて行つた。

釈尊は静かにその様子を見て、「女よ、この子の病を治すには、芥子の実がある。町

に出て四・五粒もらってくるがよい。しかし、その芥子けしの実は、まだ一度も死者の出ない家からもらつてこなければならぬ。」と言われた。

狂った母は、町に出て芥子の実を求めた。芥子の実は得やすかつたけれども、死人の出ない家は、どこにも求めることができなかつた。ついに求める芥子の実を得ることができず、仏ほとけのもとにもどつた。かの女は釈尊しゃくそんの静かな姿に接し、初めて釈尊のことばの意味をさとり、夢から覚めたように気がつき、わが子の冷たい骸むくろを墓所ほしよにおき、釈尊のもとに帰つてきて弟子となつた。

#### 第四節 迷いのすがた

一、この世の人びとは、人情が薄く、親しみ愛することを知らない。しかも、つまらないことを争いあい、激しい悪と苦しみの中にあつて、それぞれの仕事を勤めて、ようやく、その日を過すごしている。

立場の高下にかかわらず、富とみの多少にかかわらず、すべてみな金銭のことだけに苦し

む。なければないで苦しみ、あればあるで苦しみ、ひたすらに欲のために心を使つて、安らかなときがない。

富める人は、田があれば田を憂え、家があれば家を憂え、すべて存在するものに執着して憂いを重ねる。あるいは災いにあい、困難に出会い、奪われ焼かれてなくなると、苦しみ惱んで命までも失うようになる。しかも死への道はひとりで歩み、だれもつき従う者はない。

貧しいものは、常に足らないことに苦しみ、家を欲しがり、田を欲しがり、この欲しい欲しいの思いに焼かれて、心身ともに疲れはててしまう。このために命を全うすることができずに、途中で死ぬようなこともある。

すべての世界が敵対するかのように見える、死出の旅路は、ただひとりだけで、はるか遠くに行かなければならない。

二、また、この世には五つの悪がある。一つには、あらゆる人から地に這う虫に至るまで、すべてみな互いにいがみあい、強いものは弱いものを倒し、弱いものは強いもの

を欺あざむき、互いに傷つけあい、いがみあっている。

二つには、親子、兄弟、夫婦、親族など、すべて、それぞれおのれの道がなく、守るところもない。ただ、おのれを中心にして欲をほしのままにし、互いに欺きあい、心と口とが別々になっていて誠がない。

三つには、だれも彼もみなよこしまな思いを抱いだき、みだらな思いに心をこがし、男女の間に道がなく、そのために、徒党を組んで争い戦い、常に非道を重ねている。

四つには、互いに善い行為をすることを考えず、ともに教えあつて悪い行為をし、偽り、むだ口、悪口、二枚舌を使って、互いに傷つけあっている。ともに尊敬しあうことを知らないで、自分だけが尊い偉いものであるかのように考え、他人を傷つけて省みるところがない。

五つには、すべてのものは怠おこたりなまけて、善い行為をすることさえ知らず、恩も知らず、義務も知らず、ただ欲のままに動いて、他人に迷惑をかけ、ついには恐ろしい罪を犯すようになる。

三、人は互いに敬愛し、施しあわなければならぬのに、わずかな利害のために、互いに憎み争うことだけをしている。しかも、争う気持ちがおほんのわずかでも、時の経過に従つてますます大きく激しくなり、大きな恨みになることを知らない。

この世の争いは、互いに害そごないあつても、すぐに破滅に至ることはないけれども、毒を含み、怒りが積み重なり、憤いきしおりを心にしっかりと刻みつけてしまい、生をかえ、死をかえて、互いに傷つけあうようになる。

人はこの愛欲の世界に、ひとり生まれ、ひとり死ぬ。未来の報むくいは代わつて受けてくれるものがなく、おのれひとりですぐに当たらなければならぬ。

善と悪とはそれぞれその報いを異にし、善は幸いを、悪は災いをもたらし、動かすことのできない道理によつて定まつている。しかも、それぞれが、おのれの行為に対する責任をにない、報いの定まつているところへ、ひとり赴おもむく。

四、恩愛のきずなにながれては憂うれいに閉ざされ、長い月日を経へても、いたましい思

いを解くことができない。それとともに、激しい貪りむさぼにおぼれては、悪意に包まれ、でたために事を起こし、他人と争い、真実の道に親しむことができず、寿命も尽きないうちに、死に追いやられ、永劫えいごうに苦しまなければならぬ。

このような人の仕業しわざは、自然の道に逆らい、世間の道理にそむいているので、必ず災いを招くようになり、この世でも、後の世でも、ともに苦しみを重ねなければならぬ。

まことに、世俗の事はあわただしく過ぎ去ってゆき、頼りとすべきものは何一つなく、力になるものも何一つない。この中であって、こぞってみな快樂のとりことなっていることは、嘆かわしい限りといわなければならない。

五、このような有様が、まことにこの世の姿であり、人びとは苦しみの中にあつた。だ悪だけを行い、善を行うことを少しも知らない。だから自然の道理によって、さらに苦しみの報むくいを受けることを避けられない。

ただおのれにのみ何でも厚くして、他人に恵むことを知らない。そのうえ、欲に迫ら

れてあらゆる<sup>ほんのう</sup>煩惱を働かせ、そのために苦しみ、またその結果によって苦しむ。

榮華の時勢<sup>じせい</sup>は永續せず、たちまちに過ぎ去る。この世の快樂も何一つ永續するものはない。

六、だから、人は世俗の事を捨て、健全なときに道を求め、永遠の生を願わなければならぬ。道を求めることをほかにして、どんな頼み、どんな楽しみがあるというのか。

ところが、人びとは善い行為をすれば善を得、道になつた行為をすれば道を得るということを信じない。また、施せば幸いを得るということを信じない。すべて善悪にかわるすべてのことを信じない。

ただ、誤つた考えだけを持ち、道も知らず、善も知らず、心が暗くて、吉凶禍福<sup>きつきょうかふく</sup>が次々に起こってくる道理を知らず、ただ、眼前に起こることだけについて泣き悲しむ。

どんなものでも永久に変わらないものはないのであるからすべてうつり変わる。ただこれについて苦しみ悲しむことだけを知っていて、教えを聞くことがなく、心に深く思

うことがなく、ただ眼前の快樂におぼれて、財貨や色欲を貪むさほつて飽あきることを知らない。

七、人びとが、遠い昔から迷いの世界を經へめぐり、憂うれいと苦しみに沈んでいたことは、ことばでは言い尽くすことができない。しかも、今日に至っても、なお迷いは絶えることがない。ところが、いまほし私の教しえに会い、私の名を聞いて信まずることができたのは、まことにうれしいことである。

だから、よく思いを重ね、悪を遠ざけ、善を選び、努め行わなければならない。

いま、幸いにも私の教しえに会うことができたのであるから、どんな人も私の教しえを信じて、私の国くにに生まれることを願ねがわなければならない。私の教しえを知った以上は、人は他人に従したがって煩わづら悩のうや罪悪ざいあくのとりこになつてはならない。また、私の教しえをおのれだけのものとするしることなく、それを実践し、それを他人に教しえなければならぬ。

## 第五章 仏の救い

### 第一節 仏の願い

一、人びとの生活は、すでに説いたように、その\*煩惱ほんのうは断ちにくいものであり、また、初めもわからない昔から、山のような\*罪業ざいごうをになって、迷いに迷いを重ねてきている。だから、たとえ\*仏性の宝ぶつじょうのたからをそなえていても、開き現わすことは容易ではない。

この人間の有様を見通された\*仏ほとけは、はるかな昔に、ひとりの\*菩薩ぼさつとなり、人びとを哀あわれみ、あらゆる恐れを抱いだくものために大慈悲者となろうとして、次のような数多くの願いを起こした。たとえ、この身はどんな苦しみの毒の中にあっても、必ず努め励んでなしとげようと誓った。

(a)たとえ、わたしが仏と成ったとしても、わたしの国に生まれる人びとが、確かに仏と成るべき身の上となり、必ずさとりに至らないならば、誓ってさとりを開かないであろう。

(b)たとえ、わたしが仏ほとけと成ったとしても、わたしの光明に限りがあつて、世界のはし  
ばしまで照らすことがないならば、誓つてさとりを開かないであらう。

(c)たとえ、わたしが仏と成ったとしても、わたしの寿命に限りがあつて、どんな数で  
あつてもかぞえられるほどの数であるならば、誓つてさとりを開かないであらう。

(d)たとえ、わたしが仏と成ったとしても、十方の世界のあらゆる仏が、ことごとく  
称讚しょうさんして、わたしの名前を称とえないようなら、誓つてさとりを開かないであらう。

(e)たとえ、わたしが仏と成ったとしても、十方のあらゆる人びとが眞実の心をもつて  
深い信心を起こして、わたしの国に生まれようと思つて、十返べんわたしの名前を念じて、  
生まれないようなら、誓つてさとりを開かないであらう。

(f)たとえ、わたしが仏と成ったとしても、十方のあらゆる人びとが、道を求める心を  
起こし、多くの功德くどくを修め、眞実の心をもつて願いを起こし、わたしの国へ生まれよう  
と思つているのに、もしもその人の寿命が尽きるとき、偉大な菩薩ぼさつたちにとりまかれて、  
その人の前に現われないようなら、誓つてさとりを開かないであらう。

(g)たとえ、わたしが仏ほとけと成つても、十方のあらゆる人びとが、わたしの名前を聞いて、わたしの国に思いをかけ、多くの功德くどくのもとを植え、心をこめて供養くようして、わたしの国に生まれようと思つているのに、思いどおりに生まれることができないようなら、誓つてさとりを開かないであらう。

(h)たとえ、わたしが仏と成つたとしても、わたしの国に来て生まれる者が、「次の生には仏と成るべき位」に到達しないようなら、誓つてさとりを開かないであらう。ただし、自らの願いに従つて、人びとのために大なる誓いの鎧よろいを身につけ、一切の世間の利益りやくと平安のために努力し、数多くの人びとを導いてさとりに入らせ、大悲の功德を修める者は、その限りではない。

(i)たとえ、わたしが仏と成つたとしても、十方の世界のあらゆる人びとが、わたしの光明に触れて、身も心も和らぎ、この世のものよりもすぐれたものになるようでありたい。もしもそうでないようなら、誓つてさとりを開かないであらう。

(j)たとえ、わたしが仏と成つたとしても、十方の世界のあらゆる人びとが、わたしの名前を聞いて、生死にとらわれることのない深い信念と、さえぎられることのない深い

\*智慧とを得られないようなら、誓つてさとりを開かないであろう。

わたしは、いま、このような誓いを立てる。もしもこの願いを満たすことができないようなら、誓つてさとりを開かないであろう。限りのない光明の主となり、あらゆる国々を照らして世の中の悩みを救い、人びとのために、教えの蔵を開いて、広く功德の宝を施すであろう。

二、このように願いを立てて、はかり知れない長い間功德を積み、清らかな国を作り、すではるかな昔に仏と成り、現にその極樂世界において、教えを説いている。

その国は清く安らかで、悩みを離れ、さとりの樂しみが満ちあふれ、着物も食物もそしてあらゆる美しいものも、みなその国の人びとの心の思うままに現われる。快い風がおもむろに吹き起こつて、宝の木々をわたると、教えの声が四方に流れて、聞くものの心の垢を取り去っている。

また、その国にはさまざまな色の蓮の花が咲きにおい、花ごとにはかり知れない花びらがあり、花びらごとにその色の光が輝き、光はそれぞれ仏の智慧の教えを説いて、聞

く人びとを仏の道に安らわせている。

三、いま十方のあらゆる仏たちから、この仏のすぐれた徳がたたえられている。

どんな人でも、この仏の名前を聞いて、信じ喜ぶ一念で、その仏の国に生まれることができるのである。

その仏の国に至る人びとは、みな寿命に限りがなく、また自らほかの人びとを救いたいという願いを起こし、その願いの仕事にいそむことになる。

これらの願いを立てることによって、執着を離れ、\*無常をさとる。おのれのためになると同時に他人をも利する行為を実践し、人びととともに\*慈悲に生き、この世俗の生活の足かせや執着にとらわれない。

人びとはこの世の苦難を知りつつ、同時にまた、仏の慈悲の限りない可能性をも知っている。その人びとの心には、執着がなく、おのれとか、他人とかの区別もなく、行くも帰るも、進むも止まるも、こだわるところがなく、まさに心のあるがままに自由であ

る。しかも、仏が慈悲をたれた人びととともにとどまることを選ぶのである。

だから、もしもひとりの人がいて、この仏の名前を聞いて、喜び勇み、ただ一度でもその名を念ずるならば、その人は大いなる利益を得るであろう。たとえこの世界に満ちみちている炎の中にも分け入って、この教えを聞いて信じ喜び、教えのとおりに行わなければならない。

もしも、人びとが真剣にさとりを得ようと望むなら、どうしても、この仏の力によらなければならない。仏の力がなくてさとりを得ることは、普通の人間のできるところではない。

四、いま、この仏は、ここよりはるか遠くのところにいるのではない。その仏の国ははるか遠くにあるけれども、仏を思い念じている者の心の中にもある。

まず、この仏の姿を心に思い浮かべて見ると、千万の金色に輝き、八万四千の姿や特徴がある。一つ一つの姿や特徴には八万四千の光があり、一つ一つの光は、一つ残らず、念仏する人を見すえて、包容して捨てることがない。

この仏を拝み見ることによって、また仏の心を拝み見ることになる。仏の心とは大い

なる慈悲じひそのものであり、信心を持つ者を救いとるのはもちろん、仏ほとけの慈悲を知らず、あるいは忘れていたような人びとをも救いとるのである。

信あるものには仏は仏と一つになる機会を与える。この仏を思い念ずると、この仏は、あらゆるところに満ちみちる体であるから、あらゆる人びとの心の中に入る。

だからこそ、心に仏を思うとき、その心は、実に円満な姿や特徴をそなえた仏であり、この心は仏そのものとなり、この心がそのまま仏となる。

清く正しい信心をもつものは、心が仏の心そのままであると思ひ描くべきである。

五、仏の体にはさまざますがたの相があり、人びとの能力に応じて現われ、この世界に満ちみちて、限りがなく、人の心の考えおよぶところではない。それは宇宙、自然、人間のそれぞれの姿の中で仰ぎ見ることができる。

しかし、仏の名を念ずるものは、必ずその姿を拜むことができる。この仏は常にふたりの菩薩ぼさつを従えて、念仏する人のもとに迎えに来る。仏の化身はあらゆる世界に満ちみ

ちているけれども、信心をもつ者だけが、それを拝み見ることができるといふことができる。

仏の仮の姿を思うことさえ、限りない幸福を得るのであるから、眞実の仏を拝み見ることの功德には、はかり知れないものがある。

六、この仏の心は、大なる慈悲と智慧そのものであるから、どんな人をも救う。

愚かさのために恐ろしい罪を犯し、心の中では貪り、瞋り、愚かな思いを抱き、口では偽り、むだ口、悪口、二枚舌を使い、身では殺生し、盗み、よこしまな愛欲を犯すという十悪をなす者は、その悪い行いのために、永遠に未来の苦しみを受けることとなる。

その人の命の終わるとき、善い友が来てねんごろに、「あなたはいま苦しみが迫つていて、仏を思うこともできないであろう。ただこの仏の名を称えるがよい。」と教える。

この人が心一つにして仏の名を称えると、ひと声ひと声のうちに、はかり知れない迷いの世界に入る罪を除いて救う。

もし人が、この仏の名を称えるならば、永遠に尽きることのない迷いの世界に入る罪をも除くのである。ましてや一心に思うに至つては、なおさらのことである。

まことに念仏する人は、白蓮華のようになすばらしい人である。慈悲と智慧との二菩薩はその友となり、また、常に道を離れることなく、ついに浄土に生まれることになるであろう。

だから、人びとはこのことばを身につけなければならない。このことばを身につけるということは、この仏の名を身につけることである。

## 第二節 清らかな国土

一、この\*仏はいま、現にいて、\*法を説いている。その国の人びとはみな苦しみを知らず、ただ楽しみの日のみを送るので、極楽というのである。

その国には七つの宝でできた池があり、中には清らかな水をたたえ、池の底には黄金の砂が敷かれ、車の輪のように大きい蓮華が咲いている。その蓮華は、青い花には青い

光が、黄色の花には黄色の光が、赤い花には赤い光が、白い花には白い光があり、清らかな香りをあたりに漂ただよわせている。

また、その池の周囲のあちこちには、金・銀・青玉・水晶の四つの宝で作った楼閣ろうかくがあり、そこには大理石で作った階段がある。また、別の場所には池の上につき出た欄干らんかんがあり、宝玉ほうぎょくで飾られた幕で取り囲まれている。また、その間にはよいにおいのする木々や花がいつぱいに咲いた茂みがある。

空には神々こうじゅうしい音楽が鳴り、大地には黄金の色が照り映えて、夜昼六度も天の花が降り、その国の人びとはそれを集め花皿に盛って、ほかのすべての仏国へ持ってゆき、無数の仏ほとけに供養する。

二、また、この国の園には、白鳥、孔雀くじゃく、おうむ、百舌鳥もず、迦陵頻伽かりようびんがなど数多くの鳥が、常に優雅ゆうがな声を出し、あらゆる徳と善とをたたえ、教えを宣布せんぷしている。

人びとはこの声を聞いて、みな仏を念じ、教えを思い、人の和合を念ずる。だれでも

この声の音楽を聞くものは、仏ほとけの声を聞く思いがし、仏への信心を新たにし、教えを聞く喜びを新たににして、あらゆる国の仏の教えを受ける者との友情を新たにする。

そよ風が吹き、宝の木々の並木をよぎり、輝く鈴をつけた網に触れると、微妙な音を出し、一時に百千の音楽がかなでられる。

この音を聞く者は、また自然に仏を念じ、教えを思い、人の和合を念ずるようになる。その仏の国は、このような功德くどくと美しい飾りとをそなえている。

三、どういうわけで、この国の仏は無量光仏、無量寿仏と名づけられるのであろうか。かの仏の光は量はかることができず、十方の国々を照らして少しもさえぎられない。またその寿命も限りがないから、そう名づけるのである。

そして、その国に生まれる人びとも、みな、ふたたび迷いの世界にもどらない境地に至り、その数はかぞえ尽くすことができなからである。

また、この仏の光ほとけによって新しい命に目覚める人びとの数は無量だからである。

ただ、この仏の名を心に保ち、一日または七日にわたって、心を一つにして動揺することがないならば、その人の命が終わるとき、この仏は、多くの聖ひじりたちとともに、その人の前に現われる。その人の心はうろたえることなく、ただちにその国に生まれることができる。

もし人が、この仏の名を聞き、この教えを信ずるならば、仏たちに守られ、この上もない正しいさとりを得ることができるのである。



THE WAY OF PRACTICE

は げ み

# 第一章 さとりへの道

## 第一節 心を清める

一、人には、迷いと苦しみのもとである\*煩惱ほんのうがある。この煩惱のきずなから逃れるには五つの方法がある。

第一には、ものの見方を正しくして、その原因と結果とをよくわきまえる。すべての苦しみのもとは、心の中の煩惱であるから、その煩惱がなくなれば、苦しみのない境地が現われることを正しく知るのである。

見方を誤るから、我がという考えや、原因・結果の法則を無視する考えが起こり、この間違つた考えにとらわれて煩惱を起こし、迷い苦しむようになる。

第二には、欲をおさえしずめることによって煩惱をしずめる。明らかな心によって、眼・

耳・鼻・舌・身・意こころの六つに起こる欲をおさえしずめて、煩惱ぼんのうの起こる根元を断ち切る。

第三には、物を用いるに当たつて、考えを正しくする。着物や食物を用いるのは享樂のためとは考えない。着物は暑さや寒さを防ぎ羞恥しゆうちを包むためであり、食物は道を修めるもとなる身体を養うためにあると考える。この正しい考えのために、煩惱は起こることができなくなる。

第四には、何ごととも耐え忍ぶことである。暑さ・寒さ・飢え・渴かわきを耐え忍び、ののしりや謗そしりを受けても耐え忍ぶことによつて、自分の身を焼き滅ぼす煩惱の火は燃え立たなくなる。

第五には、危険から遠ざかることである。賢い人が、荒馬や狂犬の危険に近づかないように、行つてはならない所、交わつてはならない友は遠ざける。このようにすれば煩惱の炎は消え去るのである。

二、世には五つの欲がある。眼に見るもの、耳に聞く声、鼻にかぐ香り、舌に味わう味、身に触れる感じ、この五つのもをこちよく好ましく感ずることである。

多くの人は、その肉体の好ましさに心ひかれて、これにおぼれ、その結果として起こ

る災いを見ない。これはちょうど、森の鹿が<sup>しか</sup>、狩師のわなにかかって捕らえられるように、悪魔のしかけたわなにかかったのである。まことにこの五欲はわなであり、人びとはこれにかかって<sup>ほんのう</sup>煩惱を起こし、苦しみを生む。だから、この五欲の災いを見て、そのわなから免れる道を知らなければならない。

三、その方法は一つではない。例えば、蛇と<sup>へび</sup>鰐と鳥と犬と狐と猿と、その習性を別に<sup>わに</sup>する六種の生きものを捕らえて強いなわで縛り、そのなわを結び合わせて放つとする。

このとき、この六種の生きものは、それぞれの習性に従って、おのおのその住みかに帰ろうとする。蛇は塚に、鰐は水に、鳥は空に、犬は村に、狐は野に、猿は森に。このためにお互いに争い、力のまさったものの方へ、引きずられていく。

ちょうどこのたとえのように、人びとは眼に見たもの、耳に聞いた声、鼻にかいだ香り、舌に味わった味、身に触れた感じ、及び、意に思ったもののために引きずられ、その中の誘惑のもつとも強いものの方に引きずられてその支配を受ける。

またもし、この六種の生きものを、それぞれなわで縛り、それを丈夫な大きな柱に縛りつけておくとする。はじめの間は、生きものたちはそれぞれの住みかに帰ろうとするが、ついには力尽き、その柱のかたわらに疲れて横たわる。

これと同じように、もし、人がその心を修め、その心を鍛練しておけば、他の五欲に引かれることはない。もし心が制御せいぎよされているならば、人びとは、現在においても未来においても幸福を得るであろう。

四、人びとは欲の火の燃えるままに、はなやかな名声を求め、それはちょうど香かうが薫かおりつつ自らを焼いて消えてゆくようなものである。いたずらに名声を求め、名誉むぎよを貪むさぼつて、道を求めることを知らないならば、身はあやうく、心は悔いにさいなまれるであろう。名譽と財と色香いろかとを貪り求めることは、ちようど、子供が刃やいばに塗ぬられた蜜みつをなめるようなものである。甘さを味わっているうちに、舌を切る危険をおかすこととなる。

愛欲を貪り求めて満足を知らない者は、たいまつをかかげて風に逆らいゆくようなも

のである。手を焼き、身を焼くのは当然である。

貪<sup>むさぼ</sup>りと瞋<sup>いか</sup>りと愚かさという三つの毒に満ちている自分自身の心を信じてはならない。自分の心をほしいままにしてはならない。心をおさえ欲のままに走らないように努めなければならぬ。

五、さとりを得ようと思うものは、欲の火を去らなければならぬ。干し草を背に負う者が野火を見て避けるように、さとりの道を求める者は、必ずこの欲の火から遠ざからなければならぬ。

美しい色を見、それに心を奪われることを恐れて眼をくり抜こうとする者は愚かである。心が主<sup>あるし</sup>であるから、よこしまな心を断てば、従者である眼の思いは直<sup>ただ</sup>ちにやむ。

道を求めて進んでゆくことは苦しい。しかし、道を求める心のないことは、さらに苦しい。この世に生まれ、老い、病んで、死ぬ。その苦しみには限りがない。

道を求めてゆくことは、牛が重荷を負って深い泥<sup>どろ</sup>の中を行くときに、疲れてもわき目

もふらずに進み、泥どろを離れてはじめて一息つくのと同じでなければならぬ。欲の泥はさらに深いが、心を正しくして道を求めてゆけば、泥を離れて苦しみはうせるであろう。

六、道を求めてゆく人は、心の高ぶりを取り去って、教えの光を身に加えなければならない。どんな金銀・財宝の飾りも、徳の飾りには及ばない。

身を健やかにし、一家を榮えさせ、人びとを安らかにするには、まず、心をととのえなければならぬ。心をととのえて道を樂しむ思いがあれば、徳はおのずからその身にそなわる。

宝石は地から生まれ、徳は善から現われ、\*智慧ちえは静かな清い心から生まれる。広野のように広い迷いの人生を進むには、この智慧の光によって、進むべき道を照らし、徳の飾りによって身をいましめて進まなければならない。

貪むさぼりと瞋いかりと愚かさという三つの毒を捨てよ、と説く\*仏ほとけの教えは、よい教えであり、その教えに従う人は、よい生活と幸福を得る人である。

七、人の心は、ともすればその思い求める方へと傾く。貪りを思えば貪りの心が起くる。瞋りを思えば瞋りの心が強くなる。愚かなことを思えば愚かな心が多くなる。

牛を飼う人は、秋のとり入れ時になると、放してある牛を集めて牛小屋に閉じこめる。これは牛が穀物を荒して抗議を受けたり、または殺されたりすることを防ぐのである。

人もそのように、よくないことから起こる災いを見て、心を閉じこめ、悪い思いを破り捨てなければならぬ。貪りと瞋りと損なう心を砕いて、貪らず、瞋らず、損なわぬ心を育てなければならぬ。

牛を飼う人は、春になって野原の草が芽をふき始めると牛を放す。しかし、その牛の群れの行方を見守り、その居所に注意を怠らない。

人もまた、これと同じように、自分の心がどのよう動いているか、その行方を見守り、行方を見失わないようにしなければならない。

八、釈尊がコーサンビーの町に滞在していたとき、釈尊に怨みを抱く者が町の悪者を

買収し、しゃんぞん 釈尊の悪口を言わせた。釈尊の弟子たちは、町に入ってたくはつ 托鉢しても一物も得られず、ただそしりの声を聞くだけであつた。

そのときアーナンダは釈尊にこう言った。「せぞん 世尊よ、このような町に滞在することはありません。他にもっとよい町があると思います。」「アーナンダよ、次の町もこのようであつたらどうするのか。」

「世尊よ、また他の町へ移ります。」

「アーナンダよ、それではどこまで行つてもきりが無い。わたしはそしりを受けたときには、じつとそれに耐え、そしりの終わるのを待つて、他へ移るのがよいと思う。アーナンダよ、ほとけ 仏は、利益・害・中傷・ほまれ・たたえ・そしり・苦しみ・楽しみという、この世の八つのことによつて動かされることはない。こういつたことは、間もなく過ぎ去るであろう。」

## 第二節 善い行い

一、道を求めるものは、常に身と口と意こころの三つの行いを清めることを心がけなければならぬ。身の行いを清めるとは、生きるものを殺さず、盗みをせず、よこしまな愛欲を犯さないことである。口の行いを清めるとは、偽りを言わず、悪口を言わず、二枚舌を使わず、むだ口をたたかないことである。意の行いを清めるとは、貪むさぼらず、瞋いからず、よこしまな見方をしないことである。

心が濁にごれば行いが汚れ、行いが汚れると、苦しみを避けることができぬ。だから、心を清め、行いを慎つつしむことが道のかなめである。

二、昔、ある金持ちの女主人がいた。親切で、しとやかで、謙遜けんそんであつたため、まことに評判のよい人であつた。その家にひとりの使用人がいて、これも利口でよく働く人であつた。

あるとき、その使用人がこう考えた。

「うちの主人は、まことに評判のよい人であるが、腹からそういう人なのか、または、よい環境がそうさせているのか、一つ試ためしてみよう。」

そこで、使用人は、次の日、なかなか起きず、昼ごろにようやく顔を見せた。女主人はきげんを悪くして、「なぜこんなに遅いのか。」とがめた。

「一日や二日遅くても、そうぶりぶり怒るものではありません。」とことばを返すと、女主人は怒った。

使用人はさらに次の日も遅く起きた。女主人は怒り、棒で打った。このことが知れたり、女主人はそれまでのよい評判を失った。

三、だれでもこの女主人と同じである。環境がすべて、心になうと、親切で謙遜けんそんで、静かであることができる。しかし、環境が心に逆らってきたり、なお、そのようにしていられるかどうかが問題なのである。

自分にとって面白くないことばが耳に入ってくるとき、相手が明らかに自分に敵意を

見せて迫ってくるとき、衣食住が容易に得られないとき、このようなときにも、なお静かな心と善い行いを持ち続けることができるであろうか。

だから、環境がすべて心にかなうときだけ、静かな心を持ちよい行いをして、それはまことによい人とはいえない。ほとけ 仏の教えを喜び、教えに身も心も練り上げた人こそ、静かにして、けんそん 謙遜な、よい人といえるのである。

四、すべてことばには、時になつたことばとかなわないことば、事実になつたことばとかなわないことば、柔らかなことばと粗いあらことば、有益なことばと有害なことば、慈しみあることばと憎しみのあることば、この五対ごたいがある。

この五対のいずれによつて話しかけられても、

「わたしの心は変わらない。粗いことばはわたしの口から漏れない。同情と哀れみあわによつて慈しみの思いを心にたくわえ、怒りや憎しみの心を起こさないように。」と努めなければならぬ。

例えばここに人がおり、鋤すきと鋤くわを持って、この大地の土をなくそうと、土を掘ってはまき散らし、土よくなれと言ったとしても、土をなくすることはできない。このようにすべてのことばをなくしてしまうことはのぞみ得ない。

だから、どんなことばで語られても、心を鍛えて慈いづくしみの心をもって満たし、心の変わらないうようにしておかなければならない。

また、絵の具によって、空に絵を描こうとしても、物の姿を現わすことはできないように、また、枯草のたいまつによって、大きな河の水を乾かそうとしてもできないように、また、よくなめした柔らかな皮を摩擦して、ざらざらした音を立てようとしてもできないように、どんなことばで話しかけられても、決して心の変わらないように、心を養わなければならぬ。

人は、心を大地のように広く、大空のように限りなく、大河のように深く、なめした皮のように柔らかかに養わなければならない。

たとえ、かたきに捕らえられて、苦しめられるようなことがあっても、そのために心を暗くするのは、真まことに仏の教えを守った者とはいえない。どんな場合に当たっても、

「わたしの心は動かない。憎しみ怒ることばは、わたしの口を漏れない。同情と哀れみのある慈しみの心をもって、その人を包むように。」と学ばなければならぬ。

五、ある人が、「夜は煙つて、昼は燃える蟻塚。」を見つけた。ある賢者にそのことを語ると、「では、剣をとつて深く掘り進め。」と命ぜられ、言われるままに、その蟻塚を掘ってみた。

はじめにかんぬきが出、次は水泡、次には刺又、それから箱、亀、と殺用の刀、一片の肉が次々と出、最後に龍が出た。

賢者にそのことを語ると、「それらのものをみな捨てよ。ただ龍のみをそのままにしておけ。龍を妨げるな。」と教えた。

これはたとえである。ここに「蟻塚」というのはこの体のことである。「夜は煙つて」というのは、昼間したことを夜になつていろいろ考え、喜んだり、悔やんだりすることをいう。「昼は燃える」というのは、夜考えたことを、昼になつてから体や口で実行することをいう。

「ある人」というのは道を求める人のこと、「賢者」とは仏のことである。「剣」とは

清らかな\*智慧ちえのこと、「深く掘り進む」とは努力のことである。

「かんぬき」とは\*無明むみょうのこと、「水泡」とは怒りと悩み、「刺又さすまた」とはためらいと不安、「箱」とは貪りむさぼ・瞋りいか・怠りおこた・浮わつき・悔いまじ・惑いまじのこと、「龜かめ」とは身と心のこと、「と殺用の刀」とは五欲のこと、「一片の肉」とは楽しみを貪り求める欲のことである。これらは、いずれもこの身の毒となるものであるから、「みな捨てよ」というのである。

最後の「龍りゅう」とは、\*煩惱ぼんのうの尽きた心のことである。わが身の足下を掘り進んでゆけば、ついにはこの龍を見ることになる。

掘り進んでこの龍を見いだすことを、「龍のみをそのままにしておけ。龍を妨げるな。」というのである。

六、\*釈尊しゃくそんの弟子ピンドーラは、さとりを得て後、故郷の恩に報いるむくために、コーサンビーの町に帰り、努力して仏の種ほとけをまく田地でんちの用意をしようとした。

コーサンビーの郊外に、小公園があり、椰子やしの並木は果てもなく続き、ガンジスの洋

洋たる河波は、涼しい風を絶え間なく送っていた。

夏のある日、昼の暑い日盛りを避けて、ピンドーラは、並木の木陰の涼しいところで坐禅ざぜんしていた。ちょうどこの日、城主のウダヤナ王も、妃たちきたちを連れて公園に入り、管弦の遊びに疲れて、涼しい木陰にしばしの眠りにおちいった。

妃たちは、王の眠っている間、あちらこちらとさまよい歩き、ふと、木陰に端坐たんざするピンドーラを見た。彼女らはその姿に心うたれ、道を求める心を起こし、説法することを求めた。そして、彼の教えに耳を傾けた。

目を覚ました王は、妃たちのいないのに不審をいだき、後を追って、木陰で妃たちにとりまかれているひとりの\*出家しゅっけを見た。淫楽いんらくに荒んだ王は、前後の見境もなく、心中にむらむらと嫉妬しつとの炎を燃やし、

「わが女たちを近づけて雑談にふけるとはふらちな奴だ。」

と悪口を浴びせた。ピンドーラは眼を閉じ、黙然として、一語も発しない。

怒り狂った王は、劍を抜いて、ピンドーラの頭につきつけたが、彼はひとことも語らず、岩のように動かない。

いよいよ怒った王は、蟻塚ありづかをこわして、無数の赤蟻を彼の体のまわりにまき散らしたが、それでもピンドーラは、端然すわと坐つたままそれに耐えていた。

ここに至つて、王ははじめて自分の狂暴を恥じ、その罪をわびて許しを請うた。これから仏ほとけの教えがこの王家に入り、その国に広まるいとぐちが開けた。

七、その後、幾日か過ぎて、ウダヤナ王はピンドーラをその住む森に訪ね、その不審をただした。

「大徳よ、仏の弟子たちは、若い身でありながら、どうして欲におぼれず、清らかにその身を保つことができるのであろうか。」

「大王よ、仏はわたしたちに向かつて、婦人に対する考えを教えられた。年上の婦人を母と見よ。中ほどの婦人を妹と見よ。若い婦人を娘と見よ。この教えによって、弟

子たちは若い身でありながら、欲におほれず、その身を清らかに保っている。」

「大徳よ、しかし、人は、母ほどの人にも、妹ほどの人にも、娘ほどの人にもみだらな心を起こすものである。仏の弟子たちはどのようにして欲を抑えることができるのであろうか。」

「大王よ、世尊は、人の体がいろいろの汚れ、血・うみ・汗・脂など、さまざまの汚れに満ちていることを観よと教えられた。このように見ることによって、われわれ若い者でも、心を清らかに保つことができるのである。」

「大徳よ、体を鍛え、心を練り、智慧をみがいた仏弟子たちには容易であるかも知れない。しかし、いかに仏の弟子でも、未熟の人には、容易なことではないであろう。汚れたものを見ようとしても、いつしか清らかな姿に心ひかれ、醜さを見ようとしても、いつしか美しい形に魅せられてゆく。仏弟子が美しい行いを保つには、もつと他に理由があるのではあるまいか。」

「大王よ、私は五官の戸口を守れと教えられる。目によって色・形を見、耳によって声を聞き、鼻によって香りをかぎ、舌によって味を味わい、体によって物に触れるとき、そのよい姿に心を奪われず、またよくない姿に心をいらだたせず、よく五官の戸口を守れと教え

られる。この教えによって、若い者でも、心身を清らかに保つことができるのである。」

「大徳よ、ほとけ私の仰せは、まことにすばらしい。わたしの経験によってもそのとおりである。五官の戸締りをしないで、ものに向かえば、すぐに卑いやしい心にとらわれる。五官の戸口を守ることは、わたしどもの行いを清らかにするうえに、まことに大切なことである。」

八、人が心に思うところを動作に表わすとき、常にそこには反作用が起こる。人はのしられると、言い返したり、仕返ししたくなるものである。人はこの反作用に用心しなくてはならない。それは風に向かつて唾つばきするようなものである。それは他人を傷つけず、かえって自分を傷つける。それは風に向かつてちりを掃くようなものである。それはちりを除くことにならず、自分を汚すことになる。仕返しの心には常に災いがつきまとうものである。

九、せまい心を捨てて、広く他に施すことは、まことによいことである。それとともに、志を守り、道うやまを敬うことは、さらによいことである。

人は利己的な心を捨てて、他人を助ける努力をすべきである。他人が施すのを見れば、

その人はさらに別の人を幸せにし、幸福はそこから生まれる。

一つのたいまつから何千人の人が火を取っても、そのたいまつはもとのとおりであるように、幸福はいくら分け与えても、減るといふことがない。

道を修める者は、その一步一步を慎つつしまなければならぬ。志がどんなに高くても、それは一步一步到達されなければならない。道は、その日その日の生活の中にあることを忘れてはならない。

十、この世の中に、さとりへの道を始めるに当たって成し難いことが二十ある。

- 一、貧しくて、施すことは難く、
- 二、慢心にして道を学ぶことは難く、
- 三、命を捨てて道を求めることは難く、
- 四、仏ほとけの在世に生を受けることは難く、
- 五、仏の教えを聞くことは難く、

六、色欲を耐え忍び、諸欲を離れることは難く、

七、よいものを見て求めないことは難く、

八、権勢を持ちながら、勢いをもって人に臨まないことは難く、

九、辱め<sup>はずかし</sup>られて怒らないことは難く、

十、事が起きてても無心であることは難く、

十一、広く学び深く究めることは難く、

十二、初心の人を軽んじないことは難く、

十三、慢心を除くことは難く、

十四、よい友を得ることは難く、

十五、道を学んでさとりに入ることは難く、

十六、外界の環境に動かされないことは難く、

十七、相手の能力を知って、教えを説くことは難く、

十八、心をいつも平らかに保つことは難く、

十九、是非をあげつらわれないことは難く、

二十、よい手段を学び知ることは難い。

十一、悪人と善人の特質はそれぞれ違っている。悪人の特質は、罪を知らず、それをやめようとせず、罪を知らされるのをいやがる。善人の特質は、善悪を知り、悪であることを知ればすぐやめ、悪を知らせてくれる人に感謝する。

このように、善人と悪人とは違っている。

愚かな人とは自分に示された他人の親切に感謝できない人である。

一方賢い人とは常に感謝の気持ちを持ち、直接自分に親切にしてくれた人だけではなく、すべての人に対して思いやりを持つことによつて、感謝の気持ちを表わそうとする人である。

### 第三節 仏のたとえ

一、遠い昔、棄<sup>きろうごく</sup>老国と名づける、老人を棄<sup>す</sup>てる国があつた。その国の人びとは、だれしも老人になると、遠い野山に棄<sup>す</sup>てられるのがおきてであつた。

その国の王に仕える大臣は、いかにおきてとはいへ、年老いた父を棄<sup>す</sup>てることができ

ず、深く大地に穴を掘ってそこに家を作り、そこに隠して孝養を尽くしていた。

ところがここに一大事が起きた。それは神が現われて、王に向かって恐ろしい難問を投げつけたのである。

「ここに二匹の蛇へびがいる。この蛇の雄・雌を見分ければよし、もしできないならば、この国を滅ぼしてしまふ。」と。

王はもとより、宮殿にいるだれひとりとして蛇の雄・雌を見分けられる者はいなかった。王はついに国中に布告して、見分け方を知っている者には、厚く賞を与えるであらうと告げさせた。

かの大臣は家に帰り、ひそかに父に尋ねると、父はこう言った。

「それは易しいことだ。柔らかい敷物の上に、その二匹の蛇を置くがよい。そのとき、騒がしく動くのは雄であり、動かないのが雌である。」

大臣は父の教えのとおり王に語り、それによって蛇の雄・雌を知ることができた。

それから神は、次々にむずかしい問題を出した。王も家臣たちも、答えることができなかつたが、大臣はひそかにその問題を父に尋ね、常に解くことができた。

その問いと答えとは次のようなものであつた。

「眠っているものに対しては覚めているといわれ、覚めているものに対しては眠っているといわれるのはだれであるか。」

「それは、いま道を修行している人のことである。道を知らない、眠っている人に対しては、その人は覚めているといわれる。すでに道をさとした、覚めている人に対しては、その人は眠っているといわれる。」

「大きな象の重さはどうして量はかるか。」

「象を舟に乗せ、舟が水中にどれだけ沈んだか印をしておく。次に象を降ろして、同じ深さになるまで石を載せその石の重さを量ればよい。」

「一すくいの水が大海の水より多いというのは、どんなことか。」

「清らかな心で一すくいの水を汲んで、父母や病人に施せば、その功德は永久に消えない。大海の水は多いといつても、ついに尽きるときがある。これをいうのである。」

次に神は、骨と皮ばかりにやせた、飢えた人を出して、その人にこう言わせた。「世の中に、わたしよりもっと飢えに苦しんでいるものがあるであろうか。」

「ある。世にもし、心がかたくなで貧しく仏法僧の三宝を信ぜず、父母や師匠に供養をしないならば、その人の心は飢えきっているだけでなく、その報いとして、後の世には餓鬼道に落ち、長い間飢えに苦しまなければならぬ。」

「ここに真四角な梅檀の板がある。この板はどちらが根の方であったか。」

「水に浮かべてみると、根の方がいくらか深く沈む。それによって根の方を知ることができる。」

「ここに同じ姿・形の母子の馬がいる。どうしてその母子を見分けるか。」

「草を与えると、母馬は、必ず子馬の方へ草を押しつけ与えるから、直ちに見分ける

ことができる。」

これらの難問に対する答えはことごとく神を喜ばせ、また王をも喜ばせた。そして王は、この智慧<sup>ちえ</sup>が、ひそかに穴蔵にかくまっていた大臣の老いた父から出たものであることを知り、それより、老人を棄<sup>す</sup>てるおきてをやめて、年老いた人に孝養を尽くすようにと命ずるに至った。

二、インドのヴィデーハ国の王妃は、六牙<sup>ろくげ</sup>の白象<sup>びやくせう</sup>の夢を見た。王妃は、その象牙をせひ自分のものになりたいと思い、王にその牙<sup>きは</sup>を手に入れたいと願った。王妃を愛する王は、この無理な願いを退けることができず、このような象を知る者があれば届け出よ、と賞金をつけて国中に触れを出した。

ヒマラーヤ山の奥にこの六牙の象がいた。この象は<sup>ほとけ</sup>仏に成るための修行をしていたのであるが、あるときひとりの獵師を危難から救つてやった。ようやく国へ帰ることのできたこの獵師は、この触れを見、賞金に眼がくらみ、恩を忘れて、六牙の象を殺そうと山へ向かっていった。

獵師はこの象が仏に成るための修行をしていたので、象を安心させるために袈裟<sup>けさ</sup>をかけて<sup>しめつけ</sup>出家の姿になった。そして、山に入って象に近づき、象が心を許しているさまを

見すまして毒矢を放った。

激しい毒矢に射られて死期の近いことを知った象は、獵師の罪をとがめようともせず  
に、かえつてその<sup>＊</sup>煩惱ほんのうの過ちを哀あわれみ、獵師をその四つの足の間にに入れて、報復しよ  
うとする大勢の仲間の象から守り、さらに、獵師がこの危険をおかすに至ったわけを尋  
ねて、彼が六つの牙きばを求めめるためであることを知り、自ら牙を大木に打ちつけて折り、  
彼にこれを与えた。白象は、「この布施行によつて仏道修行を成就じょうじゆした。わたしは仏の  
国に生まれるであろう。やがて仏と成つたら、まず、あなたの心の中にある貪むとほり・瞋いかり・  
愚かさという三つの毒矢を抜き去るであろう。」と誓つた。

三、ヒマラーヤ山のふもとの、ある竹やぶに、多くの鳥や獣と一緒に、一羽のおうむ  
が住んでいた。あるとき、にわかには大風が起こり、竹と竹とが擦すれあつて火が起こつた。  
火は風にあおられて、ついに大火となり、鳥も獣も逃げ場を失つて鳴き叫んだ。

おうむは、一つには、長い間住居を与えてくれた竹やぶの恩に報むくいるために、一つに  
は、大勢の鳥や獣の災難を哀あわれんで、彼らを救うために、近くの池に入つては翼を水に

浸し、空にかけのほつては滴しずくを燃えさかる火の上にそそぎかけ、竹やぶの恩を思う心と、限らない慈愛の心で、たゆまずにこれを続けた。

\*慈悲じひと献身の心は天界の梵天ぼんてんを感動させた。梵天は空から下つて来ておうむに語った。

「おまえの心はけなげであるが、この大なる火を、どうして羽の滴で消すことができよう。」  
おうむは答えて言う。

「恩を思う心と慈悲の心からしていることが、できないはずはない。わたしはどうしてもやる。次の生に及んでもやりとおす。」と。

梵天はおうむの偉大な志にうたれ、力を合わせてこのやぶの火を消し止めた。

四、ヒマラーヤ山くみょうちやうに共命鳥という鳥がいた。体は一つ、頭は二つであった。

あるとき、一つの頭がおいしい果実を食べるのを見て、もう一つの頭がねたみ心を起こし、「それならわたしは毒の果実を食べてやろう。」と毒を食べて、両方ともに死んでしまった。

五、ある蛇へびの頭と尾とが、あるとき、お互いに前に出ようとして争った。尾が言うに

は、「頭よ、おまえはいつも前にあるが、それは正しいことではない。たまにはわたしを前にするがよい。」

頭が言うには、

「わたしがいつも前にあるのはきまったならわしである。おまえを前にすることはできない。」と。

互いに争ったが、やはり頭が前にあるので、尾は怒って木に巻きついて頭が前へ進むことを許さず、頭がひるむすきに、木から離れて前へ進み、ついに火の穴へ落ち、焼けただれて死んだ。

ものにはすべて順序があり、異なる働きがそなわっている。不平を並べてその順序を乱し、そのために、そのおのおのに与えられている働きを失うようになる、そのすべてが滅んでしまうのである。

六、非常に気が早く怒りっぽい男がいた。その男の家の前で、二人の人がうわさをした。

「この人は大変よい人だが、気の早いのと、怒りっぽいのが病である。」と。

その男は、これを聞くとすぐ家を飛び出してきて、二人の人におそいかかり、打つける、なぐるの乱暴をし、とうとう二人を傷つけてしまった。

賢い人は、自分の過ちを忠告されると、反省してあらためるが、愚かな者は、自分の過ちを指摘されると、あらためるところか、かえって過ちを重ねるものである。

七、金持ちではあるが愚かな人がいた。他人の家の三階づくりの高層が高くそびえて、美しいのを見てうらやましく思い、自分も金持ちなのだから、高層の家を造ろうと思った。

大工を呼んで建築を言いつけた。大工は承知して、まず基礎を作り、二階を組み、それから三階に進もうとした。主人はこれを見て、もどかしそうに叫んだ。

「わたしの求めるのは土台ではない、一階でもない、二階でもない、三階の高楼たかどのだけだ。早くそれを作れ。」と。

愚かな者は、努め励むことを知らないで、ただ良い結果だけを求める。しかし、土台の

ない三階はあり得ないように、努め励むことなくして、良い結果を得られるはずがない。

八、ある人が蜜を煮ているところへ親しい友が来たので、蜜をごちそうしようと思い、火にかけてそのまま扇であおぎ冷やそうとした。これと同じく、煩惱の火を消さないで、清涼のさとの蜜を得ようとしても、ついに得られるはずはない。

九、二匹の鬼が、一つの箱と一本の杖と一足の靴とを中にして互いに争い、終日争つてついにきまらず、なおも互いに争い続けた。

これを見たひとりの人が、

「どうしてそのように争うのか。この品々にどのような不思議があつて、そのように奪いあいをするのか。」と尋ねた。

二匹の鬼はこう答えた。

「この箱からは、食物でも、宝でも、何でも欲しいものを自由に取り出すことができる。

また、この杖を手に取るとすぐに敵をうち下すことができる。この靴をはくと、空を自由に飛ぶことができる。」と。

その人はこれを聞いて、

「争うことなんかあるものか。おまえら二人は、しばらくここから離れているがよい。わたしが等分に分けてやろう。」

と言つて、二匹の鬼を遠ざけ、自ら箱を抱え、杖を取り、靴をはいて空へ飛び去つた。

鬼とは異教の人、箱とは布施のことである。彼らは、布施からもろの宝の生ずることを知らない。また、杖とは心の統一のこと。彼らは、心の統一によつて煩惱の悪魔をうち下すことを知らない。また、靴とは清らかな戒のこと。彼らはこの清らかな戒によつて、あらゆる争いを超えられることを知らない。だから、この箱と杖と靴を取りあつて、争つてやまないのである。

十、ひとりの人が旅をして、ある夜、ただひとりでさびしい空き家に宿をとつた。する

と真夜中になつて、一匹の鬼が人の死骸しがいをかついで入つてきて、床の上にそれを降ろした。

間もなく、後からもう一匹の鬼が追つて来て、「これはわたしのものだ。」と言ひ出したので、激しい争いが起こつた。

すると、前の鬼が後の鬼に言うには、

「こうして、おまえと争つていても果てしがない。証人を立てて所有をきめよう。」

後の鬼もこの申し出を承知したので、前の鬼は、先ほどからすみ隠れて小さくなつて震えていた男を引き出して、どちらが先にかついで来たかを言つてくれと頼んだ。

男はもう絶体絶命である。どちらの鬼に味方しても、もう一方の鬼に恨うらまれて殺されることはきまつているから、決心して正直に自分の見ていたとおりを話した。

案しよの定、一方の鬼は大いに怒つてその男の手をもぎ取つた。これを見た前の鬼は、すぐ死骸の手を取つて来て補つた。後の鬼はますます怒つてさらに手を抜き足を取り、胴を取り去り、とうとう頭まで取つてしまった。前の鬼は次々に、死体の手、足、胴、頭を取つて、みなこれを補つてしまった。

こうして二匹の鬼は争いをやめ、あたりに散らばった手足を食べて満腹し、口をぬぐって立ち去った。

男はさびしい小屋で恐ろしい目にあい、親からもらった手も足も胴も頭も、鬼に食べられ、いまや自分の手も足も胴も頭も、見も知らぬ死体のものである。一体、自分は自分なのか自分ではないのか、まったくわからなくなった男は、夜明けに、空き家を立ち去ったが、途中で寺を見つけて喜び勇み、その寺に入つて、昨夜の恐ろしいできごとをすべて話し、教えを請うたのである。人びとは、この話の中に、むが無我の理を感得し、まことに尊い感じを得た。

十一、ある家に、ひとりの美しい女が、着飾つて訪ねてきた。その家の主人が、「どなたでしょうか。」

と尋ねると、その女は、

「わたしは人に富とみを与える福の神である。」

と答えた。主人は喜んで、その女を家に上げ手厚くもてなした。

すると、すぐその後から、粗末なみなりをした醜い女が入ってきた。主人がだれであるかと尋ねると、貧乏神であると答えた。主人は驚いてその女を追い出そうとした。すると女は、「先ほどの福の神はわたしの姉である。わたしたち姉妹はいつも離れたことはないのであるから、わたしを追い出せば姉もいないことになるのだ。」

と主人に告げ、彼女が去ると、やはり美しい福の神の姿も消えうせた。

生があれば死があり幸いがあれば災いがある。善いことがあるれば悪いことがある。人はこのことを知らなければならない。愚かな者は、ただいたずらに、災いをきらつて幸いだけを求めるが、道を求めるものは、この二つをともに超えて、そのいずれにも執着してはならない。

十二、昔、貧しい絵かきがいた。妻を故郷に残して旅に出、三年の間苦勞して多くの金を得た。いよいよ、故郷に帰ろうとしたところ、途中で、多くの僧に供養する儀式の行われているのを見た。彼は大いに喜び、

「わたしはまだ福の種をまいたことがない。いまこの福の種をまく田地に会って、ど

うしてこのまま見過ごすことができよう。」と、惜しげもなく、その多くの金を投げ出して、供養くようし終えて家に帰った。

空手で帰った夫を見た妻は、大いに怒ってなじり問いつめたが、夫は、財物はみな堅固な蔵の中にたくわえておいたと答えた。その蔵とは何かと聞くと、それは尊いきん教団のことであると答えた。

腹を立てた妻はこのことをその筋に訴え、絵かきはとり調べを受けることになった。彼は次のように答えた。

「わたしは貴い努力によつて得た財物をつまらなく費やしたのではない。わたしはいままで福の種を植えることを知らないで過ごしてきたが、福の種をまく田地でんちというべき供養の機会を見て信仰心が起き、もの惜しみの心を捨てて施したのである。まことの富とみとは財物ではなく、心であることを知ったから。」

役人は絵かきの心をほめたたえ、多くの人びともこれを聞いて心をうたれた。それ以

来、彼の信用は高まり、絵かき夫婦はこれによつて、大きな富を得るようになった。

十三、ある男が墓場の近くに住んでいた。ある夜、墓場の中から、しきりに自分を呼ぶ声があるので、恐れ震え上がっていた。夜が明けてから、彼がそのことを友に話すと、友の中で勇気のある者が、次の夜にも呼ぶ声がしたら、その声をたずねて、そのもとをつきとめてみようかと決心した。

次の夜も、前夜のように、しきりに呼ぶ声がある。呼ばれた男はおびえて震えていたが、勇気のある男は、その声をたよりに墓場に入り、声の出る場所をたずねて、おまえはだれかと聞いた。

すると、地の中から声がして、

「わたしは、地の中に隠されている宝である。わたしは、わたしの呼んだ男にわたしを与えようと思うが、彼は恐れて来ない。おまえは勇気があるからわたしを取るにふさわしい。あすの朝、わたしは七人の従者とともにおまえの家に行くであろう。」と言った。

その男はこのことばを聞いて、

「わたしの家へ来るなら待つてゐるが、どのようにもてなしたらよいのか。」と尋ねる。

声は答えた。「わたしどもは出家の姿で行くから、まず体を清め、部屋を清めて、水を用意し、八つの器うつわにかゆを盛って待つがよい。

食事が終わったら、ひとりひとり導いて、すみに囲った部屋の中に入れては、わたしどもはそのまま黄金のつぼになるだろう。」と。

あくる朝、この男は、体を清め、家を清めて待つてゐると、はたして八人の出家が托鉢たたくにやつて来た。部屋に通して、水とかゆとを供養くようし、終わってからひとりひとりをすみに囲った部屋に導いた。すると、八人が八人とも、黄金のいっばい入ったつぼに変わってしまった。

このことを聞いた欲深い男が、自分も黄金のつぼが欲しいと思い、同じように部屋を清めて托鉢の出家を八人招いて供養し、食事の後、すみの部屋に閉じこめた。しかし八人の出家は黄

金のつぼになるどころではなく、怒って暴れ出し、その男はついに訴えられ、捕らえられた。

はじめに名を呼ばれておびえていた臆病おくびょうな男も、呼んだ声が黄金のつぼであるのと知ると、これも欲を起こし、あの声はもともと自分を呼んだのだから、あのつぼは自分のものだと言いはり、その家へ入ってつぼを取ろうとすると、つぼの中には蛇へびがいつぱいで、首をもたげてその男に向かつていった。

その国の王はこれを聞いて、黄金のつぼはみな、この勇気のある男のものであるとして、「世の中のことは何ごともこのとおりであつて、愚かな者はただその果報だけを望むが、それはそれだけで得られるものではない。ちやうどそれは、うわべだけ戒を保つていても、心の中にまことの信心がなければ決して真の安らぎは得られないのと同じである。」と諭さとした。

## 第二章 実践の道

### 第一節 道を求めて

一、この宇宙の組み立てはどういうものであるか、この宇宙は永遠のものであるか、やがてなくなるものであるか、この宇宙は限りなく広いものであるか、それとも限りがあるものであるか、社会の組み立てはどういうものであるか、この社会のどのような形が理想的なものであるか。これらの問題がはつきりきまらないうちは、道を修めることはできないというならば、だれも道を修め得ないうちに死が来るであろう。

例えば、人が恐ろしい毒矢に射られたとする。親戚しんせきや友人が集まり、急いで医者を呼び毒矢を抜いて、毒の手当てをしようとする。

ところがそのとき、その人が、

「しばらく矢を抜くのを待て。だれがこの矢を射たのか、それを知りたい。男か、女か、

どんな家のものか、また弓は何であったか、大弓か小弓か、木の弓か竹の弓か、弦は何であったか、藤蔓か、筋か、矢は籐か葦か、羽根は何か、それらがすっかりわかるまで矢を抜くのは待て。」

と言ったら、どうであろうか。

いうまでもなく、それらのことがわかってしまわないうちに、毒は全身に回って死んでしまうに違いない。この場合にまずしなければならぬことは、まず矢を抜き、毒が全身に回らないように手当てをすることである。

この宇宙の組み立てがどうであろうと、この社会のどういう形のものが理想的であろうとなかろうと、身に迫ってくる火は避けなくてはならない。

宇宙が永遠であろうとなかろうと、限りがあろうとなかろうと、生と老と病と死、愁い、悲しみ、苦しみ、悩みの火は、現に人の身の上におし迫っている。人はまず、この迫っているものを払いのけるために、道を修めなければならぬ。

仏の教えは、説かなければならぬことを説き、説く必要のないことを説かない。すな

わち、人に、知らなければならぬことを知り、断たなければならぬものを断ち、修めなければならぬものを修め、さとらなければならぬものをさとれと教えるのである。

だから、人はまず問題を選ばなければならない。自分にとって何が第一の問題であるか、何が自分にもっともおし迫っているものであるかを知って、自分の心をととのえることから始めなければならない。

二、また、樹木の芯しんを求めて林に入った者が、枝や葉を得て芯を得たように思うならば、まことに愚かなことである。ややもすると、人は、木の芯を求めるのが目的でありながら、木の外皮や内皮、または木の肉を得て芯を得たように思う。

人の身の上に迫る生と老と病と死と、愁うれい、悲しみ、苦しみ、悩みを離れたいと望んで道を求める。これが芯である。それが、わずかな尊敬と名誉とを得て満足して心がおごり、自分をほめて他をそしめるのは、枝葉を得ただけにすぎないのに芯を得たと思うようなものである。

また、自分のわずかな努力に慢心して、望んだものを得たように思い、満足して心が高

ぶり、自分をほめて他をそしるのは、木の外皮を得て芯しんを得たと思うようなものである。

また、自分の心がいくらか静まり安定を得たとして、それに満足して心が高ぶり、自分をほめて他をそしるのは、木の内皮を得て芯を得たと思うようなものである。

また、いくらかものを明らかに見る力を得て、これに眼がくらんで心が高ぶり、自分をほめて他をそしるのは、木の肉を得て芯を得たと思うようなものである。これらのものはみなすべて、気がゆるおたんで怠り、ふたたび苦しみを招くに至るであろう。

道を求める者にとっては、尊敬と名誉くようと供養を受けることがその目的ではない。わずかな努力や、多少の心の安定、またわずかな見る力が目的なのではない。

まず最初に、人はこの世の生と死の根本的な性質を心に留めなければならない。

三、世界はそれ自体の実体を持っていない。心のはからいをなくす道を得なければならない。外の形に迷いがあるのではなく、内の心が迷いを生ずるのである。

心の欲をもととして、この欲の火に焼かれて苦しみ悩み、\*無明をもととして、迷いの闇に包まれて、愁い悲しむ。迷いの家を造るものはこの心の他にないことを知って、道を求める人は、この心と戦って進んでゆかなければならない。

四、「わが心よ、おまえはどうして、無益な境地に進んで少しの落着きもなく、そわそわとして静かでないのか。

どうしてわたしを迷わせて、いたずらに、ものを集めさせるのか。

大地を耕そうとして、鋤がまだ大地に触れないうちにこわれてしまつては耕すことができないように、生死の迷いの海にさまよつていたので、数知れない生命を捨てたのに、心の大地の耕されることはなかった。

心よ、おまえはわたしを王者に生まれさせたこともある。また貧しい者に生まれさせて、あちこちに食を乞い歩かせたこともある。

ときにはわたしを神々の国に生まれさせ、栄華の夢に酔わせたこともあるが、また地

獄の火で焼かせたこともある。

愚かな心よ、おまえはわたしをさまざまな道に導いた。わたしはこれまで、常におまえに従ってそむくことはなかった。しかし、いまやわたしは仏の教えを聞く身となった。もはやわたしを悩ましたり、妨げたりしないでくれ。どうかわたしが、さまざまな苦しみから離れて、速やかにさとりを得られるように努めてくれ。

心よ、おまえが、すべてのものはみな実体がなくうつり変わると知って、執着するこ  
となく、何ものもわがものと思うことがなく、貪り、瞋り、愚かさを離れさえすれば、  
安らかなになるのである。

\*智慧の剣をもって愛欲の蔓を断ち、利害と損得と、たたえとそしりとにわずらわさ  
れることがなくなれば、安らかな日を得ることができるのである。

心よ、おまえは、わたしを導いて道を求めることを思い立たせた。ところがいま、ど  
うしてまたふたたび、この世の利欲と栄華にひかれて、動き回ろうとするのであるか。

形がなくて、どこまでも遠く駆けてゆく心よ。どうか、この超え難い迷いの海を渡らせてくれ。これまでわたしは、おまえの思うとおりに動いてきた。しかし、これからは、おまえはわたしの思うとおりに動かなければならない。我らはともに仏ほとけの教えに従おう。

心よ、山も川も海も、すべてはみなうつり変わり、災いに満ちている。この世のどこに樂しみを求めることができようか。教えに従って、速やかにさとの岸に渡ろうではないか。」

五、このように心と戦って、真に道を求める人は、常に強い覚悟をもって進むから、あざけりそしる人に出会ってもそれによって心を動かすことはない。こぶしをもって打ち、石を投げつけ、剣をもって斬きりかかる人があっても、そのために瞋いかりの心を起こすことはない。

両刃りょうばの鋸のこぎりによって頭と胴とが切り放たれるとしても、心乱れてはならない。それによって心が暗くなるならば、仏の教えを守らない者である。

あざけりも来れ、そしりも来れ、こぶしも来れ、杖つえや剣の乱打も来れ、わが心はそのために乱れることはない。それによって、かえって仏の教えが心に満たされるであろう。

と、かたく覚悟しているのである。

さとりのためには、成しとげ難いことでも成しとげ、忍び難いことでもよく忍び、施し難いものでもよく施す。

日に一粒の米を食べ、燃えさかる火の中に入るならば、必ずさとりを得るだろうという者があれば、そのとおりにすることを少しも辞さない。

しかし、施しても施したという思いを起さず、ことをなしてもなしたという思いを起ささない。ただそれが賢いことであり正しいことだからするのである。それは母親が一枚の着物を愛するわが子に与えても、与えたという心を起さず、病む子を看護しても、看護したという思いを起さないと同じである。

六、遠い昔、ある王があった。王は智慧ちえ明らかで慈悲じひ深く、民を愛し、国は豊かに安らかに治まっていた。また、王は道を求める心があつく、常に財宝を用意して、どんな人でも、尊い教えを示してくれる者には、この財宝を施すであろうと、布告していた。

この、王の道を求めるまごころには、神の世界も震え動いたが、神は王の心を確かめるために、鬼の姿となつて、王の宮殿の門の前に立つた。

「わたしは尊い教えを知っている。王にとりついでもraitたい。」

王はこれを聞いて大いに喜び、うやうやしく奥殿に迎えて、教えを聞きたいと願つた。すると鬼は、刃やいばのように恐ろしい牙きばをむきだして、

「いまわたしは非常に飢えている。このままではとても教えを説くことはできない。」と云う。

「それでは食物をさし上げよう」と云うと、

「わたしの食物は、熱い人間の血と肉でなければならぬ。」

と云う。そのとき、王子は、すすんでわが命を捨てて、鬼の飢えを満たそうと言ひ、王妃もまた進んでその身を餌食えじきにしようとした。ここに鬼は二人の身を食べたが、なお飢えを満たすことができず、さらに王の身を食べたいと云う。

そのとき王は静かに言つた。

「わたしは命を惜しまない。ただ、この身がなくなれば教えを聞くことができないから、おまえが教えを説き終わつたそのときにこの身を与えよう。」

鬼はそのとき、

「愛欲より憂うれいは生じ、愛欲より恐れは生ずる。愛欲を離れし人に憂いなし、またいずこにか恐れあらん。」と説いて、たちまち神の姿にかへつた。それと同時に、死んだはずの王子も、夫人も、もとの姿にたちかへつた。

七、昔、ヒマラーヤ山に真実を求める行者がいた。ただ迷いを離れる教えを求めて、そのほかは何も求めるものがなく、地上に満ちた財宝はもとより、神の世界の栄華さえ望むところではなかつた。

神はこの行者の行いに感動し、その心のまことを試ためそうと鬼の姿となつてヒマラーヤ山に現われ、

「ものみなはうつり変わり、現われては滅びる。」と歌った。

行者はこの歌声を聞き、渴かわいたものが水を得たように、また囚とらわれたものが放たれたように喜んで、これこそまことの理ことわりである、まことの教えであると思ひ、彼はあたりを見まわして、だれがこの尊い詩を歌ったのであろうかとながめ、そこに恐ろしい鬼を見いだした。怪しみながらも鬼に近づいて、

「先ほどの詩はおまえの歌ったものか。もしそうなら、続きを聞かせてもらいたい。」と願った。

鬼は答えた。

「そうだ、それはわたしの詩だ。しかし、わたしはいま飢えているから、何か食べなくては歌うことができない。」

行者はさらに願った。

「どうかそう言わずに、続きを聞かせてもらいたい。あの詩には、まことに尊い意味

があり、わたしの求めているものがある。しかし、あれだけではことは終わっていない。どうか詩の残りを教えていただきたい。」

鬼はさらに言う。

「いまわたしは空腹に耐えられない。もし人の温かい肉を食べ、血をすすることができるとすれば、あの詩の続きを説くであろう。」

これを聞いた行者は、続きの詩を聞かせてもらえるならば、聞き終わってから、自分の身を与えるであろうと約束した。

鬼はそこで、残りを歌い、詩は完全なものとなった。それはこうである。

「ものみなはうつり変わり、現われては滅びる。生滅にとらわれることなくなりて、静けさと安らぎは生まれる。」

行者はこの詩を木や石に彫りつけ、やがて木の上ののほり、身をおどらせて鬼の前に投げ与えた。その瞬間、鬼は神の姿にかえり、行者の身は神の手に安らかに受けとめられた。

八、昔、サダープラルデイト(常啼)という求道者があつた。ひたすらにまことのさとりを求め、名誉利欲に誘われず、懸命であつた。ある日、空中に声があり、

「サダープラルデイトよ、ただ東に進め。わきめもふらず、暑さ寒さを忘れ、世の毀譽きよよにかかわらず、善悪のはからいとらわれず、ひたすらに東に進め。必ずまことの師を得て、さとりを得るであらう。」と教えた。

彼は大いに喜び、声の教えたとおり、ただまっしぐらに東に進んで道を求めた。野に伏し、山に眠り、また異国の旅の迫害と屈辱くつじやくを忍び、ときには身を売って人に仕え、骨を削る思いをしてその日の糧かてを得つつ、ようやくまことの師のもとにたどりついて教えを請うた。

世に、好事魔多しという。善いことをしようとすれば必ず障りさわがでるものである。サダープラルデイトの求道の旅にも、この障りはいくたびとなく現われた。

師に捧げる香華かうげのもとでを得たいと思い、身を売って人に仕え、賃金を得ようとしても、やとい手がない。悪魔の妨げの手は彼の赴くところ、どこにでも伸びていた。さとりにへの道はまことに血を枯らし骨を削る苦難の旅であつた。

師について教えを受け、尊いことばを記そうと思つても、紙も墨も得ることができない。彼は刀をとつて自分の腕を突き、血を流して師のことばを記した。このようにして、彼は尊いさとりのことばを得たのであつた。

九、昔、スダナ（善財）という童子があつた。この童子もまた、ただひたすらに道を求め、さとりを願う者であつた。海で魚をとる漁師を訪れては、海の不思議から得た教えを聞いた。人の病を診る医師からは、人に対する心は慈悲でなければならぬことを学んだ。また、財産を多く持つ長者に会つては、あらゆるものはみなそれなりの価値をそなえているということを知った。

また坐禅する出家を訪れては、その寂かな心が姿に現われて、人びとの心を清め、不思議な力を与えるのを見た。また気高い心の婦人に会つてはその奉仕の精神にうたれ、身を粉にして骨を砕いて道を求める行者にめぐり会つては、真実に道を求めるためには、刃の山にも登り、火の中でもかき分けてゆかなければならぬことを知った。

このように童子は、心さえあれば、目の見るところ、耳の聞くとところ、みなことごとく教えることを知った。

かよい女にもさとり的心があり、街に遊ぶ子供の群れにもまことの世界のあることを見、すなおな、やさしい人に会っては、ものに従う心の明らかな智慧をさとった。

香をたく道にも仏の教えがあり、華を飾る道にもさとりのことばがあつた。ある日、林の中で休んでいたときに、彼は朽ちた木から一本の若木が生えているのを見て生命の無常を教わった。

昼の太陽の輝き、夜の星のまたたき、これらのものも善財童子のさとりを求める心を教える雨でうるおした。

童子はいたるところで道を問い、いたるところでことばを聞き、いたるところでさとの姿を見つけた。

まことに、さとりを求めるには、心の城を守り、心の城を飾らなければならない。そ

して敬虔けいけんに、この心の城の門を開いて、その奥おくに仏ほとけをまつり、信心しんの華はなを供え、歡喜かんぎの香かを捧たかげなければならぬことを童子どうしは学んだのである。

## 第二節　さまざまな道

一、さとりを求める者が学ばなければならない三つのことがある。それは戒律けいりつと心の統一じゅういつ（定じょう）と智慧ちゐえの三学である。

戒とは何であるか。人として、また道を修める者として守らなければならない戒を保ち、心身を統制し、五つの感覺器官の入口を守って、小さな罪にも恐れを見、善い行いをして励み努めることである。

心の統一とは何であるか。欲を離れ不善を離れて、次第に心の安定に入ることである。

智慧とは何であるか。四つの真理を知ることである。それは、これが苦しみである、これが苦しみの原因である、これが苦しみの消滅である、これが苦しみの消滅に至る道

であると、明らかにさとることである。

この三学を学ぶものが、ほとけ仏の弟子といわれる。

驢馬ろばが、牛の形も声も角もないのに、牛の群れの後からついてきて、わたしも牛であると言つても、だれも信用しないように、この戒と心の統一と智慧ちえの三学を学ばないでいて、わたしは道を求める者である、仏の弟子であると言つても、それは愚かなことである。

農夫が秋に収穫を得るために、まず春のうちに田を耕し、種をまき、水をかけ、草を取つて育てるように、さとりを求める者は、必ずこの三学を学ばなければならない。農夫が、まいた種たねが今日のうちに芽を出し、明日中に穂ほが出て、明後日には刈り入れができるようにと願つてもそれはできないことであるように、さとりを求める者も、今日のうちにほんのう煩惱を離れ、明日中に執着しゅうじやくをなくし、明後日にさとりを得るといふような不思議は得られるものではない。

種はまかれてから、農夫の辛苦と、季節の変化を受けて芽が生じ、ようやく最後に実を結ぶ。さとりを得るのもそのように、戒と心の統一と智慧の三学を修めているうちに次第に煩惱が滅び、執着が離れ、ようやくさとりの時が来るのである。

二、この世の榮華にあこがれ、愛欲に心を乱していながら、さとり道の道に入ろうとするのは難い。世を楽しむことと道を楽しむこととはおのずから別である。

すでに説いたように、何ごとも心がもとである。心が世の中のことを楽しめば、迷いと苦しみが生まれ、心が道を好めば、さとりと楽しみが生まれる。

だから、さとりを求める者は、心を清らかにして教えを守り、戒を保たなければならぬ。戒を保てば心の統一を得、心の統一を得れば智慧ちえが明らかとなり、その智慧こそ人をさとりに導く。

まことに、この三学はさとりにへの道である。三学を学ばないために、人びとは久しく迷いを重ねてきた。道に入って、他人と争わず、静かに内に想おもいをこらして心を清め、速やかにさとりを得なければならぬ。

三、この三学は、開けば八正道はっしやうどうとなり、四念住しねんじゆう、四正勤ししやうこん、五力ごりき、六波羅蜜ろっばらみつとも説かれる。

八正道は、正しいものの見方、正しいものの考え方、正しいことば、正しい行い、正

しい生活、正しい努力、正しい念おもい、正しい心の統一である。

正しいものの見方とは、四つの真理（四諦しだい）を明らかにして、原因・結果の道理を信じ、誤った見方をしないこと。

正しいものの考え方とは、欲にふけらず、貪むさぼらず、瞋いからず、害そごなう心のないこと。

正しいことばとは、偽りと、むだ口と、悪口と、二枚舌を離れること。

正しい行いとは、殺生せつしようと、盗みと、よこしまな愛欲を行わないこと。

正しい生活とは、人として恥はずべき生き方を避けること。

正しい努力とは、正しいことに向かつて怠おこたることなく努力すること。

正しい念いとは、正しく思慮深い心を保つこと。

正しい心の統一とは、誤った目的を持たず、智慧ちえを明らかにするために、心を正しく静めて心の統一をすることである。

四、四念住しねんじゆうとは次の四つである。

わが身は汚れたもので執着しゆうじやくすべきものではないと見る。

どのような感じを受けても、それはすべて苦しみのもとであると見る。

わが心は常にとどまることがなく、絶えずうつり変わるものと見る。

すべてのものはみな原因と条件によって成り立っているから、一つとして永久にとどまるものはないと見る。

五、四正勤ししやうこんとは次の四つである。

これから起ころうとする悪は、起こらない先に防ぐ。

すでに起こった悪は、断ち切る。

これから起ころうとする善は、起こるようにしむける。

すでに起こった善は、いよいよ大きくなるように育てる。

この四つを努めることである。

六、五力ごりきとは、次の五つである。

信ずること。

努めること。

思慮深い心を保つこと。

心を統一すること。

明らかな智慧を持つこと。

この五つがさとりを得るための力である。

七、六波羅蜜とは、布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の六つのことで、この六つを修めると、迷いの此の岸から、さとりの彼の岸へと渡ることができるので、六度ともいう。

布施は、惜しみ心を退け、持戒は行いを正しくし、忍辱は怒りやすい心を治め、精進は怠りの心をなくし、禪定は散りやすい心を静め、智慧は愚かな暗い心を明らかにする。

布施と持戒とは、城を作る礎のように、修行の基となり、忍辱と精進とは城壁のように外難を防ぎ、禪定と智慧とは、身を守って生死を逃れる武器であり、それは甲冑に身をかためて敵に臨むようなものである。

乞う者を見て与えるのは施しであるが、最上の施しとはいえない。心を開いて、自ら進んで他人に施すのが最上の施しである。また、ときどき施すのも最上の施しではない。常に施すのが最上の施しである。

施した後で悔いたり、施して誇りがましく思うのは、最上の施しではない。施して喜び、施した自分と、施しを受けた人と、施した物と、この三つをとともに忘れるのが最上の施しである。

正しい施しは、その報いを願わず、清らかな慈悲の心をもつて、他人も自分も、ともにさとりに入るように願うものでなければならぬ。

世に無財の七施とよばれるものがある。財なき者にもなし得る七種の布施行のことである。

一には、身施、肉体による奉仕であり、その最高なるものが次項に述べる捨身行である。

二には心施、他人や他の存在に対する思いやりの心である。

三には眼施、やさしきまなざしであり、そこに居るすべての人の心がなごやかになる。

四には和顔施、柔和な笑顔を絶やさぬことである。

五には言施、思いやりのこもったあたたかい言葉をかけることである。

六には牀座施しょうざせ、自分の席をゆずることである。

七には房舎施ぼうしゃせ、わが家を一夜の宿に貸すことである。

以上の七施ならば、だれにでも出来ることであり、日常生活の中で行えることばかりなのである。

八、昔、薩埵太子さつたという王子がいた。ある日、二人の兄の王子と森に遊んで、七匹の子を産んだ虎が飢えに迫られて、あわやわが子を食べようとするのを見た。

二人の兄の王子は恐れて逃げたが、薩埵太子だけは身を捨てて飢えた虎を救おうと、絶壁よじのぼって、身を投げて虎に与え、その母の虎の飢えを満たし、虎の子の命を救った。薩埵太子の心は、ただ一筋に道を求めることにあった。

「この身は碎くだけやすく変わりやすい。いままで施すことを知らず、ただわが身を愛することにはかりかかわってきた自分は、いまこそこの身を施して、さとりを得るために捧たもげよう。」

この決心によって、王子は飢えた虎にその身を施したのである。

九、またここに、道を求める者の修めなければならぬ慈と悲と喜と捨の四つの大きな心（四無量心）がある。

慈を修めると貪りの心を断ち、悲を修めると瞋りの心を断ち、喜は苦しみを断ち、捨は、恩と恨みのいずれに対しても違いを見ないようになる。

多くの人びとのために、幸福と楽しみとを与えることは、大きな慈である。多くの人びとのために、苦しみと悲しみをなくすことが大きな悲である。多くの人びとに歡喜の心をもって向かうのが大きな喜である。すべてのものに対して平等で、分け隔てをしな  
いのが大きな捨である。

このように、慈と悲と喜と捨の四つの大きな心を育てて、貪りと瞋りと苦しみと愛憎の心を除くのであるが、悪心の去り難い心とは飼犬のようであり、善心の失われやすいことは林を走る鹿のようである。また、悪心は岩に刻んだ文字のように消えにくく、善心は水に画いた文字のように消えやすい。だから道を修めることはまことに困難なものといわなければならない。

十、世尊せそんの弟子シユローナは富豪の家に生まれ、生まれつき体が弱かった。世尊にめぐり会つてその弟子となり、足の裏から血を出すほど痛々しい努力を続け、道を修めたけれども、なおさとりを得ることができなかつた。

世尊はシユローナを哀あわれんで言われた。

「シユローナよ、おまえは家にいたとき、琴を学んだことがあるであろう。糸は張ること急であつても、また緩ゆるくても、よい音は出ない。緩急かんきゅうよろしきを得て、はじめてよい音を出すものである。

さとりを得る道もこれと同じく、怠おそれば道を得られず、またあまり張りつめて努力しても、決して道は得られない。だから、人はその努力についても、よくその程度を考えなければならぬ。」

この教えを受けて、シユローナはよく会得えとくし、やがてさとりを得ることができた。

十一、昔、五武器ごぶき太子とよばれる王子がいた。五種の武器を巧みにあやつることがで

きたので、この名を得たのである。修行を終えて郷里に帰る途中、荒野の中で、脂毛しもうという名の怪物に出会った。

脂毛は、そろそろと歩いて王子に迫ってきた。王子はまず矢を放ったが、矢は脂毛に当たっても毛にねばりつくばかりで傷つけることができない。剣も鉾ほこも棒やりも槍も、すべて毛に吸い取られるだけで役に立たない。

武器をすべてなくした王子は、こぶしを上げて打ち、足を上げて蹴けったが、こぶしも足もみな毛に吸いつけられて、王子の身は脂毛の身にくっついて宙に浮いたままである。頭で脂毛の胸を打っても、頭もまた胸の毛について離れない。

脂毛は、「もうおまえはわしの手の中にある。これからおまえを餌食えじきにする。」と言うと、王子は笑って、

「おまえはわたしの武器がすべて尽きたように思うかも知れないが、まだわたしには金剛こんごうの武器が残っている。おまえがもしわたしをのめば、わたしの武器はおまえの腹の中からおまえを突き破るであろう。」と答えた。

そこで脂毛しもうは王子の勇氣にくじけて尋ねた。

「どうしてそんなことができるのか。」

「真理の力によつて。」と王子は答えた。そこで脂毛は王子を離し、かえつて王子の教えを受けて、悪事から遠ざかるようになった。

十二、おのれに恥じず、他にも恥じないのは、世の中を破り、おのれに恥じ、他にも恥じるのは世の中を守る。慚愧ざんきの心があればこそ、父母・師・目上の人を敬うやまう心も起こり、兄弟姉妹の秩序も保たれる。まことに、自ら省みて、わが身を恥じ、人の有様を見ておのれに恥じるのは、尊いことといわなければならぬ。

懺悔ざんげの心が起これば、もはや罪は罪でなくなるが、懺悔の心がないならば、罪は永久に罪として、その人をとがめる。

正しい教えを聞いて、いくたびもその味わいを思い、これを修め習うことによつて、教えが身につく。思うこと修めることがなければ、耳に聞いても身につけることはできない。

信と慚ざんと愧きと努力と智慧ちえとは、この世の大きな力である。このうち、智慧の力が主であつて、他の四つは、これに結びつく従じゆうの力である。

道を修めるのに、雑事にとらわれ、雑談にふけり、眠りを貪むさぼるのは、退歩する原因である。

十三、同じく道を修めても、先にさとりる者もあれば、後にさとりる者もある。だから、他人が道を得たのを見て、自分がまだ道を得ていないことを悲しむには及ばない。

弓を学ぶのに、最初に当たることが少なくても、学び続けていればついには当たるようになる。また、流れは流れ流れてついには海に入るように、道を修めてやめることがなければ、必ずさとりは得られる。

前に説いたように、眼を開けば、どこにでも教えはある。同様に、さとりにへの機縁も、どこにでも現われている。

香をたいて香氣の流れたときに、その香氣の、あるのでもなく、ないのでもなく、行くのでもなく、来るのでもないさまを知って、さとりに入った人もある。

道を歩いて足に棘を立て、疼きの中から、疼きを覚えるのは、もともと定まった心があるのではなく、縁に触れていろいろの心となるのであって、一つの心も、乱せば醜い煩惱となり、おさめれば美しいさとりとなることを知って、さとりに入った人もある。欲の盛んな人が、自分の欲の心を考え、欲の薪がいつしか智慧の火となるものであることを知って、ついにはさとりに入った例もある。

「心を平らにせよ。心が平らになれば、世界の大地もみなことごとく平らになる。」という教えを聞いて、この世の差別は心の見方によるものであると考えて、さとりに入った人もある。まことにさとりの縁には限りがない。

### 第三節 信仰の道

一、\*仏と教えと\*教団に帰依する者を、仏教の信者という。また、仏教の信者は、次に説く戒律と信仰と布施と\*智慧とを持っている。

生きものの命を取らず、盗みをなさず、よこしまな愛欲を犯さず、偽りを言わず、酒を飲まない。この五つを守るのが信者の戒である。

仏の智慧ほとけを信ずるのが信者の信であり、貪りむさぼ、もの惜しみする心を離れて常に他人への施しを好むのが信者の布施である。さらに、因と縁の道理を知り、ものみながうつり変わる道理を知るのが、信者の智慧である。

東に傾いている木は、いつ倒れても必ず東に倒れるように、平生へいぜい、仏の教えに耳を傾けている信心の厚いものは、いつ、どのように命を終わっても、仏の国に生まれることに定まっている。

二、いま、仏教の信者とは、仏と教えと教団とを信ずる者をいう。

仏とはさとりを開いて、人びとを恵み救う人をいう。教えとは、その仏の説かれた教えをいう。教団とは、その教えによって正しく修行する和合の団体をいう。

仏と教えと教団の、この三つは、三つでありながら、離れた三つではない。仏は教え

に現われ、教えは教団に実現されるから、三つはそのまま一つである。

だから、教えと教団を信ずることは、そのままほとけ仏を信ずることであり、仏を信ずれば、おのずから教えと教団とを信ずることになる。

したがって、すべての人は、ただ仏を信ずること一つによって救われ、またさとりが得られる。仏はすべての人を、自分のひとり子のように愛するから、人もまた子が母を思うように、仏を信ずれば、現実に仏を見、仏の救いが得られる。

仏を念ずる者は、常に仏の光明におさめられ、また自然に仏の香気に染まる。

三、世に仏を信ずることほど大きな利益りやくをもたらすものはない。もしただ一度だけでも仏の名を聞いて、信じ喜ぶならば、この上ない大きな利益を得たものといわなければならない。だから、この世界に満ちみちている炎の中に入って行つてでも、仏の教えを聞いて信じ喜ばなければならない。

まことに、仏に会うことは難く、その教えを説く人に会うことも難く、その教えを信

ずることはさらに難い。

いま、会い難いこの教えを説く人に会い、聞き難いこの教えを聞くことができたのであるから、この大きな利益りやくを失わないように、仏を信じ喜ばなければならぬ。

四、信こそはまことに人の善き伴侶はんりよであり、この世の旅路の糧かてであり、この上ない富とみである。信は仏の教えを受けて、あらゆる功德くどくを受けとる清らかな手である。

信は火である。人びとの心の汚れを焼き清め、同じ道に入らせ、その上、仏の道に進もうとする人びとを燃えたたせるからである。

信は人の心を豊かにし、貪りむさぼの思いをなくし、おごる心を取り去って、へりくだり敬うやまうことを教える。こうして、智慧ちえは輝き、行いは明らかに、困難に破れず、外界にとらわれず、誘惑に負けない、強い力が与えられる。

信は、道が長く退屈なときに励ましとなり、さとりに導く。

信は、常に仏の前にいるという思いを人に与え、仏に抱かれている思いを与え、身も

心も柔らかにし、人びとによく親しみなじむ徳を与える。

五、この信のあるものは、耳に聞こえるどんな声でも、仏ほとけの教えとして味わい、喜ぶ智慧ちえが得られ、どんなできごとでも、すべてみな因と縁によつて現われたものであることを知つて、すなおにこれを受け入れる智慧が得られる。

かりそめのたわごとにすぎないこの世のできごとの中にも永久に変わらないまことのあることを知つて、栄枯盛衰えいこせいすいの変わりにも、驚かず悲しまない智慧が得られる。

信には、懺悔ざんげと、随喜ずいきと、祈願の三つのすがたが現われてくる。

深くおのれを省みて、自分の罪と汚れを自覚し、懺悔する。他人の善いことを見るとわがことのように喜んでその人のために功德く徳を願う心が起きる。またいつも仏とともにおり、仏とともにいい、仏とともに生活することを願うのである。

この信ずる心は、誠の心であり、深い心であり、仏の力によつて仏の国に導かれることを喜ぶ心である。

だから、すべての所でたたえられる仏ほとけの名を聞いて、信じ喜ぶ一念のあるところにこそ、仏は真心こめて力を与え、その人を仏の国に導き、ふたたび迷いを重ねることのない身の上にするのである。

六、この、仏を信ずる心は、人びとの心の底に横たわっているぶつしやう「仏性の表われである。なぜかといえば、仏を知るものは仏であり、仏を信ずるものは仏でなければならぬからである。

しかし、たとえ仏性があつても、仏性は、ほんのう「煩惱の泥の底深く沈んで、成仏の芽を吹き出し、花開くことはできない。むとほ貪り・いか瞋りの煩惱の逆巻く中に、どうして仏に向かう清い心が起こるのであるうか。

エーランダという毒樹の林には、エーランダの芽だけが吹き出して、チャンダナせんたん（梅檀）の香木は生えることはない。エーランダの林にチャンダナが生えたならば、これはまことに不思議である。

いま人びとの胸のうちに、仏に向かい、仏を信ずる心の生じたのも、これと同じく不

思議なことといわなければならぬ。

だから、人びとの仏ほとけを信ずる信の心を無根の信という。無根というのは、人びとの心の中には信の生え出る根はないが、仏の慈悲じひの心の中には、信の根があることをいうのである。

七、信はこのように尊く、まことに道のもとであり功德くどくの母であるが、それにもかかわらず、この信が道を求める人にも円満に得られないのは、次の五つの疑いが妨げているからである。

一つには、仏の智慧ちえを疑うこと。

二つには、教えの道理まじに惑うこと。

三つには、教えを説く人に疑いを持つこと。

四つには、求道の道にしばしば迷いを生ずること。

五つには、同じく道を求める人びとに対して、慢心から相手を疑って、いらだつ思いがあるためである。

まことに世に疑いほど恐ろしいものはない。疑いは隔てる心であり、仲を裂く毒であり、互いの生命を損なう刃であり、互いの心を苦しめる棘である。

だから信を得た者は、その信が、遠い昔に、仏の慈悲によつて、すでにその因縁が植えつけられていたものであることを知らなければならぬ。

人の胸の中にひそむ疑いの闇を破つて、信の光をさし入れ給う仏の手のあることを知らなければならぬ。

信を得て、遠い昔に仏が与えられた深い因縁を喜び、厚い仏の慈悲を喜ぶ者は、この世の生活そのままに、仏の国に生まれることができるのである。

まことに、人の生まれることは難しく、教えを聞くことも難しく、信を得ることはさらに難しい。だから、努め励んで、教えを聞かなければならぬ。

#### 第四節 仏のことば

一、わたしをののしった、わたしを笑った、わたしを打ったと思う者には、うら怨みは鎮しずまることがない。

怨みは怨みによつて鎮まらない。怨みを忘れて、はじめて怨みは鎮まる。

屋根のふき方の悪い家に、雨が漏るように、よく修めていない心に、むさほ貪りのおもいがさしこむ。

おこた怠るのは死の道、努め励むのは生の道である。愚かな人は怠り、ちえ智慧ある人は努め励む。

弓矢を作る人が、矢を削つてまっすぐにするように、賢い人は、その心を正しくする。

心は抑え難く、軽くたち騒いでととのえ難い。この心をととのえてこそ、安らかさが得られる。

怨みを抱く人いだのなすことよりも、かたきのなす悪よりも、この心は、人に悪事をなす。

この心を、貪りむとほから守り、瞋りいかから守り、あらゆる悪事から守る人に、まことの安らかさが得られる。

二、ことばだけ美しくて、実行の伴わないのは、色あつて香りのない花のようなものである。

花の香りは、風に逆らつては流れない。しかし、善い人の香りは、風に逆らつて世に流れる。

眠られない人に夜は長く、疲れた者に道は遠い。正しい教えを知らない人に、その迷いは長い。

道を行くには、おのれにひとしい人、またはまさった人と行くがよい。愚かな人とならば、ひとり行く方がまさっている。

猛獣は恐れなくとも、悪友は恐れなくてはならない。猛獣はただ身を破るにすぎないが、悪友は心を破るからである。

これはわが子、これはわが財宝と考えて、愚かな者は苦しむ。おのれさえ、おのれのものでないのに、どうして子と財宝とがおのれのものであろうか。

愚かにして愚かさを知るのは、愚かにして賢いと思うよりもまさっている。

愚かな人は賢い人と交わってもちようど匙さしが味を知らないように、賢い人の示す教えを知ることができない。

新しい乳が容易に固まらないように、悪い行いもすぐにはその報むくいを示さないが、灰おほに覆われた火のように、隠れて燃えつつ、その人に従う。

愚かな人は常に名誉と利益とに苦しむ。上席を得たい、権利を得たい、利益を得たいと、常にこの欲のために苦しむ。

過ちを示し、悪を責め、足らないところを責める人には、宝のありかを示す人のように、仰ぎ仕えなければならぬ。

三、教えを喜ぶ人は、心が澄んで、快く眠ることができる。教えによって心が洗われるからである。

大工が木をまつすぐにし、弓師が矢を矯め直し、溝づくりが水を導くように、賢い人は心をととのえ導く。

堅い岩が風に揺るがないように、賢い人はそれられてもほめられても心を動かさない。

おのれに勝つのは、戦場で千万の敵に勝つよりもすぐれた勝利である。

正しい教えを知らないで、百年生きるよりも、正しい教えを聞いて、一日生きる方がはるかにすぐれている。

どんな人でも、もしまことに自分を愛するならば、よく自分を悪から守れ。若いとき、壮年なとき、また老いた後も一度は目覚めよ。

世は常に燃えている。貪りと瞋りと愚かさの火に燃えている。この火の宅から、一刻も早く逃げ出さなければならぬ。

この世はまことにあわのような、くもの糸のような、汚れをもった瓶かめのようなものである。だから、人はそれぞれの尊い心を守らなければならない。

四、どんな悪をもなさず、あらゆる善いことをし、おのおの心を清くする、それが仏ほとけの教えである。

耐え忍ぶことは、なし難い修行の一つである。しかしよく忍ぶ者にだけ最後の勝利の花が飾られる。

怨うらみのさ中であつて怨みなく、愁うれいのさ中であつて愁いがなく、貪むさほりのさ中であつて貪りがなく、一物もわがものと思うことなく、清らかに生きなければならぬ。

病のないのは第一の利、足るを知るのは第一の富とみ、信頼あるのは第一の親しみ、さとりは第一の楽しみである。

悪から遠ざかる味わい、寂しずけさの味わい、教えの喜びの味わい、この味わいを味わう者には恐れがない。

心に好悪こうおを起おこして執着しゅうじやくしてはならない。好むこと、きらうことから悲しみが起おこり、恐れが起おこり、束縛そくばくが起おこる。

五、鉄の錆さびが鉄からでて鉄をむしばむように、悪は人から出て人をむしばむ。

経きんがあつても読まなければ経きんの垢あか、家があつても破れてつくろわれないのは家の垢あか、身があつても怠おこたるのは身の垢あかである。

行いの正しくないのは人の垢あか、もの惜しみは施ほしの垢あか、悪はこの世と後の世の垢あかである。

しかし、これらの垢あかよりも激しい垢あかは無明むみょうの垢あかである。この垢あかを落とさなければ、人は清らかになることはできない。

恥じる心なく、烏からすのようにあつかましく、他人を傷つけて省みるところのない人の生活は、なしやすい。

謙遜けんそんの心があり、敬うやまいを知り、執着しゅうじやくを離れ、清らかに行い、智慧ちえ明らかな人の生活は、

なし難い。

他人の過ちは見やすく、おのれの過ちは見難い。他人の罪は風のように四方に吹き散らす、おのれの罪は、さいころを隠すように隠したがる。

空には鳥や煙や嵐あらしの跡なく、よこしまな教えにはさとりなく、すべてのものには永遠ということがない。そして、さとりの人には動揺がない。

六、内も外も、堅固に城を守るように、この身を守らなければならない。そのためには、ひとときもゆるがせにしてはならない。

おのれこそはおのれの主あるじ、おのれこそはおのれの頼りである。だから、何よりもまずおのれを抑えなければならない。

おのれを抑えることと、多くしゃべらずにじつと考えることは、あらゆる束縛を断ち切るはじめである。

日は昼に輝き、月は夜照らす。武士は武装をして輝き、道を求める人は、静かに考えて輝く。

眼と耳と鼻と舌と身の、五官の戸口を守らず、外界に引かれる人は、道を修める人ではない。五官の戸口をかたく守って、心静かな人が、道を修める人である。

七、執着しゅうしやくがあれば、それに酔よわされて、ものの姿をよく見ることができない。執着を離れると、ものの姿をよく知ることができる。だから、執着を離れた心に、ものはかえって生きてくる。

悲しみがあれば喜びがあり、喜びがあれば悲しみがある。悲しみも喜びも超え、善も悪も超え、はじめてとらわれがなくなる。

まだこない未来にあこがれて、とりこし苦勞あしをしたり、過ぎ去った日の影を追って悔いていれば、刈り取られた葦あしのように瘦やせしほむ。

過ぎ去った日のことは悔いず、まだこない未来にはあこがれず、とりこし苦勞をせず、現在を大切にふみしめてゆけば、身も心も健やかになる。

過去は追ってはならない。未来は待つてはならない。ただ現在の一瞬だけを、強く生

きねばならない。

今日すべきことを明日に延ばさず、確かにしていくことこそ、よい一日を生きる道である。

信は人のよき友、智慧は人のよい導き手である。さとりちえの光を求めて、苦しみの闇やみを免れるようにしなければならぬ。

信は最上の富とみ、誠は最上の味、功德くどくを積むのは、この世の最上の営みである。教えの示すとおりしに身と心とを修めて、安らかさを得よ。

信はこの世の旅の糧かた、功德は人の貴い住みか、智慧はこの世の光、正しい思いは夜の守りである。汚れない人の生活は減びず、欲に打ち勝つてこそ、自由の人といわれる。家のためにわが身を忘れ、村のためにわが家を忘れ、国のために村をも忘れ、さとりのためにはすべてを忘れよ。

ものみなうつり変わり、現われてはまた減びる。生滅しょうめつにわずらわされなくなつて、静けさ安らかさは生まれる。

THE BROTHERHOOD

な か ま

# 第一章 人のつとめ

## 第一節 出家しゅつけの生活

一、わたしの弟子になろうとするものは、家を捨て世間を捨て財を捨てなければならぬ。教えのためにこれらすべてを捨てたものはわたしの相続者であり、\*出家とよばれる。

たとえ、わたしの衣の裾すそをとって後ろに従い、わたしの足跡を踏んでいても、欲に心が乱れているならば、その人はわたしから遠い。たとえ、姿は出家であっても、彼は教えを見ていない。教えを見ない者はわたしを見ないからである。

たとえ、わたしから離れること何千里であつても、心が正しく静かであり、欲を離れているなら、彼はわたしのすぐそばにいる。なぜかという、彼は教えを見ており、教えを見る者はわたしを見るからである。

二、出家しゅつげの弟子は次の四つの条件を生活の基礎としなければならない。

一つには古布をつづり合わせた衣を用いなければならない。二つには托鉢たくはつによって食を得なければならぬ。三つには木の下、石の上を住みかとしなければならない。四つには牛の尿から作った薬ちんきやく（陳棄薬）のみを薬として用いなければならない。

食物を入れる容器を手にして戸こごとに食を乞うのは乞食こつじきの行ではあるが、それは他人に脅おびやかされたためでもなく、他人に誘われ欺あざむかれたためでもない。ただこの世のあらゆる苦しみを免れ、迷いを離れる道がここで教えられることを信じてなつたのである。

このように出家していながら、しかも欲を離れず、瞋いかりに心を乱され、五官を守ることができないとしたら、まことにふがいないことである。

三、自ら出家であると信じ、人に問われてもわたしは出家であると答える者は、次のように言うことができるに違いない。

「わたしは出家としてしなければならぬことは必ず守る。この出家のまことをもつ

て、わたしに施しをする人に、大きな幸いを得させ、同時に、わたし自身の出家しゅっけした目的を果たすようにしよう。」と。

さて、出家のしなければならぬこととは何であるか。慚ざんと愧きをそなえ、身と口と意ごころによる三つの行為と生活を清め、よく五官の戸口を守つて、享楽に心を奪われぬ。また、自分をたたえて他人をそしめるということをせず、怠なまけて眠りにふけることがない。

夕方には静坐せいざや歩行をし、夜半には右わきを下に、足と足を重ね、起きるときのことをよく考えて静かに眠り、明け方にはまた静坐したり歩行したりする。

また日常生活においてもつねに正しい心でなければならぬ。静かなところを選んで座を占め、身と心とをまっすぐにし、貪むさぼり、瞋いかり、愚かさ、眠け、心の浮わつき、悔い、疑いを離れて心を清めなければならない。

このように心を統一して、すぐれた智慧ちえを起こし、煩惱ぼんのうを断ち切つて、ひたすらさとりに向かうのである。

四、もし出家しゅっけの身でありながら、貪むさほりを捨てず、瞋いかりを離れず、怨うらみ、そねみ、うぬぼれ、たぶらかし、といった過おほちを覆おほい隠おほすことをやめないなら、ちようど両もろ刃ばの劍けんを衣えに包かんでいるようなものである。

衣えを着きているから出家しゅっけなのではなく、托鉢たくはつしているから出家しゅっけなのではなく、經よを誦よんでいるから出家しゅっけなのではなく、外形けいがただ出家しゅっけであるのみ、ただそれだけのことである。

形かたちがととのつても、煩惱ぼんのうをなくすことはできない。赤子あかごに衣えを着きせさせても出家しゅっけとよぶことはできない。

心を正ただしく統一いつし、智慧ちえを明あらかにし、煩惱ぼんのうをなくして、ひたすらさとりに向むかかう出家しゅっけ本来ほんらいの道みちを歩あく者ものでなければ、まことの出家しゅっけとはよばれない。

たとえ血ちは涸かれ、骨こつは碎くだけても、努力どつりくを加くえ、至いたるべきところへ至いたらなければならぬと決心けっしんし、努どめ励りきんだならば、ついには出家しゅっけの目的もくひくを果はたして、清きよらかな行ぎやういを成なしとげることができる。

五、出家しゅっけの道は、また、教えを伝えることである。すべての人びとに教えを説き、眠っている人の目を覚まさせ、邪見じゃけんな人の心を正しくし、身命しんみょうを惜しまず、広く教えをしなければならぬ。

しかし、この教えを説くということは容易でないから、教えを説くことを志す者は、みなほしけ仏の衣を着、仏の座すわに坐り、仏の室へやに入つて説かなければならぬ。

仏の衣を着るとは、柔和にゅうわであつて忍ぶ心を持つことである。仏の座に坐るとは、すべてのものをくう空と見て、執着しゅうじやくを持たないことである。仏の室に入るとは、すべての人に対して大慈悲だいじひの心を抱いだくことである。

六、またこの教えを説こうと思う者は、次の四つのことに心をとどめなければならない。第一にはその身の行いについて、第二にはそのことばについて、第三にはその願いについて、第四にはその大悲についてである。

第一に、教えを説く者は、忍耐の大地に住し、柔和であつて荒々しくなく、すべては

空であつて善悪のはからいを起こすべきものでもなく、また執着すべきものでもないと考え、ここに心のすわりを置いて、身の行いを柔らかにしなければならぬ。

第二には、さまざまな境遇の相手に心をくばつて、権勢ある者や邪悪な生活をする者に近づかないようにし、また異性に親しまない。静かなところにあつて心を修め、すべでは因縁によつて起こる道理を考へてこれを心のすわりとし、他人を侮らず、軽んぜず、他人の過ちを説かないようにしなければならぬ。

第三には、自分の心を安らかに保ち、仏に向かつては慈父の思ひをなし、道を修める人に対しては師の思ひをなし、すべての人びとに対しては大慈の思ひを起し、平等に教を説かなければならぬ。

第四には、仏と同様に慈悲の心を最大に發揮し、道を求めることを知らない人びとには、必ず教を聞くことができるようになってほしいと心に願ひ、その願ひに従つて努力しなければならぬ。

## 第二節 信者の道

一、仏教を信ずる者とは、三宝<sup>さんぼう</sup>、すなわち、<sup>ほとけ</sup>仏と教えと<sup>きょうだん</sup>教団を信ずる者のことであるということは、すでに説いた。

だから、仏教を信ずる者は、仏と教えと教団に対して、破れることのない信を抱<sup>いだ</sup>き、教えが命じている信者としての戒律を守らなければならない。

在家者<sup>ざいけしや</sup>としての戒とは、ものの命を取らず、盗まず、よこしまな愛欲にふけらず、偽りを言わず、酒を飲まないことである。

在家者はこの三宝に対する信と、在家者としての戒を保つとともに、他人にもこの信と戒を得させるようにしなければならない。親戚<sup>しんせき</sup>、友人、知人の間に同信の人をつくるように努めなければならない。そうすることによって彼らもまた仏の<sup>じひ</sup>慈悲に浴することができる。

三宝さんぼうに対する信を持ち、在家ざいけとしての戒を守ることは、さとりを得るためであるから、在家の愛欲の生活の中にあつても、愛着に縛られないようにしなければならない。

父母ともついには別れなければならない。家族ともついには離れなければならない。この世もついには去らなければならない。別れなければならないもの、去らなければならないものに心を縛られず、別離というものがない涅槃ねはんに心を寄せなければならない。

二、仏ほとけの教えを聞いて、信が厚く、退くことがなければ、喜びは自然にわき起こる。この境地に入れば、何ごとにも光を認め、喜びを見いだしてゆくことができる。

その心は清く柔らかに、常に耐え忍んで、争いを好まず、人びとを悩まさず、仏と教えと教団を思うから、喜びは自然にわきいで、光はどこにでも見いだされる。

信ずることによって仏と一体になり、我がという思いを離れているから、わがものを貪むさぼらず、したがって、生活に恐れがなく、そしられることをいとわない。

仏の国に生まれることを信じているから死を恐れぬ。教えの眞実と尊さを信じているから、人びとの前に出て、恐れることなく自分の信ずるところを言うことができる。また慈悲を心のもととするから、すべての人に対して好ききらいの思いがなく、心が正しく清らかであるから、進んであらゆる善を修める。

また順調の時も逆境のときも信仰を増し、恥を知り、教えを敬い、言つたとおりに行い、行ふとおりに言い、ことばと行いとが一致し、明らかな智慧をもつてものを見、心は山のように動かさず、ますますさとりの道に進むことを願う。

また、どんなできごとに出会つても、仏の心を心として人びとを導き、濁つた世の中にも、汚れた人びとの間にも交わつて、その人びとが善にうつるように尽くすのである。

三、だから、だれでもまず自ら教えを聞くことを願わなければならない。

だれかが「この燃え立つ火の中へ入れれば教えが得られる。」と言うなら、その火の中に入る覚悟を持たなければならない。

世界に満ちた火の中に分け入って仏の名を聞くことは、まことにその人の救いだからである。このようにして自ら教えを得て、広く施し、敬うべき人を敬い、仕えるべき人に仕え、深い慈悲の心をもつて他人に向かわなければならぬ。利己的であつたり、思うままにふるまうのは、道を行ふ人の行いではない。

このようにして教えを聞き、教えを信じ、他人をうらやまず、他人のことばに迷うことなく、自分のするしないについて省みることが肝心であり、他人のするしないを心にかけてはならない。何よりも自分の心を修めることが大切なのである。

仏を信じない人は、自分のことだけを思いわずらうから、心が狭く小さく、いつもこせこせと焦るのである。しかし、仏を信ずる人は、背後の力、背後の大悲を信ずるから、自然に心が広く大きくなり、焦らない。

四、また、教えを聞く人は、もとよりこの身を無常なものとし、苦しみの集まるものと見、悪の源と見るから、この身に執着しない。

しかしまた、この身を大切に養うことを怠おこたらない。それは楽しみを貪むさほるためではなく、道を得、道を伝えるためである。

この身を守らなければ命をまっとうすることができず、命をまっとうしなければ、教えを受けて身に行うことも、また教えを広く伝えることもできない。

河を渡ろうとする者はよく筏いかたを守り、旅をする人はよく馬を守るように、教えを聞く人はその身を大切に守らなければならない。

また仏ほとけを信ずる者は、着物を着るにも虚飾きよしくのためにせず、ただ羞恥しゆうぢのためにし、寒さ暑さを防ぐためにしなければならない。

食物をとるにも楽しみのためにせず、身をささえ養って教えを受け、または説くためにしなければならない。

家に住むにも同じく、身のためにし、虚栄のためにしてはならない。さとりさとりの家に住

み、<sup>ほんのう</sup>煩惱の賊を防ぎ、誤った教えの風雨を避けるためと、思わなければならない。

すべてこのように、何ごとも身のためを思わず、他人に対してもおごる思いをせず、たださとりのため、教えのため、他人のためと思つてしなければならぬ。

だから、家にあつて家族と一緒にいても、その心はしばらくも教えを離れない。慈悲<sup>じひ</sup>の心をもつて家族に従つてゐるが、手段を示して彼らに救いの道を教えるのである。

五、またこの仏教教団の在家者<sup>ざいけしや</sup>には、日常、父母に仕え、家族に仕え、自分に仕え、<sup>ぼんしけ</sup>仏に仕えるいろいろな心がけがある。

すなわち、父母に仕えるときには、一切を守り養つて、永く平和を得ようと思ひ、妻子と一緒にいるときには、愛着<sup>ろうごく</sup>の牢獄から脱しなければならぬものと思わなければならぬ。

音楽を聞いているときには、教えの楽しみを得ようと思ひ、室<sup>へや</sup>にいるときは、賢者の境地に入つて永く汚れを離れようと思わなければならない。

また、たまたま他人に施しをするときは、すべてを捨てて貪る心をなくそうと思い、集いの中にあるときには、諸仏の集いに入ろうと思い、災難にあつたときには、どんなことにも動揺しない心を得ようと願わなければならない。

また仏ほとけに帰依きえするときには、人びととともに大道を体得して、道を求める心を起こそうと願ひ、

教えに帰依しては、人びととともに深く教えの蔵に入つて、海のように大きい智慧ちえを得ようと願ひ、

教団に帰依しては、人びととともに大衆を導いて、すべての障害を除こうと願うがよい。

また、着物を着るなら、善根ぜんこんと慚愧ざんきを衣服とすることを忘れず、

大小便をするときは、心の貪りと瞋いかりと愚かさの汚れを除こうと願ひ、

高みに昇る道を見ては、無上の道へ昇つて迷いの世界を超えようと思ひ、低きに下る道を見ては、優しくへり下つて奥深い教えへ入ろうと願うがよい。

また、橋を見ては、教えの橋を作って人を渡そうと願ひ、

なげき悲しむ人を見ては、うつり変わって常なきものをなげく心を起こし、

欲を樂しむ人を見ては、幻の生活を離れてまことのさとりを得ようと願ひ、

おいしい食物を得ては、節約を知り、欲を少なくして執着しゅうじやくを離れようと願ひ、まずい食物を得ては、永く世間の欲を遠ざけようと願うがよい。

また夏の暑さの激しいときには、煩惱ぼんのうの熱を離れて涼しいさとの味わいを得たいと願ひ、冬の寒さの激しいときには、仏ほとけの大悲の温かさを願うがよい。

経を誦よむときには、すべての教えを保って忘れないようにと願ひ、

仏を思つては、仏のようになすぐれた眼まなこを得たいと願ひ、

夜眠るときには、身と口と意こころのはたらきを休めて心を清めようと願ひ、朝目覚めては、すべてをさとつて、何ごとにも氣のつくようになろうと願うがよい。

六、また仏教を信ずる者は、すべてのもののありのままの姿、すなわち、「\*空<sup>くう</sup>」の教えを知っているから、世の中の仕事、人間の間のいろいろのことを軽視せず、そのまま受け入れ、それをそのままさとり道の道にかなうようにする。

人間の世界のことは迷いであって意味がなく、さとり世界のことは尊い、という二つに分けることなく、世間のすべてのできごとの中にさとり道を味わうようにする。

\*<sup>むみょう</sup>無明に覆<sup>おお</sup>われた眼で見れば、世間は意味のない間違つたものとなるであろうが、<sup>ちえ</sup>智慧をもつて明らかになぐめると、そのままがさとり世界になる。

ものに、意味のないものと意味のあるものとの二つがあるのでなく、善いものと悪いものとの二つがあるのでない。二つに分けるのは人のはからいである。

はからいを離れた智慧をもつて照らせば、すべてはみな尊い意味を持つものとなる。

七、仏教を信ずる者は、このようにして、<sup>ほとけ</sup>仏を信じ、その信の心をもつて世の中のこと

とを尊く味わうが、またその心をもつて、身をへり下らせて他人に仕える。

だから、仏教を信ずる者にはおごる心がなく、へり下る心、他人に仕える心、大地のようにすべてを載せる心、すべてに仕えていとわない心、すべての苦しみを忍ぶ心、怠りのない心、すべての貧しい人びとに善根を施す心が起こる。

このように、人びとの貧しい心を哀れみ、すべての人びとの慈母となつてその心を育てようとする心は、そのまま、すべての人びとを父母のように敬い、自分の尊い善き師として崇める心である。

だから、仏教を信ずる者に対して、たとえ、百千の人びとが怨みを起こし、敵視し、害を加えようとしても、その心そのままになしとげることはできない。例えば、どのような毒でも、大海の水を汚し損なうことができないようなものである。

八、仏教を信ずる者は、また、省みておのれの幸せを喜び、この仏を信ずる心はまったく仏の力によるものであり、仏のたまものであると感謝する。

また煩惱ぼんのうの泥どろの中には、信仰心の種はないのであるが、この泥の中に仏ほとけの慈悲じひが植えつけられて、仏を信ずる心となつたことを、明らかに知る。

さきに説いたように、エーランダという毒樹の林に、チャンダナせんだん（梅檀）香木の芽が生えるはずはなく、煩惱の胸の中に、仏を信ずる種が芽生えるはずはない。

しかも、いま現に芽生えて歡喜かんぎの花が煩惱の胸の中に開くのは、その根はそこになく、別のところにあると知られるのである。その根は仏の胸の中にある。

仏を信ずる者も、我がの思いに立つときは、貪むさぼりと瞋いかりと愚かさの心から、他人をそねみ、ねたみ、にくみ、損そとなつたりする。しかし仏に帰ると、いまいうような大きな仏の仕事をするようになる。これはまことに、不可思議ふかしぎといわなければならぬ。

### 第三節 生活の指針

一、災いが内からわくことを知らず、東や西の方角から来るように思うのは愚かである。内を修めないで外を守ろうとするのは誤りである。

朝早く起き出て口をすすぎ、顔を洗い、東・西・南・北・上・下の六方を拜んで、災いの出口を守り、その日一日のしあわせを願うのは、世の人のなすところである。

しかし、<sup>ほとけ</sup>仏の教えにおいては、これと異なり、正しい真理の六方に向かって尊敬を払い、賢明に徳を行って、災いを防ぐのである。

この六方を守るには、まず四つの行いの汚れを捨て、四つの悪い心を押しとどめ、家や財産を傾ける六つの門をふさがなければならぬ。

この四つの行いの汚れとは、殺生と盗みとよこしまな愛欲と偽りである。四つの悪い心とは、貪りと瞋りと愚かさ<sup>いなか</sup>と恐れとである。家や財産を傾ける六つの門とは、酒を飲

んでふまじめになること、夜ふかしして遊びまわること、音楽や芝居におぼれること、賭事かけごとにふけること、悪い友だちと交わること、それに仕事を怠なまけることである。

この四つの行いの汚れを捨て、四つの悪い心を押しとどめ、家や財産を傾ける六つの門をふさいで、それからまことの六方を拝むのである。

このまことの六方とは何かというと、東方は親子の道、南方は師弟の道、西方は夫婦の道、北方は友人の道、下方は主従の道、そして、上方は教えを説く者に奉仕する道である。

まず、東方の親子の道とは、子は父母に対して五つのことをする。父母を養い、父母のために働き、家系を守り、家督を相続し、祖先に対して供物を捧げることである。

これに対して、親は子に五つのことをする。それは悪を遠ざけ、善をすすめ、知恵・技能を学ばせ、結婚させ、適当な時期に家督を譲ることである。互いにこの五つを守れば、東方の親子の道は平和であり、憂うれいがない。

次に南方の師弟の道とは、弟子は師に対し、座を立てて迎え、よく近くで仕え、熱心

に聴聞し、供養くようを怠おこたらず、慎つしんで教えを受ける。

それと同時に、師はまた弟子に対して、自ら身を正して指導し、自ら学び得たところをすべて正しく授け、よく会得したことを忘れないようにさせ、引き立てて名を表わすようにし、どこにあつても利益と尊敬が受けられるようにする。こうして南方の師弟の道は平和であり、憂うれいがない。

次に西方の夫婦の道とは、夫は妻に対し、尊敬と、礼節と、貞操とをもつて接し、権威をゆだね、装飾品を贈る。妻は夫に対し、すべての仕事をよく処理し、親族たちを適切に待遇し、貞操を保ち、家の財産を守り、家庭がうまくいくようにする。これによつて西方の夫婦の道は平和であり、憂うれいがない。

次に北方の友人の道とは、相手の足らないものを施し、優しいことばで語り、利益をはかり、常に相手を思いやり、正直に対処する。

また友人が悪い方に流れないように務め、万一そのような場合にはその財産を守つて

やり、また心配のあるときには相談相手になり、逆境のときは助けの手をのばし、必要な場合にはその家族を養うこともする。このようにして北方の友人の道は平和であり、<sup>うれ</sup>憂いが無い。

次に下方の主従の道とは、主人は使用人に対して、次の五つを守る。その力に応じて仕事をさせる。よい食物と給与を与える。病気のときは親切に看病する。美味<sup>おい</sup>しいものは分かち与える。適当な時に休養させる。

これに対して使用人は、主人に五つの心得をもって仕える。朝は主人よりも早く起き、夜は主人よりも遅く眠る。何ごとにも正直であり、仕事にはよく熟練する。そして主人の名誉を傷つけないよう心がける。こうして下方の主従の道は平和であり、憂いが無い。

次に上方の教えを説く者に奉仕する道とは、その教えを授ける師に対し、身も口も意<sup>こころ</sup>もともに情<sup>なさ</sup>けに満ち、丁寧<sup>ていねい</sup>にその師を迎え、その教えを聴いて守り、供養することである。

これに対して、教えを説く者は、悪を遠ざけ、善をすすめ、善い心をもって慈<sup>いづく</sup>しみ、

人の道を説き、よく教えを理解させ、人をして平安の境地に入らせるようにしなければならぬ。このようにして、上方の教えを説く者に奉仕する道は平和であり、憂うれいが無い。

六方を拝むというのは、このように、六方の方角を拜んで災いを避けようとする事ではない。人としての六方を守って、内からわいてくる災いを、自ら防ぎとめることである。

二、人は親しむべき友と、親しむべきでない友とを、見分けなければならない。

親しむべきでない友とは、貪むさほりの深い人、ことばの巧みな人、へつらう人、浪費する人である。

親しむべき友とは、ほんとうに助けになる人、苦楽をともにする人、忠言を惜しまない人、同情心の深い人である。

ふまじめにならないよう注意を与え、陰に回って心配をし、災難にあつたときには慰め、必要なときに助力を惜しまず、秘密をあばかず、常に正しい方へ導いてくれる人は、

親しみ仕えるべき友である。

自らこのような友を得ることは容易ではないが、また、自分もこのような友になるように心がけなければならぬ。よい人は、その正しい行いゆえに、世間において、太陽のように輝く。

三、父母の大恩は、どのように努めても報いきれない。例えば百年の間、右の肩に父をのせ、左の肩に母をのせて歩いて、報いることはできない。

また、百年の間、日夜に香水で、父母の体を洗いさすり、あらゆる孝養を尽くしても、または父母を王者の位に昇らせるほどに、努め励んで、父母をして栄華を得させても、なおこの大恩に報いきることはできない。

しかし、もし父母を導いて仏ほとけの教えを信じさせ、誤った道を捨てて正しい道にかえらせ、貪りむさぼを捨てて施しを喜ぶようにすることができれば、はじめてその大恩に報いることができるのである。あるいはむしろ、それ以上であるとさえいえよう。

四、家庭は心と心がつとも近く触れあつて住むところであるから、むつみあえば花園のように美しいが、もし心と心の調和を失うと、激しい波風を起こして、破滅をもたらすものである。

この場合、他人のことは言わず、まず自ら自分の心を守つてふむべき道を正しくふんでいなければならぬ。

五、昔、ひとりの信仰厚い青年がいた。父親が死んで、母親とともに親ひとり子ひとりの親しい生活を送っていたが、新たに嫁を迎えて三人の暮らしとなった。

初めは互いにむつみあい、平和な美しい家庭であつたが、ふとしたことしゅうとめから姑と嫁との心持ちに行き違いが起こり、波風が立ち始めると、容易には納まらず、ついに母は、若い二人を後に、家を離れることとなった。

母が別居すると、やがて若い嫁に男の子が生まれた。「姑と一緒にいる間は、口やかましいので、めでたいこともなかつたが、別居をすると、こうしてめでたいことができ

た。」と、嫁が言ったという噂が、さびしいひとり暮らしの姑の耳に入った。

姑は大変腹を立てて叫んだ。「世の中には正しいことがなくなった。母を追い出して、それでめでたいことがあるならば、世の中は逆さまだ。」

姑は、「この上は、正しさという主張を葬り去らなければ。」とわめき立て、気がふれたようになって、墓場へ出かけた。

このことを知ったインドラ神は、すぐに姑の前に現われて、ことの次第を尋ね、いろいろに諭したけれども、姑の心の角は折れない。

インドラ神はついに、「それではおまえの気のすむように、これから憎い嫁と孫を焼き殺してやろう。それでよいであろう。」と言った。

このインドラ神のことに驚いた姑は、自分の間違っていた心の罪をわびて、嫁と孫の助命を願った。息子も嫁もまたこのときには、いままでの心得違いを反省し、母を訪ねて、この墓場へ来る途中であった。インドラ神は姑と嫁とを和解させて、平和な家庭

にかえらせた。

自ら正しさを捨てなければ、教えは永久に滅びるものではない。教えがなくなるのは、教えそのものがなくなるのではなく、その人の心の正しさが失われるからである。

心と心の食い違いは、まことに恐ろしい不幸をもたらすものである。わずかの誤解も、ついには大きな災いとなる。家庭の生活において、このことは特に注意をしなければならぬ。

六、人はだれでもその家計のことについては、専心に蟻ありのように励み、蜜蜂みつばちのように努めなければならない。いたずらに他人の力をたのみ、その施しを待つてはならない。

また努め励んで得た富とみは、自分ひとりのものと考えて自分ひとりのために費してはならない。その幾分かは他人のためにこれを分かち、その幾分かはたくわえて不時の用にそなえ、また社会のため、教えのために用いられることを喜ばなければならない。

一つとして、「わがもの」というものはない。すべてはみな、ただいんねん因縁によって、自

分<sup>ぶん</sup>にきたものであり、しばらく預<sup>よ</sup>かっているだけのことである。だから、一つのもので、大切<sup>たいせつ</sup>にして粗末<sup>そまつ</sup>にしてはならない。

七、アーナンダ（阿難<sup>あなん</sup>）が、ウダヤナ王<sup>うだやな</sup>の妃<sup>き</sup>、シヤマヴァティーから、五百着<sup>ごひやくあき</sup>の衣<sup>ぎ</sup>を供養<sup>くよう</sup>されたとき、アーナンダはこれを快く受け入れた。

王<sup>わう</sup>はこれを聞いて、あるいはアーナンダ<sup>あなんだ</sup>が貪<sup>むさぼ</sup>りの心<sup>こころ</sup>から受けたのではあるまいかと疑<sup>うたが</sup>った。王<sup>わう</sup>はアーナンダ<sup>あなんだ</sup>を訪<sup>まね</sup>ねて聞いた。

「尊者<sup>そんじゆ</sup>は、五百着<sup>ごひやくあき</sup>の衣<sup>ぎ</sup>を一度<sup>いちど</sup>に受<sup>う</sup>けてどうしますか。」

アーナンダ<sup>あなんだ</sup>は答<sup>こた</sup>えた。「大王<sup>だいわう</sup>よ、多くの比丘<sup>びきう</sup>は破<sup>やぶ</sup>れた衣<sup>ぎ</sup>を着<sup>き</sup>ているので、彼らにこの衣<sup>ぎ</sup>を分<sup>わ</sup>けてあげます。」「それでは破<sup>やぶ</sup>れた衣<sup>ぎ</sup>はどうしますか。」「破<sup>やぶ</sup>れた衣<sup>ぎ</sup>で敷布<sup>しきふ</sup>を作りま<sup>す</sup>す。」「古い敷布<sup>しきふ</sup>は。」「枕<sup>まくら</sup>の袋<sup>ふくろ</sup>に。」「古い枕<sup>まくら</sup>の袋<sup>ふくろ</sup>は。」「床<sup>とこ</sup>の敷物<sup>しきもの</sup>に使<sup>つか</sup>います。」「古い敷物<sup>しきもの</sup>は。」「足<sup>あし</sup>ふきを作りま<sup>す</sup>す。」「古い足<sup>あし</sup>ふきはどうしますか。」「雑巾<sup>ぞうきん</sup>にしま<sup>す</sup>す。」「古い雑巾<sup>ぞうきん</sup>は。」「大王<sup>だいわう</sup>よ、わたしどもはその雑巾<sup>ぞうきん</sup>を細<sup>こま</sup>かに裂<sup>さ</sup>き、泥<sup>どろ</sup>に合<sup>あ</sup>わせて、家<sup>いへ</sup>を造<sup>つく</sup>るとき、壁<sup>かべ</sup>

の中に入れます。」

ものは大切に使わなければならない。生かして使わなければならない。これが「わがもの」でない、預かりものの用い方である。

八、夫婦の道は、ただ都合によって一緒になつたのではなく、また肉体が一つ所に住むだけで果たされるものでもない。夫婦はともに、一つの教えによって心を養うようにしなければならぬ。

かつて夫婦の鏡とほめたたえられたある老夫婦は、世尊せそんのところおもむに赴いて、こう言つた。「世尊よ、わたしどもは幼少のときから互いに知りあい、夫婦になつたが、いままで心のどのすみにも、貞操のくもりを宿したことはない。この世において、このように夫婦として一生を過ごしたように、後の世にも、夫婦として相まみえることができるように教えて戴いたきたい。」

世尊は答えられた。「二人ともに信仰を同じくするがよい。一つの教えを受けて、同

じように心を養い、同じように施しをし、<sup>\*</sup>智慧を同じくすれば、後の世にもまた、同じく一つの心で生きることができるのであろう。」

九、さとの道においては、男と女の区別はない。女も道を求める心を起こせば、「さとりを求める者」といわれる。

プラセーナジツト（波斯匿）王の王女、アヨーディヤー国王の妃、マツリカー（勝鬘）夫人は、このさとりを求める者であつて、深く世尊の教えに帰依し、世尊の前において、次の十の誓いを立てた。

「世尊よ、わたしは、今からさとりに至るまで、（一）受けた戒を犯しません。（二）目上の方々を侮りません。（三）あらゆる人びとに怒りを起こしません。（四）人の姿や形、持ち物に、ねたみ心を起こしません。（五）心の上にも、物の上にも、もの惜しみする心を起こしません。（六）自分のために財物をたくわえず、受けたものはみな貧しい人びとに与えて、幸せにしてあげます。（七）施しや、優しいことばや、他人に利益

を与える行いや、他人の身になって考えてあげることをしても、それを自分のためにせず、汚れなく、あくことなく、さまざまの心で、すべての人びとをおさめとりませぬ。(八)もし孤独のものや、牢獄ろうごくにつながれている者、または病に悩む者など、さまざまに苦しみにある人びとを見たならば、すぐに彼らを安らかにしてあげるために、道理を説き聞かせ、その苦しみを救ってあげます。(九)もし生きものを捕らえ、または飼ひ、あるいはさまざまな戒を犯す人を見たならば、わたしの力の続く限り、懲こらすべきは懲らし、諭さとすべきものは諭して、それらの悪い行いをやめさせます。(十)正しい教えを得ることを忘れません。正しい教えを忘れる者は、すべてにゆきわたるまことの教えから離れて、さとの岸にゆくことができませぬ。

わたしはまた、この不幸な人びとを哀あわれみ救うために、さらに三つの願いを立てます。(一)わたしはこのまことの願いをもって、あらゆる人びとを安らかにしてあげます。そして、その善根ぜんこんによって、どんな生を受けても、そこに正しい教えの智慧ちえを得るでありましょう。

(二)正しい教えの智慧を得たうえは、あくことなく、人びとに説いて聞かせます。

(三) 得たところの正しい教えは、体と命と財産を投げ捨てて、必ず守ります。」

家庭の真の意義は、相たずさえて道に進むところにある。この道に進む心を起こして、このマツリカー夫人ぶにんのように大きな願いを持つならば、まことに、すぐれた仏ほとけの弟子となるであろう。

## 第二章 仏国土の建設

### 第一節 むつみあうなかま

一、広い暗黒の野原がある。何の光もささない。そこには無数の生物がうようよしている。しかも暗黒のために互いに知ることがなく、めいめいひとりぼっちで、さびしきにおのきながらうごめいている。いかにも哀れな有様である。

そこへ急に光がさしてきた。すぐれた人が不意に現われ、手に大きなたいまつをふりかざしている。真暗闇まつくらやみの野原が一度に明るい野原となった。

すると、今まで闇をさぐ探つてうごめていた生物が立ち上がってあたりを見渡し、まわりに自分と同じものが沢山いることに気がつき、驚いて喜びの声をあげながら、互いに走り寄って抱きあい、にぎやかに語りあい喜びあった。

いまこの野原というのは人生、暗黒というのは正しい\*智慧ちえの光のないことである。心に智慧の光のないものは、互いに会っても知りあい和合することを知らないために、独り生まれ独り死ぬ。ひとりぼっちである。ただ意味もなく動き回り、さびしさにおののくことは当然である。

「すぐれた人がたいまつをかかげて現われた。」とは、\*仏ほとけが智慧の光をかざして、人生に向かったことである。

この光に照らされて、人びとは、はじめておのれを知ると同時に他人を見つけ、驚き喜んでここにはじめて和合の国が生まれる。

幾千万の人が住んでいても、互いに知りあうことがなければ、社会ではない。

社会とは、そこにまことの智慧が輝いて、互いに知りあい信じあつて、和合する団体のことである。

まことに、和合が社会や団体の生命であり、また真の意味である。

二、しかし、世の中には三とおりの団体がある。

一つは、権力や財力のそなわった指導者がいるために集まった団体、

二つは、ただ都合のために集まって、自分たちに都合よく争わなくてもよい間だけ続いている団体、

三つは、教えを中心として和合を生命とする団体である。

もとよりこの三種の団体のうち、まことの団体は第三の団体であつて、この団体は、一つの心を心として生活し、その中からいろいろの功德くどくを生んでくるから、そこには平和があり、喜びがあり、満足があり、幸福がある。

そして、ちようど山に降つた雨が流れて、谷川となり、次第に大河となつて、ついに大海に入るように、いろいろの境遇の人びとも、同じ教えの雨に潤されて、次第に小さな団体から社会へと流れあい、ついには同じ味のさとの海へと流れこむのである。

すべての心が水と乳とのように和合して、そこに美しい団体が生まれる。

だから正しい教えは、実にこの地上に、美しいまことの団体を作り出す根本の力であつて、それは先に言つたように、互いに見いだす光であるとともに、人びとの心の凹凸おとつを平らにして、和合させる力でもある。

このまことの団体は、このように教えを根本の力とするから、\*教団といひ得る。

そしてすべての人は、みなその心をこの教えによつて養わなければならぬから、教団は道理としては、地上のあらゆる人間を含むが、事実としては、同信の人たちの団体である。

三、この事実としての団体は、教えを説いて在家ざいけに施すものと、これに対して衣食を施すものと、両者相まつて、教団を維持し拡張し、教えの久しく伝わるように努めなければならぬ。

それで、教団の人は和合を旨とし、その教団の使命を果たすように心がけなければならない。僧侶そうりよは在家を教え、在家は教えを受け教えを信じるのであり、したがって両者に和合があり得るのである。

互いに和らぎむつみあつて争うことなく、同信の人とともに住む幸せを喜び、慈しみ交わり、人びとの心と一つになるように努めなければならない。

四、ここに教団和合の六つの原則がある。第一に、慈悲のことはを語り、第二に、慈悲の行いをなし、第三に、慈悲の意を守り、第四に、得たものは互いに分かちあい、第五に、同じ清らかな戒を保ち、第六に、互いに正しい見方を持つ。

このうち、正しい見方が中心となつて、他の五つを包むのである。

また次に、教団を榮えさせる二種の七原則がある。

(一) しばしば相集まつて教えを語りあい、

(二) 互いに相和して敬い、

(三) 教えをあげめ尊んで、みだりにこれをあらためず、

(四) 長幼相交わるとき礼をもつてし、

(五) 心を守って正直と敬い<sup>うやま</sup>を旨とし、

(六) 閑かな<sup>しず</sup>ところにあつて行いを清め、人を先にし、自分を後にして道に従い、

(七) 人びとを愛し、来るものを厚くもてなして、病めるものは大事に看護する。この七つを守れば教団は衰えない。

次に、(一) 清らかな心を守って雑事の多いのを願わず、

(二) 欲なきを守って貪<sup>むさぼ</sup>らず、

(三) 忍辱<sup>にんじく</sup>を守って争わず、

(四) 沈黙を守って言わず、

(五) 教えを守っておごらず、

(六) 一つの教えを守って他の教えに従わず、

(七) 儉約を守って衣食に質素であること。この七つを守れば教団は衰えない。

五、前にも言ったように、教団は和合を生命とするものであり、和合のない教団は教団ではないから、不和の生じないよう、生じた場合は、速やかにその不和を除き去るよう努めなければならない。

血は血によって清められるのではなく、恨みは恨みによって報いられるものではない。ただ恨みを忘れることによってなくすことができる。

六、昔、長災王ちやうさいおうという王があつた。隣国の兵を好むブラフマダッタ王に国を奪われ、妃と王子とともに隠れているうちに、敵に捕らえられたが、王子だけは幸いにして逃れることができた。

王が刑場の露と消える日、王子は父の命を救う機会をねらつたが、ついにその折もなく、無念に泣いて父の哀あはれな姿を見守つていた。

王は王子を見つけて、「長く見てはならない。短く急いではならない。恨みは恨みなきによってのみ静まるものである。」と、ひとり言のようにつぶやいた。

この後王子は、ただいぢらずに復讐ふくしゅうの道をたどつた。機会を得て王家にやとわれ、王に接近してその信任を得るに至つた。

ある日、王は獵に出たが、王子は今日こそ目的を果たさなければならぬと、ひそかにはかつて王を軍勢から引き離し、ただひとり王について山中を駆け回つた。王はまったく疲れはてて、信任しているこの青年のひざをまくらに、しばしまどろんだ。

いまこそ時が来たと、王子は刀を抜いて王の首に当てたが、その刹那せつな父の臨終りんじゆうのことばが思い出されて、いくたびか刺そうとしたが刺せずにいるうちに、突然王は目を覚まし、いま長災王ちやうさいおうの王子に首を刺されようとしている恐ろしい夢を見たと言う。

王子は王を押さえて刀を振りあげ、今こそ長年の恨みうらを晴らす時が来たと云つて名をあげたが、またすぐ刀を捨てて王の前にひざまずいた。

王は長災王の臨終のことばを聞いて大いに感動し、ここに互いに罪をわびて許しあい、王子にはもとの国を返すことになり、その後長く両国は親睦しんぼくを続けた。

ここに「長く見てはならない。」というのは、恨みうらを長く続かせるなどということである。「短く急いではならない。」というのは、友情を破るのに急ぐなどということである。

恨みはもとより恨みによつて静まるものではなく、恨みを忘れることによつてのみ静まる。

和合の教団においては、終始この物語の精神を味わうことが必要である。

ひとり教団ばかりではない。世間の生活においても、このことはまた同様である。

## 第二節 仏の国

一、前に説いてきたように、\*教団が和合を主として、その教えの宣布せんぷという使命を忘れないときには、教団は次第にその円周を大きくして、教えが広まってゆく。

ここに教えが広まるというのは、心を養い修める人が多くなつてゆくことであり、いまままでこの世の中を支配した\*無明むみょうと愛欲の魔王が率いる貪りむさぼと瞋りいかと愚かさとの魔軍

が退いてここに<sup>\*智慧と光明と信仰と</sup>歡喜<sup>かんぎ</sup>とが、その支配權を握ることになる。

悪魔の領土は欲であり、闇であり、争いであり、劍であり、血であり、戦いである。そねみ、ねたみ、憎しみ、<sup>あざむ</sup>欺き、へつらい、おもねり、隠し、そしてすることである。

いまそこに、智慧が輝き、<sup>\*慈悲が潤い</sup>、信仰の根が張り、歡喜の花が開き、悪魔の領土は、一瞬にして<sup>\*仏の国</sup>になる。

さわやかなそよ風や、一輪の花が春の来たことを告げるように、ひとりがさとりを開けば、草木国土、山河大地、ことごとくみな仏の国となる。

なぜならば、心が清ければ、そのいるところもまた清いからである。

二、教えのしかれている世界では、人びとの心が素直になる。これはまことに、あくことのない大悲によって、常に人びとを照らし守るところの仏の心に触れて、汚れた心も清められるからである。

この素直な心は、同時に深い心、道にかなう心、施す心、戒を守る心、忍ぶ心、励む心、静かな心、智慧ちえの心、慈悲じひの心となり、また方便ほうべんをめぐらして、人びとに道を得させる心ともなるから、ここに仏ほとけの国が、立派にうち建てられる。

妻子とともにある家庭も、立派に仏の宿る家庭となり、社会的差別の免れない国家でも、仏の治める心の王国となる。

まことに、欲にまみれた人によって建てられた御殿が仏の住所ではない。月の光が漏れこむような粗末な小屋も、素直な心の人を主あるじとすれば、仏の宿る場所となる。

ひとりの心の上にうち建てられた仏の国は、同信の人を呼んでその数を加えてゆく。家庭に村に町に都市に国に、最後には世界に、次第に広がってゆく。

まことに、教えを広めてゆくことは、この仏の国を広げてゆくことにほかならない。

三、まことにこの世界は、一方から見れば、悪魔の領土であり、欲の世界であり、血の戦いの場ではあるが、この世界において、仏のさとりを信じる者は、この世を汚す血

を乳とし、欲を慈に代え、この世を悪魔の手から奪い取って、仏の国となそうとする。

一つの柄杓を取って、大海の水を汲み尽くそうとすることは、容易ではない。しかし、生まれ変わり死に変わり、必ずこの仕事を成しとげようとするのが、仏を信ずるものの心の願いである。

仏は彼岸に立つて待っている。彼岸はさとりの世界であって、永久に、貪りと瞋りと愚かさど苦しみと悩みとのない国である。そこには智慧の光だけが輝き、慈悲の雨だけが、しとしとと潤している。

この世にあつて、悩む者、苦しむ者、悲しむ者、または、教えの宣布に疲れた者が、ことごとく入って憩い休らうところの国である。

この国は、光の尽きることのない、命の終わることのない、ふたたび迷いに帰ることのない仏の国である。

まことにこの国は、さとりの楽しみが満ちみち、花の光は智慧をたたえ、鳥のさえずり

も教えを説く国である。まことにすべての人びとが最後に帰ってゆくべきところである。

四、しかし、この国は休息のところではあるが、安逸あんいつのところではない。その花の台うてなは、いたずらに安楽に眠る場所ではない。真に働く力を得て、それをたくわえておくところの場所である。

仏ほとけの仕事は、永遠に終わることを知らない。人のある限り、生物の続く限り、また、それぞれの生物の心がそれぞれの世界を作り出している限り、そのやむときはついにない。いま仏の力によって彼岸ひがんの浄土に入った仏の子らは、再びそれぞれ縁ある世界に帰って、仏の仕事に参加する。

一つの灯ともしびがともると、次々に他の灯に火が移されて、尽きるところがないように、仏の心の灯も、人びとの灯に次から次へと火を点じて、永遠にその終わるところを知らないであろう。

仏の子らも、またこの仏の仕事を受け持つて、人びとの心を成就じょうじゆし、仏の国を美しく飾るため、永遠に働いてやまないのである。

### 第三節 仏の国をささえるもの

一、ウダヤナ王の妃<sup>ひめ</sup>シヤマヴァアティーは、あつく世尊<sup>せそん</sup>に帰依<sup>きえ</sup>していた。

妃は王宮の奥深くにいて外出しなかった。侍女<sup>じじよ</sup>のウッタラーは、記憶力がよくて、いつも世尊の法座につらなり、教えを受けて世尊のことばのとおりを妃に伝え、これによって、妃の信仰は、いよいよその深さを増したのであった。

第二の妃、マーガンディヤは、シヤマヴァアティーをねたんでこれを殺そうと企て、ウダヤナ王にいろいろ中傷した。ついに心を動かした王は、シヤマヴァアティーを殺そうとした。

そのときシヤマヴァアティーは、従容<sup>しゅうよう</sup>として王の前に立ったが、王は妃の慈悲<sup>じひ</sup>に満ちた姿に打たれて矢を放つこともできず、ついに心が解けて、妃にその粗暴なふるまいをわびた。

マーガンディヤは、いっそうの怒りを増して、ついに王の留守の間に、悪者と謀<sup>はか</sup>つてシヤマヴァアティーの奥殿に火を放った。妃はあわて騒ぐ侍女たちを教え励まして、驚き

も恐れもせず、世尊せそんの教えに生きながら従容しじょうようとして道じゆんに殉じた。ウツタラーもまた、火の中で死んだ。

シヤマヴァティーは、在家ざいけの信女しんによのうち慈心第一、ウツタラーは多聞たもん第一とたたえられた。

二、釈迦族の王、マハーナーマは世尊のいところであるが、世尊の教えを信ずる心が至つてあつく、誠を尽くして帰依きえする信者であつた。

コーサラ国の凶悪な王、ヴァイルーダカ王が釈迦族を攻め滅ぼしたとき、マハーナーマは出ていつて王に会い、城民を救いたいと願つたが、凶悪な王が容易に許さないのを知つて、せめて自分が池の中に沈んでいる間だけ、門を開いて自由に城民を逃げさせてほしいと頼んだ。

王は、人間の水中に沈んでいる間だけのことなら、わずかな時間であるからと考えて、これを許した。

マハーナーマは池に沈み、城門は開かれ、人びとは喜んで逃げのびた。しかし、いつまでもたつてもマハーナーマは浮かび上がらなかつた。彼は池に入つて髪を解き、柳の根

に結びつけ、自らを殺して人びとを救ったのであった。

三、ウトパラヴァアルナー（蓮華色）は神通第一の比丘尼であつて、マウドガルヤーヤナ（目連）に比べられる人であり、多くの比丘尼を引き連れて常に教化し、比丘尼の中のすぐれた指導者のひとりであつた。

デーヴァダッタ（提婆達多）がアジャータシヤトル（阿闍世）王をそそのかして、世尊に対して反逆を企てたが、後、王が世尊に帰依してデーヴァダッタを顧みないようになり、城門に至つたがさえぎられて入ることができず、門前にたたずんでいたとき、おりから門を出てくるウトパラヴァアルナーを見て、にわかには怒り出し、その大力にまかせてこぶしをあげて頭を打つた。

ウトパラヴァアルナーは痛みを忍んで僧坊に帰つたが、弟子たちの驚き悲しむのを慰めて「姉妹よ、人の命ははかられない。ものみなすべて無常であり、無我である。さとの世界ばかりが、静かであつて頼るべきところである。努め励んで道を修めるように。」と教え、静かに死についた。

四、かつて殺人鬼として、多くの人びとの命をあやめ、世尊せそんに救われて仏弟子となつたアングリマールヤ(指鬘しゅまん)は、その出家\*しゅつけ以前の罪のために、托鉢たくはつの途上で、人びとの迫害を受けた。

ある日、町に入って托鉢し、恨みのある人びとに傷つけられて、全身血にまみれながら、やっと僧坊に帰つて、世尊の足を拜して喜びのことばをのべた。

「世尊、わたくしはもと、無害という名でありながら、愚かさのために、多くの人の命を損そこない、洗えども清まらない血の指を集めたために、指鬘しゅまんの名を得ましたが、いまでは三宝さんぼうに帰依きえしてさとの\*ちえ智慧を得ました。馬や牛を御ごするには、むちや綱を用品ぎょうますが、世尊は、むちも綱もかぎも用いずに、わたくしの心をととのえて下さいました。今日わたくしは、わたくしの受けるべき報むくいを受けました。生も願わず死も待たずに、静かに時の至るのを待ちます。」

五、マウドガルヤーヤナ(目連もくれん)はシャーリプトラ(舍利弗しゃりほつ)と並び称せられた世尊の二大弟子のひとりであった。世尊の教えが水のように人びとの心に浸みこむのを見て、

異教の人びとがねたみを起こし、いろいろな妨げをした。

しかし、どんな妨げも、まことの教えの広まってゆくのをとめることはできないで、異教の人びとは、世尊せそんの手足をもぎ取ろうとして、目連もくれんをねらった。

一度ならず二度までも、その人びとの襲撃を避け得た目連も、ついに三度めに大勢の異教者に取りまかれて、その迫害を受けることとなった。

目連は、骨も砕くだけ肉もただれ、暴逆の限りを静かに受け忍んで、さとり的心に何のたじろぎもなく、平和な心で死についた。

## 増支部

比丘たちよ、一人の人のこの世に生まるるは、多くの人の利益のため、多くの人の幸せのため、又、世間をあわれむがため、人と天との利益と幸せのために生まるるなり。その一人の人はたれぞ。これ如来、応供、正等覚なり。比丘たちよ、これこそその一人の人なり。

比丘たちよ、一人の人のこの世に現わるるは、難きことなり。その一人の人はたれぞ。これ如来、応供、正等覚なり。これこそその一人の人なり。

比丘たちよ、この世に見ること難きは、一人の希有の人のこの世に生まるることなり。その一人の人はたれぞ。如来、応供、正等覚なり。これこそその一人の人なり。

比丘たちよ、一人の人のこの世を去りて、多くの人の愁い嘆くことあり。その一人の人とはたれぞ。如来、にょらい、おうぐ、しょうとうかく、正等覚なり。これこそその一人の人なり。

比丘たちよ、一人の人のこの世に生まるとは、比ぶべきものなき人の生まるるなり。その一人の人とはたれぞ。これ如来、おうぐ、しょうとうかく、正等覚なり。これこそその一人の人なり。

比丘たちよ、一人の人のこの世にいづるは、大いなる眼、まなこ、大いなる明り、あか、大いなる光の現わるるなり。その一人の人とはたれぞ。これ如来、おうぐ、しょうとうかく、正等覚なり。これこそその一人の人なり。

(増支部一―二三)

各章節の典拠（よりどころ）



	頁	行		頁	行
第三節			二、大般涅槃經……………	三四	一
一、法華經第十六、壽量品……………	二三	一	二、楞伽經……………	三四	七
第三章			三、華嚴經第三十二、		
第一節			如來性起品……………	三四	一二
一、華嚴經第五、如來光明覺品……………	二六	一	四、法華經第二十五、普門品……………	三五	九
二、大般涅槃經……………	二七	二	四、大般涅槃經……………	三五	一一
二、華嚴經……………	二七	五	五、法華經第二、方便品……………	三六	五
三、金光明經第三、三身品……………	二七	九	五、法華經第三、譬喻品……………	三六	八
第二節					
一、華嚴經……………	三〇	一			
一、華嚴經第三十四、入法界品……………	三〇	四	第一章		
一、阿弥陀經……………	三〇	六	第一節		
二、華嚴經……………	三〇	八	一、パリー、律藏大品一—六・		
二、雜阿含經三十五卷五……………	三一	二	パリー、相應部五十六—十一		
三、大般涅槃經……………	三一	四	—十二、轉法輪經……………	四〇	一
第三節			二、パリー、本事經百三……………	四一	一一
一、パリー、中部八一—七十七、			三、パリー、中部二、一切漏經……………	四二	四
善生優陀夷大經……………	三三	一	三、四十二章經……………	四二	七

「おしえ」



五、維摩經、入不二品……………	六四	一	頁	行
六、華嚴經第三十四、入法界品……………	六六	二		
七、楞伽經等……………	六六	五		
第三章				
第一節				
一、パーリ、律藏小品一一五……………	六八	一		
一、パーリ、律藏小品五十二一……………	六九	三		
二、首楞嚴經……………	六九	七		
第二節				
一、首楞嚴經……………	七四	七		
三、大般涅槃經……………	七六	五		
四、法華經第七、化城喻品及び 首楞嚴經……………	七六	八		
四、華嚴經第三十二、如來性起品……………	七七	四		
四、大般涅槃經……………	七七	六		
五、梵網經……………	七七	九		
六、大般涅槃經……………	七八	二		
第四章				
第一節				
一、勝鬘經……………	八四	一		
二、パーリ、増支部二一十一……………	八五	五		
二、パーリ、本事經九十三……………	八五	九		
二、パーリ、律藏小品……………	八五	一二		
三、パーリ、増支部三一六十八……………	八六	五		
四、パーリ、増支部三一三十四……………	八七	一		
五、方廣大莊嚴經……………	八七	九		
五、パーリ、律藏小品一六六、 轉法輪經……………	八八	一		
五、パーリ、中部二一十四、 苦蘊小經……………	八八	三		
六、大般涅槃經……………	八八	九		
七、パーリ、本事經二十四……………	八九	九		
一、大般涅槃經……………	七九	一	頁	行
第二節				

頁 行

第二節

一、パーリ、中部五十一、

カンダラカ経……………

九一 五

二、パーリ、増支部三一―百三十……………

九二 三

二、パーリ、増支部三一―百十三……………

九二 一二

第三節

一、パーリ、本事経百……………

九三 七

一、譬喩経……………

九四 三

二、大般涅槃経……………

九五 二

三、パーリ、増支部三一―六十二……………

九六 八

四、パーリ、増支部三一―三十五……………

九七 五

五、パーリ、長老尼偈註……………

九八 七

第四節

一、無量寿経下卷……………

九九 九

第五章

第一節

一、無量寿経上卷……………

一〇六 一

三、無量寿経下卷……………

一一〇 二

頁 行

四、觀無量寿経……………

一一一 七

第二節

一、阿弥陀経……………

一一四 八

「はげみ」

第一章

第一節

一、パーリ、中部二、一切漏経……………

一二〇 一

二、パーリ、中部二十六、

聖求経……………

一二一 一〇

三、パーリ、相應部

三十五―二百六……………

一二二 五

四、四十二章経……………

一二三 七

七、パーリ、中部十九、雙考経……………

一二六 一

八、パーリ、法句経註……………

一二六 二

第二節

一、パーリ、増支部三一―百十七……………

一二八 一

二、パーリ、中部三一―二十一、

鋸喙經……………	一二八	頁
五、パーリ、中部三一二十三、		
蟻塚經……………	一三二	三
六、パーリ、本生經四―四百九十七、		
マータンガ・ジャータカ……………	一三三	一〇
八、四十二章經……………	一三七	五
九、四十二章經……………	一三七	一〇
十、四十二章經……………	一三八	七
十一、パーリ、増支部二―四……………	一四〇	一
第三節		
一、雜寶藏經……………	一四〇	九
五、百喩經……………	一四六	一二
十、大智度論……………	一五〇	一二
十一、大般涅槃經……………	一五二	八
十二、雜寶藏經……………	一五三	九
第二章		
第一節		
一、パーリ、中部七―六十三、		

箭喩經……………	一五八	頁
二、パーリ、中部三一二十九、		
大樹心喩經……………	一六〇	六
三、仏昇忉利天為母說法經……………	一六一	一〇
四、パーリ、長老偈註……………	一六二	四
五、パーリ、中部三一二十八、		
大象跡喩經……………	一六四	六
五、大般涅槃經……………	一六五	二
六、百緣經……………	一六五	一〇
七、大般涅槃經……………	一六七	七
八、大品般若波羅蜜經第八十八、		
常啼品……………	一七〇	一
九、華嚴經第三十四、入法界品……………	一七一	四
第二節		
一、パーリ、増支部三一八十八……………	一七三	四
一、パーリ、増支部三一八十一……………	一七四	二
一、パーリ、増支部三一八十二……………	一七四	六
二、般泥洹經上卷……………	一七五	一
三、パーリ、中部十四―百四十一、		

分別聖諦經……………	一七五	一	二、パーリ、増支部五―三十二……………	一八七	九
四、般泥洹經上卷……………	一七六	一二	二、維摩經……………	一八七	一二
六、パーリ、増支部五―十六……………	一七七	一一	二、首楞嚴經……………	一八八	七
七、華嚴經第六、明難品……………	一七八	六	三、無量壽經下卷……………	一八八	一〇
七、大般涅槃經……………	一七九	一	四、パーリ、相應部一―四―六……………	一八九	四
七、雜寶藏經……………	一七九	八	四、華嚴經第三十三、離世間品……………	一八九	五
八、金光明經第二十六、捨身品……………	一八〇	五	五、華嚴經第二十四、十忍品……………	一九〇	二
九、大般涅槃經……………	一八一	一	五、金光明經第四、金鼓品……………	一九〇	七
十、パーリ、長老偈註……………	一八二	一	五、觀無量壽經……………	一九〇	一一
十一、パーリ、本生經五十五……………	一八二	一二	五、無量壽經……………	一九一	一
十二、パーリ、本事經三十九・四十……………	一八四	五	六、大般涅槃經……………	一九一	四
十二、大般涅槃經……………	一八四	九	七、パーリ、中部二―十六、		
十二、大般涅槃經……………	一八四	一一	心荒野經……………	一九二	四
十二、パーリ、増支部五―十二……………	一八五	一	七、無量壽經下卷……………	一九三	三
十三、般泥洹經……………	一八五	四	第 四 節		
十三、首楞嚴經……………	一八五	九	一、法句經……………	一九四	一
第 三 節			七、パーリ、相應部一―四―六……………	二〇二	四
一、パーリ、相應部五十五―二十一			七、増一阿含經……………	二〇二	一〇
・二十二……………	一八六	一〇	七、大般涅槃經……………	二〇二	一一

「なかま」

頁 行

第一章

第一節

頁 行

一、パリー、本事經百・中部

一―三、法嗣經……………二〇四 一

一、パリー、本事經九十二……………二〇四 三

二、パリー、律藏大品一―三十……………二〇五 一

三、パリー、中部四―三十九、

馬邑大經……………二〇五 一〇

四、パリー、中部四―四十、

馬邑小經……………二〇七 一

五、法華經第十、法師品……………二〇八 一

五、法華經第十、法師品……………二〇八 四

六、法華經第十四、安樂行品……………二〇八 九

第二節

一、パリー、相應部

五十五―三十七……………二一〇 一

一、パリー、増支部三―七十五……………二一〇 七

一、パリー、相應部

五十五―三十七……………二一一 一

一、パリー、相應部

五十五―五十四……………二一一 三

二、華嚴經第二十二、十地品……………二一一 六

三、大般涅槃經……………二一二 一〇

五、華嚴經第七、淨行品……………二一五 六

六、仏昇切利天為母說法經……………二一八 一

七、華嚴經第二十一、

金剛幢菩薩十廻向品……………二一八 一一

八、大般涅槃經……………二一九 一一

第三節

一、六方礼經……………二二二 一

三、パリー、増支部二―四……………二二六 五

四、パリー、増支部三―三十一……………二二七 一

五、パリー、本生經四百十七、

迦旃延本生……………二二七 六

六、六方礼經……………二二九 七

六、法句譬喻經四……………二二九 一二

八、ビルマ仏伝……………	二三一	頁		
九、勝鬘經……………	二三二	三	四	行
第二章				
第一節				
一、大般涅槃經……………	二三五	一		
二、パーリ、増支部三―百十八……………	二三七	一		
三、パーリ、相應部……………	二三八	八		
四、パーリ、律藏大品、				
十一―一二……………	二三九	三		
四、長阿含經第二、遊行經……………	二三九	七		
五、パーリ、律藏大品、				
十一―一二……………	二四一	一		
第二節				
一、パーリ、相應部……………	二四三	八		
二、中陰經……………	二四四	六		
二、維摩經……………	二四四	九		
三、大般涅槃經……………	二四五	一		
三、阿弥陀經……………	二四六	一〇		
四、無量壽經……………	二四七	二		

四、維摩經……………	二四七	頁		
第三節				
一、パーリ、法句經註一……………	二四八	一		
一、増一阿含經三十四―二……………	二四八	五		
二、パーリ、法句經註一……………	二四九	四		
三、増一阿含經五―一……………	二五〇	二		
三、根本有部律破僧事十……………	二五〇	五		
四、鶡掘摩經……………	二五一	一		
五、増一阿含經二十六……………	二五一	一		

付

録

# 仏教通史

## — インドから日本への流れ —

### 一、インド

それは人類の精神史の上における最大のエポック・メイキングな世紀の一つであった。『アジア』の光はそのときあかあかと中インドに点ぜられたからであり、あるいは、別の言い方をするならば、そのときそこに滾々として湧きいでた智慧と慈悲の泉は、やがて多くの世紀にわたってアジアの人びとの心を潤すものとなって今日に及んでいるからである。

ゴータマ・ブツダ、後の仏教者たちによって「シャーキヤムニ」(釈迦牟尼)すなわち「シャーキヤ(釈迦)族よりいでし聖者」とたたえられるその人が、家郷を立ちいでて出家し、南の方マガダに至って、ついにかの菩提樹のもとにおいて正覚を成就したのは、およそ西暦前第五世紀のなかばごろと推定される。それより、「大いなる死」(大般涅槃)に至るまでの四十五年、彼は智慧と慈悲の教えをひっさげて、たゆみない伝道説法の生涯を続けた。その結果、同じ世紀の終わりごろまでには、大いなる法城が、中インドの国々及び諸部族の間に不動に築かれていった。

マウリヤ王朝の第三世アショーカ(阿育、在位西暦前二六八—二三二)王の時代に至って、ゴータマ・ブツダの教えは、インドの全域にゆきわたり、さらに、その領域を越えて、遠く国外にまで伝播される機会を持つことを得た。

マウリヤ王朝は、インドにおける最初の統一王朝であった。その第一世チャンドラグプタ王（在位西暦前三一七―二九三ごろ）のころ、その領域はすでに、北はヒマラーヤ山系、東はベンガル湾、西はヒンドウークシユ山脈、そして南はヴィンディヤ山脈の南に及んでいたが、アシヨールカ王はさらに、その南方カリンガ等を討つて、その領域をデカン高原にまで拡大した。

この王はもともと性格が狂暴で、人びとは彼を呼んでチャンダーシヨールカ（恐るべき阿育）と称したと伝えられるが、カリンガの征服にあたって、そこに展開された惨状を見てから性格が一変し、それが動機となつて、智慧と慈悲の教えの熱心な信奉者となつた。それ以来、この王が仏教者としてなした多くの事業の中で、次の二つのことがもつとも注目される。

その一つは、いわゆる「アシヨールカの刻文」、すなわち、仏教による施政方針を石柱もしくは磨崖に刻んだものを領内の各地に建立させたことである。第二は全インドにブッダの教法を弘布するとともに、さらに、王はその領域を越えて、使節を四方の国々に遣わし、智慧と慈悲の教えの旨を伝えさせた。なかでも、特に注目されることは、それらの使節のあるものは、遠くシリア、エジプト、キレネ、マケドニア、エピルスにまで派遣されたことであつて、そのとき仏教は広く西方の世界に伝えられた。また、そのとき、スリランカに遣わされた使節マヘーンドラは「うるわしきランカードヴィーバ（スリランカ島）にうるわしき教えを樹立する。」ことに成功して、いわゆる南方仏教の基点をかの島にうち立てた。

## 二、大乘の興起

後代の仏教者はしばしば「仏教東漸」という表現を用いる。ところが、紀元前の諸世紀においては、仏教の顔は明らかに西に向けられていた。その顔が、やがて東に向けられ始めたのは、およそ紀元前後のころのことであつ

た。だが、そのことに語り及ぶまえに、我々はまず、仏教の中における大きな変化について語っておかなければならない。それはほかでもない、「大乘」と称する「新しき波」が、いまや仏教の中に顕著な存在として姿を現わしてきたことについてである。

その「新しき波」が、いつごろ、いかにして、何びとによつて生まれいでたか、その始動のいきさつは、だれも明確に語ることはできない。それについて我々が指摘し得ることは、わずかに、第一には、それは明らかに進歩主義の比丘たちによつて、いわゆる大衆部の思想的系譜の中に生まれたものに相違ないということであり、第二には、紀元前の一・二世紀から紀元後の第一世紀ごろにかけて、いわゆる大乘經典なるものうちの重要なもののいくつかがすでに存在していたということである。そして、それらの大乘經典を背景として、ナーガールジュナ（龍樹）のすぐれた思想的活動が展開されるに及んで、大乘仏教なるものの姿は、いまやあざやかに仏教史の舞台の前景に現われいずるに至つたのである。

長い仏教の歴史の中において、大乘仏教が果たした役割はまことに大きい。やがて説き至ろうとする中国の仏教ならびに日本のそれのごときも、ほとんどその歴史のすべてを通して、まったく大乘仏教の影響のもとにあつた。それも決して不思議なことではあるまい。なんとなれば、そこには大衆の救済という新しい理想がうち出されておき、その理想を實踐するものとして、菩薩という新しい人間像が描き出されておき、さらに、それらを支えるものとして、大乘の思想家たちが造り営んだ形而上学あるいは心理学の領域における知的成果もまたすばらしいものであつた。かくして、それは、明らかにゴータマ・ブツダの教法の系譜につらなりながらも、他方、いくたの新しきものを智慧と慈悲の教えの流れに注ぎ加えた。それによつて、仏教は、いよいよ、熱情にあふれたものとなり、エネルギーに富めるものとなり、滔々たる大河のさまをなして、東方の国々を潤すこととなるのである。

### 三、西域

中国の人びとがはじめて仏教を知ったのは、西域を通してであった。したがって、インドから中国への仏教の道を語るものは、まずシルクロードのことから語り始めなければならない。その道が、アジアの中央部の荒涼たる地域をつらぬいて、西洋と東洋とをつらねる貿易路として開かれたのは、紀元前第二世紀の末ごろ、漢の武帝（西暦前一四〇—八七）の時代であった。そのころ漢の領土は、はるか西の方にまで広げられ、それに接する西方の国々、大宛（Ferghana）（だいえん）、康居（Sogdiana）（かうきょ）、大月氏（Tukhara）（たいげつし）、安息（Parthia）（あんそく）の諸国には、かつてアレクサンドロス大王によって吹きこまれた商業精神がまだ活発に生きていた。そして、それらの国々をつらねる古代貿易路においては、中国の絹がもつとも大きな役割を担う商品であった。それがシルクロードの名のいずるところであった。しかし紀元前後のころから、仏教を中心として始められたインドと中国の間の文化接触もまた、まずこの貿易路によって行われた。かくして、シルクロードはまた仏教の道であったということを得るのである。

### 四、中国

中国人の仏教受容の歴史は、まず經典の招来とその翻訳の事業を主題としてつづられねばならない。その最初のもの、古来から、後漢の明帝の永平年間（A. D. 五八—七六）迦葉摩騰らによってもたらされ訳出された『四十二章經』であるとされているが、今日では、それは疑わしい伝説にすぎないとされている。その確証されるものは、紀元一四八年から一七一年ごろにわたり、洛陽において訳業に従事した安世高の仕事である。それ以来、北宋（九六〇—一二二九）の時代に至るまで、中国の仏教經典翻訳の事業は、およそ千年にわたって営み続けられた。

その初期においては、經典をもたらし、かつ、その翻訳の中心的役割を演じた人びとは、たいてい西域からきた僧たちであった。例えば、いまの安世高は安息国すなわちパルティアからきた人であり、第三世紀のころ洛陽に来て『無量壽經』を訳した康僧鎧は康居すなわちサマルカンド地方の人であったし、あるいは、『正法華經』の訳者として知られる竺法護は月氏の出であつて、第三世紀の後半から第四世紀のはじめまで、洛陽または長安にあつた。そして、第五世紀のはじめ龜茲よりきたたつた鳩摩羅什に至つて、中国の訳經は一つの頂点に達した。

そのころから、中国よりインドに至つて梵語をまなび、法を求める人びと、すなわち、入竺求法僧の活動が始まつた。その先駆者は法顯(三三九—四二〇頃)であつて、彼は隆安三年(三九九)長安を出発し、十五年を経て帰国した。そのもつとも有名なものは玄奘(六〇二—六六四)であつて、彼は貞觀元年(六二七)に出発し、貞觀十九年(六四五)に帰国した。その間じつに十九年に及んだ。さらに義淨(六三五—七二三)は、咸亨二年(六七二)海路によつてインドに向かい、二十五年の後、同じく海路によつて帰国した。

彼らは、自らインドに至つて梵語をまなび、自ら經典を選んで持ち帰り、かつ、帰国の後には、たいてい訳經の中心的役割を演じた。ことに、玄奘がしめした語学力は、群を抜くものがあつて、彼の精力的な訳業によつて中国の經典翻譯の歴史はもう一つの頂点を迎えた。学者たちが、鳩摩羅什によつて代表される旧來の翻譯を「旧訳」と称し、玄奘以後の新しいそれを「新訳」とよぶのは、その故をもつてである。

そのようにして訳出されたほう大な量にのぼる仏教經典をよりどころとして、彼らの営んだ思想的・宗教的営みもまた、しだいに中国化の傾向を強める。そこには、かの民族の資質や要求や自信が明らかに現われている。その初期のころ、彼らが特に般若部の經典が語る「空」の形而上学に心を傾けたのもその現われであつた。やがて彼らが、いわゆる「小乘」を捨てて、もっぱら「大乘」に心を傾けるものとなつたのもその現われであつた。さらに、その傾向は、天台宗においてようやく顯著となり、禪宗の出現に至つてきまつたといふことを得るであらう。

中国において天台宗が大成したのは、第六世紀の後半、その第三祖、天台大師こと智顛（五三八―五九七）によつてであつた。彼は、中国の生んだ仏教思想家の中の代表的な頭脳であつて、彼の頭脳が生んだ「五時八教」の教判は、その後長きにわたつて、中国ならびに日本の仏教に広い影響力をもつた。

思うに、中国においては、諸経はその成立の順序にかかわりなく招来され、招来されるにしたがつて翻訳された。いまやそのほう大な量にのぼる諸経を前にして、その成立と価値づけをいかに理解するか、その見解を示すことによつて仏教全体の理解の仕方を語り、かつ、自己の依つて立つところを示すことが必要であつた。それがいわゆる教判もしくは教相判釈の課題であつた。その意味において、教判とは、何よりもまず中国的な思想の営みであるが、その中でも、智顛の教判はもつとも整然たるものであり、したがつてまた、見事な説得力をもつていたのである。だが、近代の仏教研究の出現とともに、その支配的影響はついに終わりをつけた。

中国仏教の歴史の中において、その「最後に至れるもの」は禪宗であつた。その初祖とされるものは、外国の沙門、菩提達磨（一五二―二八）であるが、彼によつてまかれた種が、中国仏教の精華として大いなる花を開いたのは、第六祖、慧能（六三八―七一三）以後のことであつて、第八世紀以後、相ついで人材を輩出し、数世紀にわたる禪の隆盛を招来した。

彼らの所懐を問えば、「仏祖正伝」といい、また「教外別伝」と語る。しかるに、中国にあつては、「教」とは、さしあたり、経にはかならない。その故にこそ、中国人は、経の招来と翻訳に努力を傾けて、すでに幾世紀にも及ぶ。しかるに、いま彼らはそれらの功をほかにして、別伝ありとなし、ひたすらに対座して、仏祖の正伝するところとなす。その不思議な言説の機微を尋ね至つてみれば、そこには、中国人の資質に深く根を下ろした仏教の新しい考え方があつて、それを支えていることが知られる。それはもはや中国人の仏教以外の何ものでもなかつた。しかも、ゴータマ・ブツダの教えは、その新しき流れをとり加え、ますます滔々たる大河となつて、東方の国々を潤し來つたのである。

## 五、日本

日本仏教の歴史は第六世紀に始まる。紀元五三八年、欽明天皇の朝廷に、百済くだらの王が使臣をもつて仏像・経巻を献じたのが、この国に仏教の伝来した始まりである。それ以来、この国の仏教の歴史は、すでに千四百年を越える。

その長い歴史の中に、わたしどもは、三つの焦点を結んで考えてみる事ができる。

その第一の焦点は、第七・八世紀の仏教の上に結ばれる。それを物件をもつていえば、法隆寺の建立こうりゅう(六〇七)より東大寺の建立(七五二)に至る時代である。その時代を回顧するにあたって、思い忘れてならないことは、かの時代のアジア全体にわたって、異常な高まりをしめしていた文化の潮うしほのことである。西の方の文明が深い暗黒の中に閉じこめられていたそれらの世紀にあつて、東の方の文明は、目を見張るような活発にして雄大な動きを繰り広げていた。中国でも、西域でも、インドでも、南海の国々でも、知的、宗教的、そして芸術的な活動が力強く営まれていた。仏教がそれらの動きを互に結びつけて、広大なヒューマニズムの潮が東方の世界を洗っていた。そして、あの絢爛けんらんたる法隆寺や雄大な東大寺の建立と、それらをめぐる多彩な宗教的ならびに芸術的活動など、それらの世紀の新しい日本文化の動きは、すべて、かの荒漠こうぼくたるアジア全域にわたる文化の潮の、最東端におけるいぶきであつたと知られる。

長い間、なお未開の状態にあつたこの国の民族が、いま大いなる文化の潮をあびて、ぱつと一時に文化の花を開く、それがそれらの世紀におけるこの国の人びとのめぐりあわせであつた。そして、その国際的な文化の主たる担い手が仏教にほかならなかつたのである。したがつて、その時代の寺院は国際的な明るい文化の中心であつた。僧侶は新しい知識のリーダーであつた。経典は優れた思想の乗物であつた。そこには、一つの宗教というよりも、ずっと広汎こうはんな、大いなる文化そのものがあつた。それがかの世紀における初伝の仏教の真相であつた。

やがて第九世紀に入ると、最澄（七六七―八三二）・空海（七七四―八三五）という二人の偉大なる仏教者が現われ、いわゆる平安仏教とよばれる、初めての日本仏教とでもいふべき宗派を創設するのである。ややもすると貴族たちのひまつぶしに流れがちになりつつあった仏教を、本来の修行という立場でとらえ、それまでの都会中心の仏教を、山の中に持ちこんで、そこに修行の根本道場を確立した。その後三百年余、この二人の流れである天台と真言とが、主に朝廷や貴族を中心として栄えたのである。

その第二の焦点は、第十二・三世紀の仏教の上に結ばれる。そこには、法然（一一三三―一二二二）親鸞（一一七三―一二六二）道元（一二〇〇―一二五三）日蓮（一二二二―一二八二）など、この国の生んだすぐれた仏教者たちがあつた。今日においても、わたしどもは、この国の仏教について語ろうとすれば、これらの人びとの名をほかにしては語ることを得ない。では、何のゆえをもつて、これらの世紀のみが、かくもすぐれた仏教者たちを輩出させたのであろうか。それは一つの大きいなる共通の課題が彼らの前にあつたからである。その共通の課題とは何か。それは仏教の日本的受容であつたということをいひ得るであらう。

かくいへば、あるいは問う者があるであらう。仏教はすでにそのときよりはるか以前に伝来していたのではなにかと。歴史的事実はそのとおりである。だが、それをこの国の人びとが、じゅうぶんに消化し、変容して、まったく自己のものとする―そのような文化受容の仕事は、たいてい数百年の努力を必要とするのである。つまり、第七・第八世紀に始められた仏教受容の努力が、ようやく春來つて、万花一時に咲きそつ―それが第十二・三世紀における一群の仏教者たちの仕事であつた。

それ以後の日本仏教は、それらの仏教者たちによつて与えられた基盤の上に、その余榮を保つて今日に至つた。つまり、かの世紀に一群のすぐれた仏教者たちを輩出して以後は、日本仏教の歴史には、もはや輝かしい陽は輝かなかつた。だが、それ以後の日本仏教の歴史にも、もう一つ注目されるべきことがあるように思われる。それは近代の仏教学における原始仏教の研究の成果である。

この国の仏教は、その初伝このかた、中国仏教の影響のもとに、ほとんどまだいじょうったく大乘の仏教であつた。ことに第十二・三世紀のすぐれた仏教者たちの輩出以後は、宗祖たちを中心とする大乘の教えがその主流をなし今日に至る。そのようなこの国の仏教の歴史の中に、原始仏教の研究が起つてきたのは、およそ明治のなかば以後のことに属する。それによつて、宗祖のほかに教祖のあることを忘れていた人びとの前に、ゴータマ・ブツダの姿があざやかに再現され、大乘の教えのほかは顧かみなかつた人びとの前に、整然たるブツダの教法が明らかにされた。それはなお学問の領域にとどまり、新しい宗教的熱情をよび起すものとはなっていないけれども、少なくとも、この国の人びとの持つ仏教の知識は、大きく変化しつつある。わたしどもは、そつと、そこにスポットを当てて、第三の焦点とする。

## 仏教聖典流伝史

仏教とは釈尊一代四十五年間の説法をもととする宗教である。だから、釈尊のことは仏教においては絶対の權威を持つものであつて、たとえ仏教に八万四千の法門があり、多くの宗旨、宗派を数えるとはいへ、いづれも釈尊の説法を離れたものではない。そしてこの説法を書き記したものが、一切経とか大藏経などといわれる經典なのである。

釈尊は人間の平等を強く主張された。どんな人にも完全に理解できるような日常語で平易に教えを説かれたのである。そして八十歳で亡くなられるまで一日も休まず、多くの人びとのために教えを説き続けられたのである。

釈尊が亡くなられた後は、弟子たちはそれぞれ自分の耳で聞いた釈尊の教えを、人びとに伝えた。しかし、語り伝えられる間には聞き違いもあるうし、覚え違いも起こるであらう。しかも、釈尊のことは常に正確に伝えられなければならない。

すべての人が平等にその教えに接する機会が与えられなければならない。そこでここに釈尊の教えを、間違いない形で後世に伝えるために、長老たちが集まつて、教えの整理を行うことになつた。これを結集けつじゅうという。結集には大勢の長老比丘びくたちが集まり、各自の聞き伝えてきたことばや教えを誦よみえあつて、間違っていないかどうかどう

か、何か月にもわたって討議した。このことからしても、いかに敬虔けいけん、かつ慎重に、釈尊のことはを伝えようとしたかがわかる。こうして整理された教えは、やがて文字によって記録されるようになる。文字に書き下された釈尊の教えは、後に後世の高僧たちによって、注釈や解釈が加えられた。これを「論」という。仏陀の教えそのものと、後に加えられた論と、戒律の三つを「三藏さんぞう」という。三藏とは経藏きょうぞう、律藏りつぞう、論藏ろんぞう、の三つであり、藏とは「いれもの」の意味である。すなわち仏教の教えを収めてあるものという意味で、経とは仏陀の教えそのもの、律とは教団の戒律を説いたもの、論とは高僧たちによって書かれた注釈である。この三藏はほとんどすべての部派がそれぞれの伝統に従ったものを保持していたが、現在、完全な形で伝えられているのは、南方上座部のパーリ語によるもののみである。この「パーリ語三藏」は、南方に伝わった仏教諸国の共通の聖典として、重要な役割を果たしている。

中国に初めて仏教が伝わったのは、伝説によると後漢の明帝の永平十年（六七）だといわれているが、確実に聖典を伝えて翻訳したのは、それよりも八十四年の後、後漢桓帝の元嘉元年（一五二）であった。この当時すでにインドでは大乘仏教だいじょうが成立していたので、中国には初期の仏典と大乘の仏典が区別されることなく伝えられ、それより約千七百年以上にわたって中国語に仏典を翻訳する努力が続けられた。訳出された經典の数は千四百四十部五千五百八十六巻に及んでいる。これらの翻訳經典をひとまとめにして保存しようとする努力は、早く魏きの時代から始められた。しかしこれが印刷されるようになったのは北宋のころであった。このころから中国の高僧の著述も聖典の中に加えられるようになり、もはや三藏と呼ぶには適当でなくなつて、隋代になると「一切經」という名称が付され、唐代には「大藏經」とよぶようになった。

一方、チベットにおいても西暦七世紀ごろに仏教が伝わり、西暦九世紀から十一世紀にかけて、約百五十年の間、經典を翻訳する努力が続けられ、仏典のほとんどが翻訳された。

このほか、朝鮮、日本、スリランカ、カンボジア、トルコ、その他、東洋のあらゆることばをはじめとして、ラテン語、フランス語、英語、ドイツ語、イタリア語等の各国語に翻訳されているところから見ても、今や釈尊の恩恵は、世界のすみずみにまで及んでいるといつても過言ではない。しかし、ひるがえつてこれを内容から見ると、時代にして二千年を越える発達と変遷があり、量は万巻を越えるため、たとえ大蔵経が完全に備わつていても、これによつて釈尊の真意をつかむことは困難である。そこで大蔵経から重要なところをつかみ出して自己の信心の規範とし、よりどころとする必要がある。

仏教では釈尊のことばが最大のよりどころである。だから釈尊の教えは、我々の现实生活に対して最も深いつながりをもつた、親しみのあるものでなければならぬ。もしそうでなければ、万巻の聖典も、ついに我々の心をゆさぶることなく終つてしまふことになるからである。こういう意味で聖典は、少なくともいつも身につけている聖典は、量にして簡潔であること、質において一部に偏らず、よく全体を代表するに足るものであること、しかも正確であること、用語においてわれわれの日常語に親しいものであることが望まれるのである。

この聖典は、こういう敬虔にしてかつ慎重な配慮のもとに作られた。この聖典は、過去二千年数百年の大蔵の流れを承け継ぎ、釈尊の教えの海の中から生まれ出たものである。もとよりこれをもつて完璧と信ずるものではない。釈尊のことばは無限に深く、その徳は無尽にして容易にうかがい難い。共に同じ道を行ずる同信の叱正を請いつつ、版を重ねて、常によりよきもの、より真実なもの、より尊きものにしてゆきたいと心から願うものである。

## 仏教聖典の由来とあゆみ

この仏教聖典は、大正十四年（一九二五年）七月に、木津無庵氏を代表とする新訳仏教聖典普及会から出版された『新訳仏教聖典』をもととしてつくられたものである。

この初版本編纂にあたっては、山辺習学、赤沼智善の両教授を中心に、広く仏教学界の諸師が監修、編集の勞を寄せ、約五年の月日を経て出版された。

ここに仏教伝道協会は、木津無庵氏をはじめとする、原『新訳仏教聖典』を編纂された諸師に対して、甚深なる感謝と報恩の意を表するものである。

昭和に入つて『国民版仏教聖典』が同普及会で出版され広く全国に行き渡つた。昭和九年（一九三四年）七月に汎太平洋仏教青年大会が日本で開催されたとき、その記念事業の一つとして、前掲の『国民版仏教聖典』より、英語版仏教聖典『The Teaching of Buddha』が、D・ゴダード氏の協力を得て全日本仏教青年連盟の手によつて刊行された。

昭和三十七年（一九六二年）、仏教東漸七十周年を記念して、株式会社ミットヨ創業者沼田惠範氏が、同『英訳仏教聖典』を刊行した。昭和四十年（一九六五年）同氏が浄財を投じて財団法人仏教伝道協会を設立するや、同協会の事業として、この聖典を全世界に普及することが企画された。

この企画に従つて、昭和四十一年（一九六六年）に、新たに仏教聖典編集のための結果が行われた。メンバーは紀野一義、金岡秀友、石上善應、佐伯真光、松濤弘道、坂東性純、高瀬武三の七氏であり、増谷文雄氏、N・A・ワデル氏、清水俊輔氏などの協力も得て、ここに『日英対訳仏教聖典』が誕生した。

昭和四十七年（一九七二年）、この聖典をもとに金岡秀友、石上善應、花山勝友、田村完誓、高瀬武三のスタッフをもって編集作業が進められ、『英文仏教聖典』が刊行された。

次いで塩入亮達、高瀬武三、立川博、田村完誓、坂東性純、花山勝友（編集責任者）のスタッフによる結集が行われ、昭和四十八年（一九七三年）『和文仏教聖典』が刊行された。

更に昭和四十九年（一九七四年）、『英文仏教聖典』再編集のための結集が、R・スタイナー氏の協力のもとに、松濤弘道、坂東性純、佐伯真光、徳永道雄、田村完誓、花山勝友（編集責任者）によって行われ、先に刊行した『和文仏教聖典』と合せて『和英対照仏教聖典』が刊行された。

昭和五十三年には、鎌田茂雄、奈良康明の両氏を編集スタッフに迎え、さらに平成十三年（二〇〇一年）には、ケネス田中、米澤嘉康、渡辺章悟、前田專學（編集委員長代行）が新たにスタッフに加わった。

平成二十五年（二〇一三年）に、仏教伝道協会が財団法人より公益財団法人に移行するにあたり、前田專學（編集委員長）、石上善應、木村清孝、ケネス田中、竹村牧男、奈良康明、吉水千鶴子、米澤嘉康、渡辺章悟をメンバーとして新たに仏教聖典編集委員会が組織された。平成二十九年（二〇一七年）より竹村牧男編集委員長のもと、現代に即する聖典にするための結集が毎年行われている。

二〇一七年六月



# 生活索引

人生の意義……………	五	三	信 仰	信仰は火である……………	一八九	四
現実の世界……………	一〇〇	一一		信仰は三つの心をともなう……………	一九〇	七
理想の生き方……………	二四四	九		信仰は不思議なもの……………	一九一	一〇
誤った人生観……………	四七	三		信仰は真実の現われ……………	一九〇	一一
正しい人生論……………	四三	五		真実なものが見分け難いのは		
かたよった生活……………	六〇	六		(たとえ話)……………	七八	二
迷っている人へ(たとえ話)……………	一三二	三		仏性は正しい師によつてその		
人の生活(たとえ話)……………	九四	三		ありかを知らされる(たとえ話)……………	八〇	一一
愛欲の生活を送れば(たとえ話)……………	九三	七		仏性は煩惱 <small>ぼんのう</small> に包まれている		
老人と病人と死人が教えてくれるもの				(たとえ話)……………	七六	八
(物語)……………	九七	五		信仰を妨げるものは疑い……………	一九二	四
死は必ず訪れるもの(物語)……………	九八	七		仏は父、人はその子である……………	三六	八
この世にあつてだれもできない				仏の智慧は海のように広く深い……………	三五	三
五つのこと……………	五一	一〇		仏の心は大慈悲である……………	一五	一
世の中の四つの真理……………	五二	六		仏の慈悲は永遠のものである……………	一六	三
				迷いもさとりも心から現われる……………	五三	一
				凡人にとつては成し難いが		
				成せば尊い二十のこと……………	一三八	七



心の有様(たとえ話)……………	一一二	二	五
心は「我」ではない……………	五〇	二	二
心に執らわれるな……………	一〇	一	一
自己の心にうち克て……………	一六二	四	四
心の主となれ……………	一一	八	八
すべての悪は身・口・意から……………	九〇	一	一
言葉と心……………	一三〇	六	六
この身は借り物にすぎない(物語)……………	一五〇	二	二
この身は汚れに満ちている……………	一三六	四	四
貪るな……………	一〇	一	一
身・口・意の三つを清く保て……………	一一八	一	一
かたよらずに励め(物語)……………	一八二	一	一
<b>悩　　み</b>			
悩みは執らわれの心から起こる……………	四五	一	一
悩みをふせぐ方法……………	一三	三	三
迷いはさとのり入口である……………	六二	七	七
迷いからのがれる道……………	一一〇	一	一
煩惱の炎を消せば清涼のさとりが 得られる……………	一四九	二	二

愛欲こそ迷いのもと……………	八八	八	八
愛欲は花に隠れた毒蛇と思え……………	八九	一	一
火のついた家に執着をのこすな (たとえ話)……………	二〇	一	一
欲望は過ちのもと……………	一一一	二	二
この世は火中にあり……………	八五	二	二
人は名利に自らを焼く……………	一一三	七	七
財色の貪りによつて人は身を滅ぼす……………	一二三	〇	〇
賢い者と愚かな者の特質……………	一四〇	一	一
愚者は自分の悪に気がつかない (たとえ話)……………	一四八	四	四
愚者は結果だけを見て、他人を うらやむ(たとえ話)……………	一四八	六	六
愚者にありがちなこと(たとえ話)……………	一五五	二	二
<b>日　常　生　活</b>			
施して施しの思いを忘れよ……………	一七九	四	四
無財の七施……………	一七九	八	八
富を得る方法(物語)……………	一五三	九	九
幸福を生む方法……………	一三七	二	二

恩を忘れるな(物語).....	一四五	頁
人の性格.....	九二	行
仕返しを願うものには災いが		
つきまとうものである.....	一三七	
怨みを静める方法(物語).....	二四一	五
人のそしりに動かされるな(物語).....	一二六	六
衣・食・住のために生きている		一二
のではない.....	二一四	九
衣・食は楽しみのためにあるの		
ではない.....	一一一	二
食事の心得.....	二一七	四
着物を着るときの心得.....	二一六	九
寝る時の心得.....	二一七	一〇
寒さ、暑さに対する心得.....	二一七	六
日常生活の心得.....	二一五	一一
経		
濟		
物の使い方(物語).....	二三〇	三
財物は永遠に自分のものではない.....	二二九	九
自分のためにのみ財物をためるな.....	二三二	一一

富を得る方法(物語).....	一五三	頁
家		
庭		
家庭は心の触れあうところ.....	二二七	行
家庭を破る行い.....	二二一	一〇
父母の大恩に報いる道.....	二二六	一〇
親子の道.....	二二二	七
夫婦の道.....	二二三	六
夫婦は信仰を同じくせよ(物語).....	二三一	七
婦		
人		
婦人に対する男性の心得.....	一三五	一一
夫婦の道.....	二三一	四
理想の婦人の誓いと願ひ.....	二三二	八
出		
家		
の		
道		
法衣を着て、経を誦んでいるだけ		
では僧侶ではない.....	二〇七	四
僧侶は寺とその財の相続者		
ではない.....	二〇四	一
欲深きは真の僧侶ではない.....	二〇四	三
僧侶の保つべき真実の生活とは.....	二〇六	三

社 会

頁 行

罪人に対して……………二三三  
教師の心得……………二〇八  
九 三 行

社会の意義……………一三六

社会の現実相……………一〇〇

社会集団の型……………二三七

真の共同社会……………二三七

暗闇くらやみの野にさす光……………二三五

和合の人間関係……………二三七

社会集団における和合の法……………二三九

教団の理想……………二三八

仏教徒の社会的理想……………二四五

秩序を乱すものは共に滅ぶ

(たとえ話)……………一四六

ねたみ、争う者は共に滅ぶ

(たとえ話)……………一四六

老人を尊敬せよ(物語)……………一四〇

師弟の道……………二二二

友人の道……………二二三

友を選ぶ法……………二二五

雇傭者こいひしと労働者の心得……………二二四

頁 行



# 用語解説 (五十音順)

この解説に含まれている言葉には、本文では、各節の最初に出てくるものに\*印が付してある。

因縁 (いんねん) (heu-pratyaya)

因と縁とのことである。因とは結果を生じさせる直接的原因、縁とはそれを助ける外的条件である。あらゆるものは因縁によって生滅するので、このことを因縁所生などという。この道理をすなおに受け入れることが、仏教に入る大切な条件とされている。世間では転用して、悪い意味に用いられることもあるが、本来の意味を逸脱したものであるから、注意を要する。なお縁起という場合も、同様である。

廻向 (えこう) (parinama)

自分のなしたよい行為をふり向けることで、これに、自分自身の未来のさとりにふり向ける場合と、他の人びとにふり向ける場合とがある。現在一般に世間で使われているものは、「死んだ人が、この世でなした悪行の罪を消して、来世での良い結果を得るように」という願いをもつて、葬式や法事の際の読経の功德によって死者の冥福を祈念する、という形の廻向である。

縁起 (えんぎ) (pratyasamupāda)

因縁○生起○の略である。あらゆる存在が互いに関係しあつて生起することである。

仏教の教えの基本となる思想である。あらゆる存在のもちつもたれつの関係を認めるから、「お蔭さまで」という感謝となり、報恩という奉仕も生まれてくる。この縁起思想は、さらに哲学的な展開を遂げ、煩瑣な組織をもつに至る。転じて寺院や仏像の由来や伝説を指したり、吉凶をかつぐのに用いられるようになったりするが、本来の意味を忘れてはならない。

教団 (きょうだん) (sangha)

同じ教えを奉じて集まった人びとの集団をいう。一般に、教義を説き教える聖職者層と、教えを受け入れる信者から構成される。仏教では古来、これをサンガと称した。しかし厳密には初期においては出家者教団を指したと思われる。後に大乘が興起すると、菩薩という人間像を目指して実践する人びとの集まりは、在家、出家の区別を超えて連帯した教団となったとい

われる。組織としての教団は、現在では一宗一派についていわれている。

### 空 (sunyata)

存在するものには、実体・我がないと考える思想である。すべてのものは相縁り、相起こつて存在するにすぎないから、実体として不変な自我がその中に存在する筈がない。

したがって実体ありととらわれてはならないし、存在しないととらわれてもならないわけである。すべてのものは、人もその他の存在も相対的な関係にあり、一つの存在や主義にとらわれたり、絶対視したりしてはならない。般若経系統の思想の根本とされる。

### 解脱 (vimukti・vimoksa)

文字どおりに、この輪廻転生する迷いの世界という縛から解き離れて、涅槃とよばれるさとの境地へと脱出することである。そして、この迷いの世界から脱出して、永遠にさとの状態にとどまるものが、**仏陀**であり、そこでは一切の縛、すなわち煩惱から離れているので、

自由自在なのである。

### 業 (karma)

本来の意味は行為ということであるが、因果関係と結合して、行為のもたらす結果としての潜在的な力とみなされている。つまりわれわれの行為は必ず善悪・苦楽の果報をもたらすから、その影響力が業と考えられるに至っている。善い行為を繰り返し、積み重ねれば、その影響力が未来に及んで作用すると考えられている。なお業には、身・口・意の三種の行為があるとされる。

### 慈悲 (maiti-karuna)

仏教におけるもつとも基本的な倫理項目で、**慈**とは相手に楽しみを与えること、**悲**とは相手から苦しみを抜き去ることである。これを体得して、対象を差別せずに慈悲をかけるものが、**覚者**すなわち**仏**であり、それを象徴的に表現したものが、観音・地藏の両菩薩である。やさしくいうと、慈悲とは、**相手と共に喜び、共に悲しんであげる**ということになる。

## 出家 (pravrajāna)

家庭生活を捨離して、専ら道の修行を行うこと。またその実践者をいう。インドでは修道のために家庭を出て、宗教的実践の生活に入ることが、ごく普通のこととされていて、釈尊もそれに従って出家し、沙門（バラモン以外の修行者）となり、遂に悟りを開いて仏陀となり、仏教の開祖となった。在家信者に対して、出家修行者をはつきり区別する仏教教団の伝統は、日本では厳格とはいえない。

## 智慧 (prajñā)

普通に使われている「知恵」とは区別して、わざわざ仏教では「般若」の漢訳としてこの言葉を用いているが、正邪を区別する正しい判断力のこと、これを完全に備えたものが「仏陀」である。単なる知識ではなく、あらゆる現象の背後に存在する真実の姿を見ぬくことのできるもので、これを得てさとり境地に達するための実践を「般若波羅蜜」という。

## 中道 (madhyamā-praīpad)

偏見を離れた中正の道をいう。仏教の立場を指している。したがって仏教のそれぞれの流れでは、中道の思想は尊重され、高揚されてきた。中間の道という意味ではなく、とらわれを離れ、公平に現実を徹見する立場を形容しているわけだが、その内容は両極端を否定し、止揚する思想として表われてくる。例えば有・無の両極端、断・常の二見を否定する立場となる。一種の弁証法哲学といえないこともない。

## 涅槃 (nirvāna)

梵語の「吹き消す」という意味の、ニルヴァーナという単語の漢音写で、「滅」・「滅度」・「寂滅」などと訳される。丁度ローソクの火を吹き消すように、欲望の火を吹き消したものが到達する境地で、これに到達することを「入涅槃」といい、達したものを「仏陀」とよぶ。釈迦牟尼仏が亡くなった瞬間を「入涅槃」ということもあるが、肉体が減びたときに完全に煩惱

の火が消える、という考え方からで、普通は、三十五歳で仏ぼつになつたときに、涅槃ねはんの状態に達したと考えられている。

### 波羅蜜 (parāmitā)

パーラミターという梵語の漢音写で、度ととか、到彼岸とうひがんと訳される。此の迷いの岸である現実の世界から彼のさとの岸である仏の世界へと渡してくれる実践行のことで、普通六波羅蜜ろくぱみつといつて、六種類があげられる。六とは、布施・持戒・忍辱・精進・禪・定・智・慧のことで、日本では、春秋の彼岸ひがんとよばれる行事は、これらを実践するということから名づけられたのである。

### 仏 (ぶつ) (仏陀・Buddha)

梵語のぶつとれるものといふ意味の単語を漢字に音写したものが仏陀ぶつたで、その省略が仏ぶつであり、ほとけとも読ませる。普通、覺者かくしや・正覺者しょうかくしやと漢訳され、もともとは、仏教の創始者である、釈迦牟尼仏しやくか牟尼ぶつ（ゴータマ・シッター

ルタ）を指した。仏教の目的は、各人がこの仏の状態に到達することで、その手段や期間等の違いによって宗派が分かれている。

大乘仏教の場合、歴史上の仏である釈迦牟尼の背後に、種々な永遠の仏の存在が説かれるようになる。例えば、阿弥陀仏・大日如来・毘盧舍那仏・薬師如来・久遠実成の釈迦牟尼仏といった仏が、各宗派の崇拜の対象とか教主として説かれている。

なお日本では、死者のことを、ほとけとよぶが、これは浄土教の往生成仏おうじやうじやうぶつ、思想の影響で、死者が浄土に生まれ、そこで、仏になるという信仰に由来する。

### 仏性 (ぶつじやう) (buddhata・buddharata)

仏になる種子たねといったもので、あらゆる存在にこれを認めるところに仏教の特徴がある。覺りに達する潜在力・可能性といつてもよい。又、仏心ぶつしんといつてもよいが、一切衆生悉有仏性いっさいしゆじやうしつじやうぶつじやうという句にも表われているように、すべ

ての存在に、差別しないでこの仏性を認めたと  
ころに、仏教の平等説の立場が見られる。この内  
在する仏性を外に現わしたものを「仏」とよぶ。  
法ほふ（達磨・dharma）

さてれるものである。仏陀ぶつだによって説かれ  
た、眞実の教え」ということで、その具体的な  
内容は、三藏とよばれる、經（仏の説かれた教  
え）・律（仏の定めた日常規則）・論（經と律と  
に対する解釈や注釈）の三種の聖典である。こ  
れは、覺者である、佛かくむし陀だ・佛教徒の集まりで  
ある、僧伽そうぎあと共に、仏教の基本的なよりどこ  
ろである三寶さんぼうをなしている。

### 菩薩ぼさつ (bodhisattva)

元來、積尊じやくそんの成道じやうどう以前の修行時代を指す。悟  
りを求める人という意味である。大乘仏教が興  
起してからは、拡大解釈されて、大乘佛教徒を  
指すことになる。向上的には仏の悟りを目指し  
つつ、向下的にはすべての人びとを同様に仏の  
悟りへと導こうと努力する人間像を菩薩とよぶ

ようになる。さらに仏の慈悲じひや智慧ちえの働きの一  
部分をにない、仏の補佐役として人びとの悩み  
に応じて現われる、觀音とか地藏のような威神  
力のある救い手もそうよばれる。

### 煩惱ぼんごう (klesha)

悟りの実現を妨げる人間の精神作用のすべて  
を指している。人間の生存に直結する多くの欲  
望は身体や心を悩まし、かき乱し、煩わづらわせる。  
その根元は我欲・我執であり、生命力そのもの  
に根ざしているともいえる。貪むねまり、瞋いかり、愚か  
さがその根本であり、派生して多くの煩惱が数  
えられる。これらは悟りの実現に障害となるか  
ら、修道の過程で滅ばさなければならぬとい  
える。しかし生命力に直結しているものを否定で  
きないとして、悟りへの跳躍台として肯定する  
思想もある。

### 無我むが (anatman)

仏教の最も基本的な教義の一つで「この世界  
のすべての存在や現象には、とらえられるべき

「実体はない」ということである。それまでのインドの宗教が、個々の存在の実体としての、我々を説いてきたのに対し、諸行無常を主張した仏教が、永遠の存在ではあり得ないこの世の存在や現象に実体があるわけではない」と説いたのは当然である。なお、我々は他宗教という靈魂にあたるといえる。

### 無常 (anitya)

あらゆる存在が生滅変化してうつり変わり、同じ状態には止まっていけないことをいう。仏教の他宗教と異なる思想的立場を明示する一つである。あらゆるものは、生まれ、持続し、変化し、やがて滅びるといふ四つの段階を示すから、それを観察して「苦」であると宗教的反省の契機とすることが大切である。これもいろいろな学派の立場から、形而上学的な分析がなされてきたが、単なるペシミズム、ニヒリズムの暗い面のみを強調してはならない。生成発展も無常の一面だからである。

### 無明 (avidya)

正しい智慧のない状態をいう。迷いの根本である無知を指す。その心理作用が愚痴であるという。学派によつて分析、解釈はさまざまであるが、いずれも根源的な、煩惱を煩惱たらしめる原動力のようなものと捉えられている。したがって、例えばあらゆる存在の因果を十二段階に説明する十二因縁説では、最初に無明があると設定しているくらいである。生存の欲望の盲目的な意志と捉えてもよいであろう。

### 唯識 (vijñaptirāta)

この世のあらゆる存在と現象とは、人間のころから生まれたもので、実際にあるのは、このころだけなのだ、という説で、大乘仏教の中に現われたもの。即ち、眼耳鼻舌身意という六つの感覚器官がそれぞれの対象を認識する六つの識のほかに、第七、第八(阿頼耶識)の二識をたて、これら八つの識の働きが、この世に存在や現象を生じさせているのである。

輪廻りんね  
(samsāra)

過去世から現在世へ、更に未来世へと、生まれ変わり死に変わることを、輪がまわるのにとえたもので、輪廻転生りんねてんしょうという言葉もある。人間が、この迷いの世界からさどりの世界へと脱出しない限り、地獄じごく・餓鬼がき・畜生ちくじょうの三悪道や、それに阿修羅あじゅら・人間・天上を加えた六道の世界への転生を永遠に繰り返すのである。この輪廻の輪から抜け出したものが、仏陀ぶつだとよばれる。



## 仏教伝道協会について

仏教伝道協会のことを語るには、先ず一人の実業家沼田惠範氏（株式会社ミットヨ創業者）のことを語らなければならない。

彼は、去る昭和九年に現在の事業を始めたとき以来、事業の繁栄は天・地・人により、また人間の完成は智慧と慈悲と勇氣の三つが整つてのみできるものであるとして、技術の開発と心の開発をめぐして会社を設立した。世界の平和は人間の完成によつてのみ得られる。人間の完成をめぐす宗教に仏教がある。

彼は半世紀をこえる会社経営のかたわら、仏教伝道のために仏教音楽の普及と近代化を志し、仏教聖画や仏教聖典の普及に努めてきたが、昭和四十年十二月にこれら一切の仏教伝道事業を組織化し、これを世界平和の一助とするために私財を寄進した。

かくて仏教伝道協会は、仏教伝道の公の機関として発足した。仏陀の教えを遍く一切に及ぼし

て、すべての同胞と共にこの大智<sup>だいち</sup>と大悲<sup>だいひ</sup>の光に浴するにはどうしたらよいか。

仏教伝道協会は創設者の意志を引き継ぎ、この問題を永遠に問い続けてゆこうとするものである。約言すれば、仏教普及のためのあらゆる努力が仏教伝道協会の事業のすべてである。

この聖典は日本の長い歴史をふり返ったとき、我々が仏教文化をその誇りとしながら、真に日本人の経典といえるものを持たなかったことを反省して生まれたものである。

したがってこの聖典は、だれでも読める、読んで心の糧<sup>かて</sup>となる、どんな人でも、その机上に置いて、また外出時に携え、生きた釈尊<sup>しやくそん</sup>の大人格に触れることができるように作られている。

仏教伝道協会は、この聖典が一つでも多くの家庭に入り、一人でも多くの同胞の手に渡り、すべての人がひとしく教えの光に浴することのできる日のくることを願ってやまない。

合 掌